

でしげしげと見成つた。見られた方では、長い間の孤獨な旅から、急に人心地がついたやうに懐かしさうな微笑を湛へて、清の顔を見返へした。どこまでも沈着な、冷靜な人間らしかった。茫々と生え伸びた顔一面の髯の下から、それでもまだどんな抵抗や壓迫にも屈せない青春の血が、どこかに流れてゐるやうだつた。若いやうでもあり、非常に老けても見える顔立の持主だつた。

清は、しばらく無言で、この不思議な亡命客と對坐してゐると、何とも云はれぬ自分の現在の腑甲斐なさを痛感せぬわけには行かなかつた。その刹那の感謝は、もう一度彼を、繩暖簾を出はいりする労働者の群や、油の臭ひのする機械工場の日ぼてりのした表門や、佩劍の音といつしよに挫れる集會や、解散と同時に歌ひ出される××歌の節や、冷酒をあほりながら激論する同志の誰彼や、さう云つた日本にゐた頃の光景を、はつきりと記憶の底に喚び起したのであつた。

「俺は、アメリカへ來てから墮落してはゐないか？ 日本の同志の方がどんなに眞劍な氣持になつてゐるだらう！ 俺はセオリテカルにだけ社會主義者になつちまつたのぢやないか！ この

男に、俺は何を語ることが出來よう？」

かう思ふと、彼は、この訪問者を前に置いて、俄かに一種の不安に打たれはじめた。

「弱味を見せちやならないぞ！」

彼は、わざと放膽的に、ぐつと對手を大掴みにするやうな口吻で、言葉を切つた。

「日本の運動も、まだまだ幼稚なやうですな。」

本多の葉山は、かう嵩にかかつて云はれると、はつと面を伏せて、しばらく黙つてゐたが、「幼稚と云へば、幼稚ですな。サンデカリズムに走りたがる傾向は、政治的に梗塞されてゐる現在ではいかんともし難いやうです。ですが、ある點では、遙かにアメリカの組合主義などより發達してゐるやうにも思はれますよ。」

と、粘り氣のある聲で、怯るむ様子もなく答へた。

それから、清は急に話頭を轉じて、坂田の近況を尋ねた。葉山は、ほつりほつりと、言葉を捻りながら答へてゐたが、言葉の裏にはじりじりと他人を押し退けるやうな、冴えた階級闘争一點張りの強みを閃めかした。しばらく話してゐると、清は、何故かしら、この旅やつれのし

た、意外な訪問者は、ことさら日本からやつて来て、自分の意氣地ない現状を難詰しにかかつてゐるやうに思はれた。

「貴方、晩餐は？」

「……實は、先刻汽車で、何とか云ひましたね、あの大きいステーションへ着いて、着くといきなり貴方の働いて御出になる店の方へ御訪ねしたのですが、昨日から一食もやつてないんです。」

彼はくすむだ笑ひで、自分の空腹さをまぎらはした。

「や、さうですか。ぢや、宿の方もまだおきまりになつてないんですね。……ええと、實は、僕も今晚はね、ちよつと會合へ出なけりやならんことがありましてね、ゆつくり御話もしたいんですが、それは明日でも伺へますから、ともかくそこで晩餐をやりませう。それで、宿のことは、さつき貴方が階下で御會ひになつたでせう、あの婆さんに頼んで置けば、御歸へりになるまでには、寢床や部屋の準備をして置いてくれますよ。」

清は、そそくさと立ちあがつて、軽い方の服の上衣へ手を通すと、ちよつと鏡の前で髪

分け目を撫でて見て、對手を促がすやうに扉を開いた。

「お荷物は？」

敷居のところ、うす暗らい瓦斯火の燃えてゐる廊下を透かして見て、かう葉山に訊ねると立ちあがつた彼は、いまままで椅子の上へ置いて腰を掛けてゐたらしい、風呂敷包みを拾ひあげて清の卓の上へびたりと乗せながら笑つた。

「これだけです『Communist Manifesto』とノートが二冊。」

### 三

田舎者のやうな遅鈍さと執拗い好奇心をもつて何彼とくどく聴きたがる葉山と料理屋で別れると、やうやくのことで湖畔の公園へついたのは、約束の時間を一時間も過ぎた頃であつた。

清は、首を締めつけられるやうな苦しみで、途中いくどかクララの怒つた顔を懐ひ出しながら、電車を降りると、ゴルフのリンクになつてゐる廣い草原を斜につつきつて、貸ボートの小舎の横の、砂原へ出た。

幾組かの若い男女が、白い夏着で、その邊をぶらぶらあるいてゐるのが眼についた。砂原が牛の脊のやうに蜿つて、渚へ入り落ちたところに、一點の火が眼についた。酸漿のやうに紅らむだ火は、黄ろい砂地と、つい一二間手前まで寄せて来ては小砂を捲く白い波頭とを、ぼんやりと照らしてゐた。その光暈の中心點になつて、こつち向きに白い服を着た若い女が、帽子もかぶらずに、闇を透かして眺めてゐるのが、たしかにクララだつた。

「やア、どうも御待たせして、何とも云ひわけがありませんでした、コリンスさん。」

駆けつけた清は、帽子を脱ぐと、不器用に火の前へ立ちはだかつたまま挨拶した。

「何が貴方をこんなに遅くしたの？」

クララは、ルビーのやうな齒並を見せながら、ちよつと腕時計に眼を墜して、しづかに云つた。

「實は、その、今夜に限つて、意外な訪問者がやつて來ましてね。突然、日本の同志からの紹介狀で、主義者がやつて來たんです。弱つちまいましたが、貴女との約束があるんで、漸く切り抜けて來たんです。」

「日本から？——まあ、ここへ御坐りなさいな。貴方、焼いた馬鈴薯を召しあがる？」

「え、どうしたんです？」

「さつきから、貴方の御薯が、この火の下で焦げてゐるのよ。召しあがりながら、その不思議な訪問者の話を聴かして下さいな。」

クララは、ふつくらした兩の膝を立てながら、熱さうな手付で、燃やしてゐた船の破片の下を掻き廻はした。水兵の着るやうな、お俠なジャケットにはだかつた胸元に、ばちばちと燃えあがる焔が、眞紅の模様を描いて跳つた。彼女の眼は、堪えず清にむかつて、親しげに微笑むでゐた。

「そーら、こんなに黒くなつて待つてゐたのよ。」

飄輕にかう云つて笑ひながら、クララは、二つ三つの馬鈴薯を、砂の中からころがし出した。

清は、無言で彼女の動作を打成りながら、何か詩的な言葉で、普通の若い女とは變つた、いかにもロシアのインテリゲンツィアらしい彼女の好みを賞めたいと思つたが、相憎と思はしい言葉が英語で出て來なかつた。

「わたしの原始的な焼薯を召しあがつてごらんさい、そりあ、おいしいのよ。そして、その訪問者の方は？」

彼は、わくわくしながら、焼きつくほど熱い薯の塊を、克己主義者のやうにじつと掌へ載せて、こともなげに半分に裂いた。

「貴方は？」

「さう、戴きませうね、仲よく。」

クララは、仇氣なく答へて、薯の半分を手にとると、小鳥の鳴くやうな聲を出して、指先を耳朶へあてがった。薯は、湯氣を立てて砂の上へころがり落ちた。

「熱かつたんですか？——こりあ、失禮。どうも、失禮。ぢや、こつちのをおあがりなさい。

僕は、この一つを占領しますから。」

清はあつさりした口調で云つて、ふうふう手にもつた方の半分を吹いたあとで、繊細なクララの掌へそれを載せてやつた。載せるとき、彼は、ごくりと唾を呑みながら、わざと彼女の指をきゅーつと握つて、心持膝頭を女の方へすすめた。

「有難う。でも、貴方辛棒強いわね。あんな熱いのを平氣で抑へてゐらつしやるんだもの。」

彼女は、握ぎられた指先をかすかに動かしながら、つかぬことを云つた。小鼻と唇の間に、優しい微笑が、糸のやうな皺を引いた。

「——でも、よく待つてゐて下すつたですな。僕は、貴女がひどく腹を立てて、ぶりぶりしながら、お宅へ歸へつていらつしやるのを想像して、氣が氣ぢやなかつたんですよ。」

「わたし、めつたに腹を立てるなんてことありませんわ。それに、貴方が御約束を破りなされるやうな方だとは信じてゐませんしね。」

さう答へて、小粒のチョコレートをでも噛むやうに、彼女は皮を剥いた薯へ、品よく前歯を立てた。清は、もうすこし女の方へ近よらうとしたが、二人の間には、カーペンタアの『Love's Coming of Age』が、心得顔に控へて居つた。

「クララー！僕は、——僕は、貴女に感謝します。」

「まあ、嫌ね、そんなにあらたまつて。」

しばらく二人は、無言で薯を頬張つた。

さらさらと砂を撫でる波の音が、擦ぐるやうに二人の背後から通り抜けて、底のない闇の中へ消えて行つた。寒いほどの涼しさのうちに、眼の前のとろ火だけが、ほんのりと二人の顔をほてらした。高い星空は、砂丘のへんで、湖から舞ひあがる闇に糊かされたままをりをり二人の眼に、何かを暗示するもろろやうにきらめいた。遠くの方で、女がはぐれた對手を呼んでゐるらしき。

「Yo—ho—」

といふ聲がした

つづいて、朗らかな笑ひ聲が、どこかの芝生を傳はつて聞えた。清は、かういふ晩に、二人づれで散歩してゐる男女が、どんなことを暗闇の中で演ずるかを、よく知つてゐた。そのへの叢みや、艸原をあるかうものなら、彼等は夢中になつて接吻してゐる二人や、じつと重り合つてゐる一對の人間に、きつと出遇はすにちがひないことを懐ひ出した。彼はやたらに、燃えさしの木を弄りながら、何遍も同じことを頭の中で繰り返へして、云ひ出さうか云ひ出さうかと焦心つた。

「——で、その日本の同志の方と仰有るのは？」

クララは、胸の間から、小さい手巾を出して手を拭ひながら、礫と清の云はうとしてゐることを遮ぎつた。彼は言葉すくなに、葉山の人物について語つて聽かせた。事實、この場合、彼にとつては、喜劇役者のやうなだぶの日本製の洋服を着た、まつ黒な、不粹な一人の社會主義者などは、どうでもいいのであつた。彼は、邪魔物を拂ひのけるやうに、葉山のことを云つてしまふと、じつとクララの顔を覗き込むやうに瞞めて、その細つそりした肩へしづかに片腕を廻はした。よろけるやうに風に運んで行かれた焔の端が、弱い光で、女の横顔を一と舐めたかと思ふと、眼を瞑つたやうに消えてしまつた。

「僕を……接吻してくれませんか？」

彼は、熱い湯を嚙み下したやうな聲を立てた。さう云ひながら、彼は、カーペンタアの著書へ半分體を載せてゐた。星が、際立つて二人の上にひかつた。

「してもいいわよ。」

クララは、にいつと笑ひながら、いきなり膝を掻きあげると、運動家のやうに身軽るに立ち

あがつた。そのはづみで、清の片手は深く砂の中へ埋められてしまった。一二間先の渚に、女のけらけら笑ふ聲がした。

「わたしを捕へたら何でもしてあげるわー」

彼女の軽い足音が、砂粒をしんしんと踏みつけた。

「あ、本をー 本をー」

清は『Love's Coming of Age』を拾ひあげると、つづいて闇の渚を、仄白い彼女の後姿をめでてに駆け出した。危ふく水に浸かりさうになつたところで、彼女は一足飛びに、上の草原へ飛びあがると、廣野の方へ逃げ出した。盲目になるほどの闇の中で、二人の追跡がはじまつた。

「クララー！ クララー！」

清は、さう叫んで、森の方へ消えて行く彼女の幻影を、馬鹿馬鹿しさと、可憐さをいつしよに感じながら、熱心に追ひかけた。何かの機みに、彼女の影を見失ふと、また若若しい、御俠な笑ひ聲が、意外な方角に彼を導いた。彼は、二三度、木の株に躓まづいては、大聲で彼女を呼び返へさうとしたが、唯闇を憚つて、口を噤んだ。

ばつと電燈のともつた、木の繁みのところへ出ると、金髪を振り亂したクララが、息を喘ませながら、立とどまつてこつちを透かして見てゐるのが眼についた。追ひすがると、彼女は、

「ここは駄目よ。」

と、灯を指して、すこし惧れを帯びた顫え聲で囁いた。

繁みのなかほどは、水の蒼みがかつた池になつてゐて、丈の高い葦がいつばいに植ゑてあつた。清は、情慾にむづむづする胸を鎮めて、あらためて彼女を眺めた。

「ぢや、むかうへ行きませう。」

「どつち？ もつと明るいところ？ それとも暗らう方？」

「もちろん、暗らい方へ。」

「貴方、わたしを怖はがらしちや、いやよー」

「僕の戀する貴女を、どうして怖はがらせませう。ね、さあ、行きませう。」

二人は、離れ離れにあるきながらも、いつとなく互の手元へ引惹けられるやうだつた。引惹けられさうになつて、はつと思つて、ややはりどつちかが歩行を外らして、また離れてあるい

た。

突然、清は女を固く抱きしめた。暗闇の中で、彼女は、劫えたやうな、かすかな呻き聲を出した。しかし、彼が夢中になつて、彼女の唇を求めたときに、彼女はべつに抵抗するけはいもなく、すこし冷めたい唇を彼に任せた。

「貴女は、僕を愛してくれますか？ クララ、クララ、僕の最愛のクララ！」

彼は、すつかり女の細いしんなりした體を、自分の胸へ押しつけると、火のやうな息をついた。

「わたしの親友ですもの……」

「戀人と云つて下さい！ 戀人とね！」

「お好きなら、云ひますわ。」

「……有難う！ クララ！——クララ！ 僕は、もうこの頃は、毎日毎日貴女のことだけが頭にあつて、仕事も、それから勉強も、何もかも手につかないんです。それに、夜は、いつも夜は、貴女がきつと僕のそばにゐるやうな氣がして、眠られあしないんです。どうして僕はこんな

なに貴女を戀してゐるんだらう！ 僕の思ひの半分も、貴女にわかつてくれると、どんなに嬉しいか！ 戀、戀、戀——ああ、こんなに苦しいものが戀かしら。……ほんとに、僕を愛してくれますか？ 人種も何も忘れてしまつて？ え、クララ？——」

彼女は、熱苦しい永遠の抱擁から、痙攣するやうに身動きした。眠から覺めたときのやうな、わりに太い聲で、彼女は、はつきりと叫んだ。

「まだ、まだ、まだよ。——そんなこと！ 貴女、紳士ぢやないの？」

撥ね返へつた彼女の體は、するりと彼の羽翼締めから脱けて、闇の中を、繁みへ繁みへと、はたばたと驅けて行つた。清は、急に冷めたい外氣を吸つた人間のやうに、はつと氣を取りなほすと、足音を傳つて奥へ別け入つた。堅い粘土質の小徑が、すこし露ばむで、靴の底をしつしつと吸つた。によつきり聳えた楡の樹の前を通ると、背後から、わつと叫んで、クララが彼の肩をいきなり敲いて逃げた。體を翻へす途端に、彼は石に懸つて、

「あッー」

と叫びながら、艸の上へ仆れた。

「あら、どうなすつて？」

返事がないので、彼女は、はらはらしながら、彼の仆れた場所へ戻つて来た。二本の太い腕が、無言で彼女の膝を抱きすくめた。力なく女は、くたくたと艸の上へ倒れながら尖がつた靴先で、小突くやうに男の肋を蹴つた。清の聲が、彼女の開きかけた唇を押し潰すやうにひびいた。

「僕を愛して——男と女としてね！」

女は彼の下に苦るしやうに呻吟きながら、手足をひどく藻掻きはじめた。

濡れた表紙のカーペンタアを、艸の上から拾ひあげて、彼女の手へ男が握らせたときには、クララは、憂鬱な思慮深い女に早變りしたやうに、黙つて彼のあとについて艸の上を立ちあがつた。

「貴方を憎むわ……わたし。」

もとの道を逆戻りしながら、かう彼女は低い呪咀の籠つた聲で云つて、いきなり泣きじやくりながら、小徑を駆け出した。

彼は、太い息を吐きながら追ひすがると、無理に女の腕をひしと自分の腕へ絡ませた。

#### 四

二人は、無言で、公園の表門のアイスクリーム屋へはいつた。

いく組かの、若い男女が、涼しさうな服装をして、ソーダを麥藁で吸つたり、他愛もない冗談に高笑ひしたりしてゐた。テニスのラケットを、斜に膝へ立てかけて居る若い娘もあつた。

清は、女を所有した刹那の感激に、足の爪先までもじんじん鳴りひびいてゐるやうな、異常な昂奮を感じてゐた。俯向き加減にスツールへ掛けてゐるクララの顔を、じつと凝視しながら彼は、彼女が何を飲むかを訊ねた。伊太利人らしい給仕へ、アイスクリーム。ソーダを命じた彼の聲は、日頃の女性的なしなした音調から、急激に大人びてしまつたやうな喉聲に變つてゐた。そして、物珍らしさうに二人を眺めては、くすくす笑ひながら、暗號のやうな私語を交はしてゐる青年や、女學校級の娘たちを、彼は、緒らむだ顔に冷靜な勝利者の矜負を見せて睨め廻はした。



クララは、をりをり空つぽな瞳をあげて、不思議さうに、清の横顔を覗いた。はげしい性的な憎悪と愛着とが、交互的に彼女の胸にこみあげて来ては、一時冷めたい方向へ彼女の心が吸ひ込まれて行つたかと思ふと、また息塞まらしいほど熱しきつた世界に投り出されるのを感じた。すべての出来事が後悔されたと同時に、萬事は豫定通りにすすむでゐたかのやうにも思はれた。何かしら鋭利な双物のやうなもので、感情といふ感情、理智といふ理智を、みんな半分半分に截ち分けられたやうだつた。これが當り前のことだ、と思ふには、あまりに恐ろしい出来事であつた。と云つて、それは彼女の想像してゐたこと以外の何物でもなかつたのだ。頭の中で描いてゐた普通のことだ、實現されてあとの今、見る見る、一種の毛細管引力によつて吸收されるやうに、留度なくいろいろな感情の中へ吸ひ込まれて奥底の知れないところへ散らばつて行く、その恐ろしさを、彼女の頭はまだ想像してゐなかつたのであつた。これが、ただほんの一次的な、悪夢のやうな、再び恢復の出来る、無雑作な出来事であつてくれればいい——と、心私かに翼つたほど、彼女の心は亂れて居つた。彼に對する愛着が根強くいつの間にか生長して居ることに、今更、クララは驚いたのであつた。

彼女は、強いて自分を忘れやうとした。

「清、貴下は、今度の日曜日の集會に演説をなさる筈でしたね？」

彼は、熱てりきつた瞑想から喚び起こされたやうな顔をして、こんな平凡なことを不意に懐ひ出した女を、びつくりして眺めた。

「え、さうです、——この日曜日に。」

「ちや、その、さつきの日本からの同志つて方をお連れなさるんでせう？」

彼は、この場合、どんな男にしろ、自分以外の人間のことについて、彼女が語ることを望ましく思はなかつた。

「もちろんです、もちろんです。」

「わたしも出るわ——ルウシイと、ほかにやはりあすこに働いてゐる友達も二三人連れて行きますわ。貴方、何を御話になるの？」

「それが、その、まだ腹案は出来てないんだがね、しかし、わけはないですよ。僕は、もう今日、今夜から、何でも出来るといふ自信がつかまりましたからね。」

彼は「今夜」といふ言葉に、必要以上の強調をして、探ぐるやうにクララの眼を瞞めた。女はちよつとたちろいだ風に、眼を伏せたが、さりげなく微笑した。

「成功を祈るわ。」

二人は、それつきり偽善者のやうに黙り込んでしまった。それ以上、どんな平凡な話でもすすめて行くことは、何となく御互にとつて恐ろしくなつて来た。彼は、ソーダの代を拂ふと、女を庇護するやうに、自分の腕へ彼女の手を置かせて、暗らいボブラの並木道を、電車通りへあるいた。

「また、會つてくれますか？」

彼女の二階立の貸長屋の玄關まで送つて来ると、清は、あたりを憚つた低聲で囁いた。

彼の腕の中に、小さい吐息をしながら、じつと體を凭れかけたクララは、急に感傷的な鼻聲になつて、子供じみた口調で答へた。

「日曜日に御會ひすると云つたぢやないの——」

「いや、そんな風にでなく、貴女と二人つきりで。明晩は、どう？」

彼は一層と女を強く胸に押し當てて云つた。

「明晩は、駄目よ。わたしどもの研究會があるんですもの。」

「ぢや、明後日の晩？」

「……わからないわ。どうして、そんなに毎晩御目にかからなくぢやならないの？」

「事務所へ電話をかけませう、ね。そして、晚餐をいつしよにしながら、ゆつくり一晩散歩しやうぢやありませんか？ ね、承知して下さい。」

「……わたし、わたしね、ほんとのことを御話すると、何だか、今晚のことがあつてから、もう、あの當分貴方に御目にかかりたくないやうな氣持がしますのよ。もう、この上、御互に會ふことは、苦痛なやうな……」

クララは、衝動的に體を捻ぢ切つて、清の腕から離れると、階段のわきの欄干にすがつて、聲を忍んで泣き出した。

「泣かないでね、クララ、お前が泣くと、この僕も悲しくなつちまうから。」  
彼は女の肩をかすかに震ぶつた。

『……書きますわ、手紙で申し上げます。……それまでは、それまで待つてゐて下さい。』

さう云つたかと思ふと、無理に彼の抱擁から追れた女は、あとをも見ずに玄關を駆けあがつて、鏡の卸りてゐないガラス扉を押して、家の中へ隠れてしまつた。いつまでも、そこに立ちつくしてゐた清は、彼女の白い、着物が黒いガラス越しに、長いことそこに逡巡してゐるかの如く思はれたので、いくどか自分も彼女のあとを駆けあがつて見やうとしては、思ひとどまつた。遠くの方から近づいて来る靴音がするので、しまひに、思ひ切つて、一圖にまつ暗な谷の底へでも突墜されたやうな失望を感じながら、また電車通りの方へあるいて歸つた。

『しかし、何と云つても、クララ、お前はもう俺のものだよ！』

クララの家から二丁ほど離れた南區の電車の乗場から、下町で一度電車を換へて、ものもの八丁もある下宿の近所の停留場で降りて、てくてく家へ歸へつて来る間、無意識な電車の昇降や歩行を、彼は、ただかうだけ呟いて通つたやうに覺えてゐた。

もうすっかり寝鎮まつた下宿へ歸つて、葉山がどの部屋をあてがはれたかを尋ねて見ようとしたが、地下室の婆さんも眠つてしまつたやうなので、三階の自分の室へはいつた。そのまま

明朝の仕事があるので、寢てしまはふとしたが、どうしてもクララの別れるときの言葉が氣にかかつて、眠られなかつた。

女に對する勝利が、意外に容易であればあつたほど、彼には彼女の涙と、悔恨と、怨嗟とがわからなかつた。彼は、自分が友人達の誰よりも圓熟してゐると誇るところの科學的に教養された常識をもつて、クララと最初接近した頃からの事情を、すうつと検査して見た。

抑ものはじまりは、ジョセフィン夫人の家へ、何かの名義で招かれた日であつた。ジョセフィン夫人といふのは、倉田喜平といふ日本で新聞記者をしてゐた男と結婚した女で、倉田が肺を罹つて、日本へ歸ると間もなく死んでしまつてからは、獨力で社會主義傾向の婦人週刊雜誌を起して、どうやら老母一人と助手のルウシイ・デ・ランヂといふ老嬢との三人家内を切つて廻はして行つたのであつた。清は、倉田の生前、よく小森と二人で、そこへ遊びに行つた關係から寡婦になつたジョセフィン・クラタ夫人へも同情して、ちよいちよい日本の新聞記事の翻譯や、日本の運動の傾向などを報じてやつたことがあつた。そこへ集まつたその日の茶のパーティの中に、ほかの女達のやうに馬鹿はしやぎもせず、しづかに人目につかぬ席に掛けて、オリ

17・シユライナイ女史の著書を膝の上へ載せたまま、みんなの會話に耳を傾けたり、自ら淋しさを慕ふ哀愁に充ちた眼を窓の外から、夕陽の街の上へ投げたりしてゐる、どことなく日本人を忍ばせるやうな顔立の女が、彼女であつた。無口な清が、をりをり一座の質問に苦しむで眼をあげると、ピヤノの傍らから、じつと彼を瞞めてゐる、澄んだ空色の瞳に出遇はして、何かしらその瞳の奥に、彼の心を捉へる力が潜んでゐるのを感じたのであつた。

『いま大學の専科で勉強してゐらつしやる、クララ・コリンズ嬢です。』

主人役としてのジョセフィン夫人の引合せは、ただそれだけではあつたが、清にとつては、クララといふ比較的御俠な派手な名と、遠い山谷の間の水のやうな瞳とは、不思議な謎のやうに記念されたのであつた。その次に彼女と會つたのは、誰かの傳手で、ヨーロッパ劇の小劇場へ紹介された夜だつた。あまり劇などに興味をもたなかつた彼ではあつたが、切符を貰つた上に、當夜は殊に社會主義者の總見と定まつてゐたために、數少い席に自分の椅子だけ空席にして缺席することは氣の毒だとも思つたので、出掛けて見ることにした。劇場へはいると、その控所の隣りの溜り場になつてゐる室で、まつ先に聲を掛けられたのは、クララその人であつた。

大柄な、木彫のやうな無頓着な、鼻眼鏡の黒い紐を長く垂れた總髪の老人が、彼女の父親のウイリアム・コリンズといふ新聞の漫畫家で、どことなくぶりぶりして、しじゆう自分の皮膚の汚いことを氣にでもしてゐるやうな、瘡ぎすの、神経質な、ボストン女のやうな婦人が、彼女の母親であると、彼は紹介された。クララは、その頃流行つた黒曜石擬ひのブローチを掛けて、衣服もちよつと見たら喪服かと怪まれるほど薄物の黒地のガウンに、その威かつい輪廓を霞のやうに糊かして見せて同じ色のレースをかぶつてゐた。どことなく大人びて、まるで氣品の高い貴婦人といふやうな感じを與へた身装であつた。清は、うっかりクララの母親と話してゐるうちに、喫煙室へ逃げ出した父親を措いて、女連れは、隣室の珈琲室で何かやらうといふ相談になつたのに氣がついた。彼は、相憎と當夜は一文もたすに、ただ芝居だけを見て歸へるつもりで出掛けたのであつた。いままで話し込んでゐながら、喫茶の場合になると逃げ出すといふのも、かんがへると無難なことだと思つて、彼は、一も二もなく珈琲室へ同道して行つた。クララと母親が注文した通り、彼も、女給に鶏のサラダと珈琲を注文した。二人の女達が、樂しげに食事をしてゐる間も、彼は、勘定書の出て來る刹那を想像して、やたらに珈琲だけをが

ぶがぶ飲んで居つた。彼の見聞した範囲のアメリカ人の禮法では、男と女とが何か食事をした  
りした場合には、きつと男の方で代は拂ふべきものと定まつてゐた。で、この場合、何でもな  
い些細なことから、突如眠の前に起つたデレムマについて、彼は全く途方に暮れなげりやなら  
なかつた。暑苦しい焦燥のうちに、女給は近づいて、客の一人一人から、それぞれの代金を  
集めにかかつた。もう開幕に間もないのである。彼は、方策が竭きて、とうとうコリンズ夫人  
に中座を託びながら、受附の女のところへ走つて、事情を話して明日まで代價を待つてゐてく  
れるやうに頼むだ。住所姓名を紙片へ書いて渡して、どうやら事務所の承諾を得て、もとへ戻  
つて見ると、ちやうど自分達の卓へ女給が代價の切符に鉄を入れてもつて來たところであつた。  
彼は、冷汗を流しながら、二人の婦人の前で、事務所へ掛け合つたことを女給へ話して、一日  
の猶豫を乞はなければならなかつた。女達の分は、コリンズ夫人が自分で拂つた。  
『わたしどもは、みんな貧乏なんですからね……』

いろいろと清の詫びるのを、クララは取りなし顔にさう云つて、その場はすつかりつくろつ  
てくれた。

その事件のあつた翌日、彼ははじめて、彼女に鄭重な詫狀を送つた。そして、彼の選んだ單  
語が、どんなに日本流で繪畫的ピクチャレスクであつたかを賞讃せんために、彼女の返答が來た。それから、  
清は、一週間に一度、彼女の手紙が、ストーヴの灰だらけな自分の部屋の絨緞の上へ、扉を開  
くのは面倒なので、その隙間から婆さんが投げ込んで置くのを見ないと、ひどく淋しい心持に  
撲たれたのであつた。最初は、通り一遍の、理想的な顔といふには、餘りに鼻の高か過ぎた、  
淋しさうな顔立の女だと思つてゐるうちに、彼の氣持は、だんだん見えない網のやうな女の魅  
力に惹着けられて居つたのを知つた。彼等の間の文通が、若い男女の好奇心の探ぐり合ひや、  
讀んだ書類の感想や、各自の思想の披瀝から、急激に戀の告白に變つたのは、第三回目に、彼  
が彼女の家で一人きり會つた晩からであつた。

ちやうどその晩、清は、兼ねてクララから貰つた寫眞の答禮のつもりで撮つた自分の寫眞が  
出來あがつたので、ほんの玄關口で手渡すつもりで、彼女の家を訪問したのであつた。前から  
手紙の上では、どんな家に住まつてゐるかはよく知つてゐたのであつたが、自分の商賣上の配  
建區域とは全くちがふ方向でもあつたところから、彼は潜かに彼女一家のつましやかに住ん

である二階立の長屋といふものについて勢からぬ憧憬を感じてもゐたのだつた。

南區の公園寄りの、しづかな、目立たぬ色の煉瓦で疊まれた壁の揃つた片町の中頃に、彼女の家は立つてゐた。どことなく、零落した大學教授や、年金で食つてゐる非職將校などの住んでゐるさうな街で、宏ろからぬほどの家家の前の植込みには、リラの花が悲しい淡紫色の瓣をほろほろと散りこぼしてゐるのも、黄昏の空氣にはつきりと見受けられて、彼女の慕はしい魂がそこら中に漂つてゐるやうに思はれた。日本の龕燈のやうな、小型の電燈のともつた玄關があがつて、扉のわきの鈴を押すと、軽るやかな、彼女らしい靴音がして、二重になつたガラス扉の奥の扉が開いたと思ふと、嬉れしさうに双手を片頬のわきへ組み合はせたクララが躍りあがるやうにあらはれて來た。何か臺所の仕事をでもしてゐたらしく、彼女は格子縞の大きいエープロンを掛けてゐた。

「まあ、よくいらつしたのね！」

「實は、その、何です、ちよつと御寄りしようと思ひまして……甚だ唐突で、前から御断りもせずにあがるなんて、」

彼は云ひ澀んで、ポケットの寫眞を出したり入れたりした。

「まあ、よろしいのよ、そんなこと。どうせ、わたし達は、そんな格式張つた家ぢやないんですもの。さ、どうぞ、こちらへ。」

先に立つて彼女の案内してくれたのは、表の客間であつた。壁の釘を押して、天井から希臘ランプのやうな恰好に釣るしてある二つの電燈をとると、彼女は急いで、表の窓のシェードを卸ろした。

「わたし、こんな身装をして、ほんとに失禮ですわ。——ちよつと待つてゐて頂戴ね、ほんのちよつとですわ。」

かう云ひ捨てて、彼女は客間から、まつ闇な食堂を通り抜けて、臺所の方へ行つたと思ふと間もなく前掛だけを脱いで、再び出て來た。家の中には、ほかに誰もゐるやうな氣配はなかつた。

「あの、相憎と、今晚、父と母はよそへ招待されました、留守なんですの。母は、しじゅう貴方のことを御噂してきますのよ。御目にかかれたら、どんなに喜ぶことでせう。」

彼は、固くなつて、すすめられた搖椅子へ掛けて、——しばらく自分の手元だけを覗めてゐた。いろいろのことが云ひたかつたのであるが、面と向ひあつて見ると、頭字だけの略語になつてしまつたやうに、どの事柄もみな半分で立消えになつてゐた。それに、彼女の細かい、女らしい、流暢な言葉は、尠からず彼の發言の機會を感はした。やうやくのことで、コリンズ氏の作品や、レイメーカアの諷刺畫などの取り出されたとき、彼は恐る恐る自分の、不恰好な横顔を撮つた、漫畫よりも漫畫らしいと思はれる寫眞を取り出した。何よりも彼が惧れてゐたことは、その裏書の文句を彼女に讀まれることだつた。それには、

『To My Adorable Friend, Miss Clara F. Collins, Who inspired me With Many noble Thoughts.——  
From Your Humble, S. T.』

と、昂奮した走り書きで書いてあつた。

寫眞を手にとると、クララは、彼が思つたよりも平氣らしく彼と寫眞とを見くらべて、ポーズのよかつたことや、彼の體格の普通の日本人よりは運動家らしい體質であるといふやうなことを述べた。裏書を見ると、驚いたやうに、小さな唇を丸めて深く息を吸つたのち、

「まあ、まあ、大變なんですわね、わたし、こんなに仰しやられると恥かしいわ。」

とだけ云つて、もう一度愛想のつもりか、寫眞の方を熟視した。

二人は、一應云ふだけのことを云つてしまふと、ぼつたり話の纏穗がなくなつて、寫生帳や、寫眞アルバムなどの載つた卓を挟んだまま、ぼんやり對坐して、マントルピースの上の大理石擬ひの置時計の刻むセコンドの音に耳を藉してゐた。清は、ときをり思ひついて、日本人らしく、彼女の兩親のことなどを尋ねて見たが、その實何か云へば云ふほど、自分の言葉が、ぼんたうの心持から一寸迫れをしてゐるやうにしか思はれなかつた。彼は、いくども、手紙の上ではかなり大膽に、自分の彼女に對する考を打明けてゐたのであつたが、いまは、それを繰返へすことでさへもうら恥かしいほどの窮屈さを感じた。

やうやくの思ひで、

「手紙では、いつも、あんな——失禮なことばかり申しまして、貴女怒つてゐらつしやるんでせう?……」

と云ふと、全く不意な間に驚かされたやうな彼女は、ただ、

「いえ、決してそんなこと。」

と答へて、淋しさうに微笑むだけであつた、彼は、むしろ、何かそれについて、いつもの彼女の手紙のやうに、堂堂と彼女の文學的な考證をもつて來て論じてでもくれれば、どんなにすらすらと平氣で自分の思惑や告白を述べ得たらうかとかんがへた。

しばらく二人は、また、息苦しい沈黙のうちに、逼迫した胸をじつと抑へて對坐しなければならなかつた。それは、どうともすることの出來ぬ、無風帯のやうな底氣味の悪い無言状態の推移であつた。クララの蒼白い顔には、何か云つてくれればいいが、といふ氣持がありありと讀まれた。清の、むつりした克己的な表情を見ると、彼女もまた、何を話していいかに迷はざるを得なかつた。さうして、日頃の思慕を打ち明けようと思つた彼は、心のうちでは、彼女の兩親の歸宅を今か今かと惧れながらも、何一つ云ひ出すことが出來ないで、二時間あまりを過ごしてしまつた。泣きたいやうな氣持になつて、彼が立ちあがつて自分の帽子を手に執ると、彼ははつきりと彼女の押し出すやうな留息の聲を聞いた。

「ぢや、また、御目にかかります。御兩親の御留守のところを、非常に失禮いたしました。」

かう硬はばつた舌を動かして、客間を出かかると、彼女は急いで彼に追ひすがるやうにして、グードナイトの握手を求めた。彼女にして見ると、それはほんの來客用の握手であつたかも知れなかつた。清は、あはててその手を握ると、我と自分の感情に打めされたやうに低く頭を垂れて、

「クララさん、——僕、御願ひです。どうぞ、接吻さして下さい。僕は、貴女を戀してるのです！」

と、身内といつしよに聲を顫はせた。

クララは、案外沈着だつた。

「存じます、存じますわ。」

さう云つて、客間の電燈の釦を押すと、彼女は、すつかり彼のなすがままに任せたやうに、兩手を差し出した。もし清が、もうすこし女といふものを知つてゐたならば、彼は即座に彼女の兩手を差し出した意味を覺つたにちがひない。しかし、初心な彼は、辛らふじて彼女の右の手の甲に、自分の燃えるやうな唇を當てて別れたに過ぎなかつた。彼は、單直にクララの唇を



要求するには、餘りに戀の眩暈に心が亂されて居つたのであつた。

しかし、それからの二人の間の手紙の往復は、日一日と繁くなつて行つた。そして、コリンズ氏の非戰論的漫畫の個展や、ジョセフィン夫人の家での朗讀會などで二三度會つたのちに、二人は、もう誰が見ても完全な戀人同志となつてゐたのであつた。

それから間もなく、クララは、學校が面白くないと云つて、その頃、二三の月刊雑誌や週刊新聞などを併合して、合同組織で諸種の社會主義刊行物をやつてゐた、社會黨機關紙本部の編輯室にタイピストとして働きはじめたのであつた。彼女が本部へはいると間もなく、ジョセフィン夫人も、つまらしい獨立會計の出版を見限つて、同じ編輯室に、自分の雑誌を編輯しながら月給で働くこととなつた。清は、よくジョセフィン夫人の卓へ電話を掛けて、クララを彼女に呼び出して貰つた。

彼が一生懸命になつて、英文を勉強しはじめたのも、また同じ名義のもとに甘つたるい感傷的な文學書類を読みはじめたのも、主としてクララの感化によつたわけだつた。彼は、どうして彼女の前に偉らくならうかと、私かに苦心したのであつた。

ここまでかんがへると、彼は、煙草の吸殻でいつばいになつた灰皿へ、クララの寫眞を立てかけて、信者が祈禱するときのやうに、固く兩手をその前に握り合はせながら、

「悪るかつた、僕が悪るかつた、クララ、許るしておくれ。——僕あ、御前に見捨てられたら生きて行くことは出来ないんだ！許るしてくれ！」

と、ぼろぼろと鼻柱に添ふて落ちる涙を拭ひもせず、云ひつづけた。

そして、どこかの時計が、夜の底に、長い針金か何かを落としたやうに一時を打つ頃から、彼は、熱心にペンを執りあげて、三枚四枚と彼女への深酷な告白を書きはじめたのであつた。

## 五

煙草一つ買ふことの出来ない葉山を、どうやら階下の隅の部屋から呼び起して、夜前と同じレストランで朝食を済ますと、清は、ほかに差し當つていい分別もなかつたので、ともかく竹村の店へ紹介して、何かの便宜を計つて貰はうと思つて、連れ立つて店まで行つた。

「すこし頑固ですが、根はいい人間ですから、あまり怒らせないやうにさへしてゐりあ、わり

に交際ひい男ですよ。』

彼はざつと竹村の人となりを説明した上で、かう遠廻しに注意した。

『私も、ここへ来たからにあ、どんな人でも交際つて見るつもりです。どうせもう、この國へ来てゐる日本人は、大概ブチ・ブルジョア思想に成りきつてゐるでせうからな。』

葉山は、溫和しく首肯いて、彼のあとに従ひながら、街の彼方側を通るいろいろな身装をした労働者や事務員などについて、根掘り葉掘り清に尋ねた。清は、もう一度自分自身が渡米した頃、はじめてアメリカの街をあるいた當座の、全く従来日本で見聞きした生活状態とは聯想も想像もつかぬやうな光景に接した、目新しい好奇心と漠然とした不安とを懷ひ起しながら、長い水準器を擔つて行く大工や、シャベルの先へ青いオヴァーロールを結いつけた左官や、黒い帽子に黒シャツを着た鐵道の荷物係らしい人間や、新聞を丸めて紳士らしい身装であるいゝてゐても、腕の卓擦れのした光澤でわかる簿記係や、鍼葉の大きい辨當箱をぶら下げた土工や、古靴をもつた電話會社の工夫らしい男や、そのほか雑多な服装をして、時計を見い見いどこかへ急いで行く、朝の街の人口について、半分は臆測をも加へて、いちいち説明して聽かせた。

葉山は、何よりも、それらの労働者が、想像したよりも健康さうで、快活に、遊び半分のやうな調子で、その日一日の肉體労働を資本主に切り賣りしに行くのに驚いてゐる風であつた。彼は、しまひに口の中で、

『食ひ物がいいんだな！』

と呟いた。

竹村とは、昨夕一度會つたので、べつに紹介するほどのことはなかつたが、不慣れた新米の渡米者に對する古參者の紋切型として、店の主人は、應揚な取りなし顔をした。

『まア、ゆつくり見物でもして、それから何なり仕事をするがいいですな、急ぐことは必要ませんよ。どうせ、貴方、働くとする、この國ぢやみつちり働かせられますからね。仕事は腐るほどあるんです。あは食つて探がした分にあ、貴方、糞糞んぢまいますからな。まア、ぼつぼつと、かう給金のいい奴を狙ひ打ちにするんですよ。は、は、は、はア——。』

葉山は、くすむだ笑ひを浮べながら、謙遜な口調で云つた。

『私は、その、これの方がちつともいけないんで、仕方がありませんから、慣れるまでは、ス

クール。ボーイでも何でもさして貰はうと思つて来たんです。どうぞ、何分ともに宜しく御願ひ申します。』

彼は、英語をしやべることを説明するために、自分の唇を指した。竹村は、ちよつと相手の生え放題に伸びた鼻の下や顎髭へ眼を遣ると、むき出しに注意した。

『それがいけないね、その髭さ。僕等も昔は、その無性髭つてい奴を盛んに生やして居つたもんだが、このアメリカへ来ちあ、禁物ですぜ。——何に、剃刀がなければ、僕のを貸してあげますよ、すこし、やはり小綺麗にせんと、折角の色男臺なしになりますからな。』

さう磊落さうに云つて、奥の卓の抽出を引掻き廻はしたあとで、安全剃刀のバチン留めの利かなくなつたのをもつて来て、

『これを、君に進呈するわ。双さへ新しく變へりあいつまでも使はれるんだから。』

と、うつちやるやうに手渡すと、呆氣にとられた葉山は、相談するやうに清の方を振り向いて微笑した。

『資本主義入門の記念として、先づ髭を剃るんですかな、竹村さん。』

さう清に揶揄はれて、あつはツはと高笑ひする竹村を見て、葉山は無言で頭を下げながら、安全剃刀をポケットへ納めた。

清が既からジョンと馬車を曳いて来て、店前で茶箱を積んでゐる頃には、洗面所の曇つた鏡の前で、使ひ古るしの濼い双で、痛さうに顔中を扱いてゐる葉山の後ろ姿が見えた。

竹村に、友人のことは一切頼んで、清は馬といつしよに、その日の労働區域を指して出た。彼が西區の方の茶と米の配達を終へて、いきり立つジョンを宥めながら歸へつて来たときは、もうすつかり話對手を見つけた竹村は、葉山にむかつて、顔を紅くしながら、社會主義攻撃をやつてゐた。『糞を掴む』といふ、彼の口癖は、語句に力瘤を入れることに連發された。葉山は、清の歸つて来たのを見て、つまらなさうな笑ひ顔を向けた。しかし、それは満更不愉快な場合の苦笑ではなささうだつた。それに、粗髭を剃つた彼は、二つも男を若かくしてゐた。

二人を店へ残して、金の勘定をしてゐた清にとつては、彼等が何を話しつつづけてゐるかを聞きとる暇はなかつた。實際、一日の労働のうちで、もつとも彼にとつて苦痛なのは、帳面の計算——誤算であつた、それは、どれほど頭のいい數學家でも、プラスとマイナスを整然と區別

することが出来ないほど、書いたり消したりした数字といふ数字が、完全な無政府状態を呈してゐた帳面であつた。大體、それには、竹村といふ人間が、薄給で他人を儲はうとした根本原因も悪るかつたのだが、高橋清自身も一介のプロレタリアとしての頼りのない収入支出を凌駕した程度の、調節のとれない戀愛事件などに身を容れてゐたことも悪かつたのであつた。戀は、いまの世の中では、金のいる事業である。どうにかして、小金の餘裕をもつてゐたいと思ふ氣持から、彼は配達済の代價を、日に三四軒づつは、まだ貸込になつてゐて、支拂つてゐないやうに附けて置いた。客の方では、きちんと注文した品に對して支拂つてあつても、ちよつとした鉛筆の細工で、二度も三度も拂はないやうに、竹村の謂はゆる『黒表人物』になつてゐるものもあつた。それがまた、數の多い顧客先には、きつと拂ひの悪るい家が日に二軒と三軒とあるには定まつてゐたのであるが、實際清によつて記されてゐるほどづば、でもなかつたのだ。周吉達とやつた商賣が、すつかり仲間割れをしてからこの方、すつと竹村の店に働くやうになつた清は、その當時からかなり實直に、骨身を惜まらずに働いて來たので、主人の信用はもう充分に出来あがつてゐたのであつた。三四度、彼にはそれらしい術策だと思はれる方法で、竹村

がわざと財布を落して置いたり、帳面を見ながら顧客廻りをして見たりしたあとでも、清の金錢上に於ける潔癖は、立派に試練されてあつたのだ。それが、クララと知り合ひになつてから竹村は氣づかなかつたが、一週間六冊ある帳面の上で、どの一冊と雖も、十弗と十五弗とごまかしてない帳面はなくなつてしまつた。また、帳尻と集金額がびつたり合はないといふことも、必らずしも清が故意に、左のポケットの金を、右へ入れてしまつたからではなかつた。大體が、崩れかかつた砂のやうな自分の懐へもつて行つて、拂はなかつた客の分も、ひよつとした氣の迷ひから、拂つたやうに捺してしまつたりすることもあつたので、そのためには、ごまかした方の金から縮高の方へ入れて置かねばならぬやうな皮肉なこともあつた。彼は、奥の卓へ坐つて、財布の紐をほどきはじめるときから、もう頭が平生の冷靜を失つて、數字の計算といふよりも、心理的に集金した刹那の自分の氣持や、客の顔や、その他の聯想法によつて、ほんとに拂つたのか拂はぬのかを、帳面とはべつに推測する必要に迫まられることがしばしばあつた。帳尻と集金とが、きちんと合つたつもりでも、竹村があとにまはつて計算すると、どうしてもいくらか不足になつたりするやうな場合には、竹村はわざと黙つてゐるのが常だつた。や

うやく、その日の計算を終つて、汗を拭ひながら店へ出て來ると、清は、竹村の恐ろしく激昂した聲にびつくりして眼を睜つた。

「……國賊ツ！ 君は、君のやうな奴は、——國賊だツ！」

さう叫んだかと思ふと、竹村は、いきなり細い腕を鐵の棒のやうに揮つて、葉山の頬を無氣味な音のするほど殴りつけた。葉山は、スツールからよろけて、床へ仆れさうになつたところを、辛ふじて卓へ撓つた角度を作つた雙手で支へて、大切さうに眼鏡へもう一つの手をかけた。

「殴ぐつたな！」

卓から體を挽き離すやうに飛び退くと、葉山は布を引裂くやうに叫んで、店のまん中へ立ちあがつた。清が、あたふたと二人の仲へ駆けつけたときには、葉山の柄にない高笑ひが、彼を煽り立てるやうに背後にひびいた。

「はツは、ははあ——御主人、貴方も、仲仲話せるわ。人間は、それほど自分の信するところに強くないといけませんね。しかし、僕もこれで仲仲頑固ですよ。鐵拳の一つや二つで、生れ

ついた主義の色あげはしないつもりですよ。」

葉山の瘡せつほちな體に、曲がつた二本の脚が、小搖ぎもせずについてゐたなり、竹村の瘡せつほちな體は、手足がばらばらになつたやうに、ひどく震へて痙攣してゐた。

「いま一言云つて見ろ、同胞たりとも捨てては置かんぞ！ 非道い奴だ。——おい、高橋、聞け、この男は、世界の三大帝國の滅亡を豫言しちよつたぞ。こんどの戦争で、どれもこれも崩壊する、とさ。勿論、その三つの一つは、畏れ多くも……」

彼は繻で噴きあげるやうな息を、清の顔へ浴びせて、何かの武器をでも構へてゐるやうに、震へる右の手を正眼に葉山の顔のまん中へ差しつけた。

「竹村さん、一體、貴方がよろしくない。議論は議論で立ち合ふものですよ。暴力を須ひて、議論に負けたからと云つて、他人を屈服させようとするなんて、そりあ、時代遅れです。よ——どうも、今日はじめて會つたはかり、貴方がた二人が、困つたもんだね。」

清の言葉に、竹村は隙を見て雪崩れ落ちるやうに、抵抗の勢い方へ攻めて來た。

「僕等は、たとへ身は異國にあるとも、徹頭徹尾帝國臣民であるんだ。愛國者です。いいかね

僕は、何もこの男と議論したからつて、負けあせん。負けちやゐないんだ、したが、陽から降りきつた、賣國奴のやうな奴は、勢ひ暴力をもつて懲らさんと不可んだ。今回の歐洲大戰にしろ、見給へ、あれは力と力とのバランス突破ぢやないか！ 君見たいに、そんな軟弱なことを云つとつた日にあ、今に糞搦むぜ。——僕は、不幸にして、この、ふむ——と、葉山君には、

今日はじめて話して見たんだが、今の日本の青年が、みんなこんなだとすると、もう亡國も近づけりだ。それを思ふと、僕は、僕は、——祖國のためにほんとに口惜しいんだ！」

竹村は、かうひとりて怒號して、眼に滲む涙を、清のもつて來た財布で押し拭つた。

「どうも、さう激昂されちや困りますな。竹村さん、今夜のところは、どうか、僕に免じて助辨して下さい。葉山君も、今朝、僕があれほど注意してあげたのにな。ま、今夜のところは、二人とも僕に任して下さい。どんなに我々が個人同志で唾み合つたところが、この問題はさう一朝一夕で解決がつくもんぢやなしさ、ね。」

しまひに斡旋する清を尻眼にかけながら、竹村は、財布を金錢登録器の中へ投げ込んで、びんとその抽出を締めた餘勢で、

「俺は、もう知らん。——大體、高橋、君も、社會主義だなんて、生意氣だよ。」

と云つたまゝ、横向きに店ガラスから、空電車の通り過ぎたあとの、街の向ひ側を覗めた。葉山を促がして、清は灯のはいつた街へ出た。

「あれで、すぐけろりとする性質なんでね、決して氣にかけないで下さい。しかし、愉快な男ですよ、話して見ると。」

かう葉山を慰めながらも、清は、自分自身の理由から、心は重かつた。

葉山は、齒の缺けた老人のやうに、獨り語ともつかぬ獨語をしながら、彼につづいてあるいた。

「——どうも、外國へ來ると、愛國心が倍濃厚になるか、倍稀薄になるかのどつちだらうな。いや、罪のない男ですよ。——あの軍人的な訓練だな、あれが、一つうまく轉換出來るとね。……」

「あれで、割に親切な人間ですよ、」

清は、云ひさして、ふと、自分達の向つて行く街通りのレストランの前に、こつちを見てゐ

る女が、もしやクララではないかと思つて、ちよつと逡巡らつた。

彼女ではなかつた。彼は、いま時分彼女が何をしてゐるだらうかと思つて、急に悲しくなつた。昨晚のいま頃——清の眼の前には紅い焔が躍つた、焔を浴びた彼女の白い細面がはつきり見えた、何か囁いた、彼女は笑つてゐる、カーペンタアの著書がある、それは昨晚のいま頃だつた。彼は、心窩のへんが急に脚元へ落ち込んでしまふやうな懊惱を感じた。昨晚、下宿へ歸へつてから書いた手紙では、とても自分の氣持の半分も云ひ表はせなかつたにちがひない。今日、慥くとも、今晚あの手紙を読んで、クララはどんな顔をしてゐるだらう。泣いてゐるだらうか、怒つてゐるだらうか、それとも、女性だけの出来る平氣さで、みんなと何氣ない話をして笑つてでもゐるだらうか？　もう、あれつきり、二度と彼女と會ふことは出来ないのか？　どうして、あんな早やまつたことをしてしまつたらう？　もう一度會つて、しみじみ自分の意中を仄めかして見たい。あれほど好意をもつてゐながら、あの場合だつて、あんなにコケイテイツシュに振舞つてゐながら、どうしてああ怒つたのだらう、泣いたのだらう？——彼は、葉山さへいつしよにゐなけりあ、そのまま、晚餐などはそつち退けにして、公園のわきのしづか

な街通りを、どんなか機會で、ひよつくり彼女に出遇はすまでであるいてゐたいやうな氣持に驅られた。あるひは、彼女からも、長い手紙が來て、もしかすると、婆さんが絨緞の上へ投げ込んで置いてゐるかも知れない。

彼は、頗る同伴者に無愛想に、急ぎ脚で、いつものレストランへ行かうとしたが、ふと氣を變へて、筋向ひの支那料理屋へつかづかとあがつて行つた。

小うるさく葉山が、いろいろなことを訊ねるのを、卒氣なく生返事をして、成るだけ自分の心の中の甘い哀愁の世界を掻き亂させぬやうに、彼はボーイに、大急ぎで麥酒と料理をもつて來るやうに注文した。麥酒が來ると、彼は、ものをも云はずに、二つのコップへ冷えきつた液體を注いで、自分は一と息にそれを嘔み乾した。

『昨晚の會合は、やはり何ですか、主義者の方の——？』

清は手早に、もう一杯注ぎ足しながら、洋化した支那卓の大理石を、珍らしさうに撫でながら、こともなげにさう訊ねる葉山を、その正直さを、氣の毒なやうにも思つた。

『え、S.P.のちよつとした連中の會合でした。』

さう云つた心の中では、

『實は、僕の戀人と公園で落ち合つたんですよ。』

と、つけづけと云つてのけたときの、相手の呆れたやうな顔を、ちよつと想像して見て、彼は何とも云へない心苦るしさに制された。

『S.P.つて、どんな連中が主にやつてるんです？』

『左様、ま、一般に生温るい方の連中ですよ。いま、彼等はミニシバル・ポリテイックスへ食ひ込まうとしてるんですよ。市會議員の候補ですよ。三人ほど立つてますが、どうせ、根本的に腐敗してる市政ですからね、主義者の一人や二人はいつたところが、何も出来んでせう。』  
彼はほんのりと酔が生ずるにつれて、偽つた自分の半分だけが、興に乗じて、どんどん勝手に飛躍し出しさうな誘惑を感じた。

『日本人は、大部はいつてるんですか？』

『えーと、四五人はいつてゐますよ。はいつてると云ふのは、まあ、つまり、その何ですな、名前を入れてると云ふだけの話なんで、實際、まあ日常出はいりしてるのは、僕ぐらゐのもの

でせう。僕も、そのうちに、彼等の宣傳費の一部を借りて、何か雑誌でも出さうかと思つてるんですよ。やはり、このアメリカぢや、生きてるには食はんと不可んですからな。』

『そりあ、どこだつてまあさうですがね、』  
『ことに、このアメリカではですな。』

『さう、こんな國柄ですから、随分、日本人もみな變挺になつてるんでせうな。——例へば、あの、店の御主人のやうに。』

葉山は、舐めるやうに麥酒を飲みながら、鼻の先で薄ら笑ひをした。

清は、もうこの上この男と何かを話すことが、とても堪えきれぬやうな嫌氣に襲はれた。それと同時に、思ひさま、かういふ謹直な人間を前にして、あることないことの限りをしやべつて、煙に巻いてやつたら面白からうと思ふやうな、馬鹿馬鹿しい氣持が浮んで來た。

『僕は、利用してやるんですよ。S.P.をね。恐らく世界で、これほど金持の本部はないでせう。そして、出来ることなら、在米の主義者間に、S.P.を通じて、一つの固い聯絡といふやうなものを取つて置いて、いざと云ふ場合には、本國への聲援にもなり、第一軍資金の調達に



もなりますからね。——何と云つても、そりあ、どんなにマルクスが威張つても、世界の××は、各國の國內崩壊から来るんですからね。それに、目下のところは、人種つてい問題もありますしね。』

葉山は、清が昂奮すればするほど冷静になつて、黙つて彼の言葉に耳を傾けた。さういふ對手の態度を見ると、清はますます雄辯になつた。彼は、二本目の麥酒を空らにして、二品の料理と醋菜と飯を終るまで、自分一人だけがほんとに社會主義を背負つて立つてるかのやうな氣焔を吐いた。

飯が終ると、葉山は、

『貴方は、やはり第二インターナショナルですな。』

と、啣へてゐた楊子の下から、低聲で呟いた。

その一と言は、清にとつては、かなりの傷手であつた。

『第二が第二半でも第四でも、僕はやりますよ。いまに御覽なさい、獨佛英は申すに及ばず、交戦國といふ交戦國は、みんな互解しちまひますよ。そして獨りロシアと日本だけが、どうし

て社會主義に對して反抗して行けますか。先づ、僕等が卒先して海外から、日本の同志を醒ます必要がある。それで澤山ですよ、僕等の使命は！ 幸徳事件以來、日本の社會運動は、何です？ 何もしてあせんちやありませんか。内訌と仲間腐しばかりぢやありませんか。たしかにやつて見せますよ！』

清は放言すればするほど、自分が途方もない人間と途方もない議論をして、眞實に必要な話對手からますます遠ざかつてゐることを、痛切に感ぜぬわけには行かなかつた。彼は涙の出る思ひを怵へて、大理石の卓を拳でどしどし敲いた。

彼が勘定を拂はうとすると、葉山は無理に自分のポケットから日本製の汚い紙入を出して、恐らく最後の一枚であらうと思はれる二十弗札で剩錢を求めた。

『すぐ御歸へりになりますか？』

下宿の方へあゆみ出すと、葉山は泥酔漢を扱ふやうに、かう尋ねて、もう覚え込んでしまつたらしい、煙草屋の角を、暗らい方の横丁へ切れようとした。清は、惡酔の吐瀉物を吐き出してしまひたいときのやうな、妙な心の痞を感じたので、そのままでも下宿へ歸へる氣になれ

なかつた。

「すこし、かんがへたいことがありますから、どうぞ先に歸へつて下さい。道はわかりますか？」

葉山に別れると、彼の脚は、ひとりでに小森の下宿の方へ向いた。誰か、自分をよく知つてゐる人間に、胸の中の海藻のやうに生えもつれた鬱憤を、腹藏なく洩して見たいやうな氣がした。

半分ほど行きかけて、彼は、ふと、クララの手紙のことを懐ひ出したが、酒の勢で、わざと反対の方へ半身を押しやりながら、

「クララ、馬鹿ツ！」

と心にもない罵倒を試みて、涙つほく笑つた。

## 六

惣次郎は、二階堂保を相手に、アインシュタインの空間説を、一生懸命になつて講義してゐ

る最中だつた。

彼は、もつとも軽便な記憶術として、一度自分が讀んだことを、他人にそのまま復習まもつて聽かせる方法を執るのが常だつた。清は、はいると至極簡単な點頭で扱はれたのち、べんべんとして、その長つたらしい獨習術を傍聴してゐなければならなかつた。

「僕にもよくわからないがね、何しろまア、時間といふ在來まで、獨立して取扱はれて來た要素が、君、やはり空間から切離すことの出来ない一つの軸だといふ風にかんがへられてるやうになつたのだから、すべての思索の方法が、がらりと變つたわけさね。これは、アインシュタイン獨創の發見ではなくて、曩にミンコフスキーといふ數學者が、やはり同じことを思ひついたりださうだがね、謂はば彼はその學說から、彼れ自身の相對性原理といふやつを根據づけたもんだな。いいかね、空間には、いままで、ほら、深さと横と縦とだね、それだけしか屬性がないものだと思はれてゐたんだね、それに連続性を帯びたところのタイムといふ姿が、第四次元的要素として加はつたのさ。大革命だね。——さうすりあ、何だらう、例へば、我々が一個の物體をかんがへるときには、いままでは、時間といふ觀念を、無理にそれから引剝がし

てその實體を知らうとしてゐたものが、今度は、それに一種のコンカテネーヴな時間を加へないとうしてもその實體を知り得ないといふ風になつたのさ。つまり萬物は動きつつあるものだといふことがわかつたわけだね。「いや、それから、さつき云つた相對性原理もだね、僕のやうに手つ取早く云つたんぢや何だか、星學や高等數學の知識がないと、どうしてもほんとにわかつたとは云はれないよ。何しろ、ニュートンの萬有引力説から一步出た新發見なんだからな。ともかく偉らい人間だよ。猶太人らしいがね。」

「あ、さうですな、どうも名からして、アインシュタインだなんて。そのへんの質屋の老爺にもシルヴァシュタインだの、ただのシュタインだのつてありますからな。」

保は、半分迷惑さうに聞いてゐながらも、惣次郎の表情の籠つた談話術に釣られて、つい拒みきれないといふ顔をして、やたらに黄ろな煙草の煙をそのへんへ吐き散らしてゐた。

話し終ると、惣次郎は、パイプに火をつけながら、觀察するやうな眸を、じろりと清の上へ置いた。

「しばらくだつたな、やはりやつてるかい、色男？」

かうのつけから皮肉られると、いつもの癖とは知つてゐても、清はすこしぐつと癢に觸つた。

彼は、斜に掛けた椅子の頭を両手で揺ぶりながら、負けない氣で、惣次郎の顛頂帽スカルキャップめいた、黒いメリヤスで拵へた室内帽を蹴卸ろした。

「たんだい、そりあ？——女の靴下かい？」

「ふむ、これか、——」

惣次郎は、鼻から太い煙を吐きながら、二三度喉へかかつた咳拂をしたあとで、パイプの吸ひ口で自分の頭を大袈裟に指した。

「これは、水泳のキャップから思ひついた、僕獨得のタルバンだ。二つのプラグマティックな存在價值があるさ。一つには、僕の髪は、君等のはちがつて、粗いだらう。かうやつて置けば、明朝仕事に出るまで、きちんとかう分かつてるんだ。それから、これを被つてると、妙に思索が纏つてね、——」

「それに、學者らしくも見えるしな。」

「いや、全くですよ。この帽子で、アインシュタインの相對説とやらなんどを語つて居られる

とね、實際かう博士つていふやうな気がしますからな。」

「は、は、は——人を笑はしちや不可ん。ところが、正體は、やはり君の云つたやうに、女の靴下の太いところをちよん切つて、ここで留めただけなんだからな。この靴下の出所にも、色男高橋なんぞよりはよつほど安くない曰く因縁があるんだからね。まア、天機は漏らさずかな。それはさうと、君のスキートハートはどうしたい？」

清は、葉山が面白くないまぎれに、ここへ來ては妙な破目で揶揄はれるのに、尠からず自分のさつきからの處置に焦燥つて居つた。第一、二階堂といふ、惣次郎にとつての新しき Prodigée のあることが、しつくりと自分と舊友を結びつけない所以だとも思はれた。

「どうも困るよ、毎日手紙が來てね。」

彼も、勢ひ高飛車に出る必要を感じた。そして、云つてしまつてから、あるひは、ほんたうに手紙が、絨緞の上で自分を待つてゐるのではないかと思ふと、また急に淋しくなつたのであつた。

「や、それは御安くありませんぜ。どうです、高橋さん、一つうんと奢つて戴きませうかな。」

保は、歸へり支度をしながら、いつにない快活な聲で笑つた。

「實は、さう來るだらうと思つて、先廻りをして失敬だつたが、支那飯屋で一杯やつて來たところさ。——ときに、君はどうしてるの？」

「僕ですか？ 僕は、その後すつかり小森さんのお蔭で、家内労働の方は廢しましてね。いまでは、やはり小森さんと同じ會社で、どうやら注文を取つて廻はつてるんですよ。何と云つても、商賣はいいですな。第一、氣がかりとしてね。かうじめじめして、家内労働に嫌ぶつてゐるときななどと、世の中がすつかりちがひますからな。ご覧なさい、もうこんなに日に焼けましたからね。」

二階堂のあとを、惣次郎が面白ろそうに引取つた。

「先生、何しろはいり立てだらう、僕みたいに年百年中同じことをやり厭きてる人間とちがつて、そりあ熱心なもんだぜ。ジュウエルの神鞭と競争するなんて息込みだからね。今日も、君ハイド・パークのあの注文取泣かせの手堅い街から、十一注文を取つたからね、感心なもんだよ。先生の注文を取つてるところを、僕はよく傍から聴いてると實に面白いよ。粘ばり強い

んだな。それに、あんな顔をしてゐながら、二階堂君は、女に向つては愛嬌たつぷりなんだからね。さつとまあこんな調子だ。扉をノックするだらう。女が出て来るさ。すると、先生、もうちやんと帽子をかう片手に脱いで、恭しく最敬禮をやるんだ。僕等には、とてもあんなことは出来ない藝當だね。何を糞ツ、この目腐れ婆め、と思つて、女の顔を見ると、一と口五十仙としか見えないんだが、先生はさうぢやない。えーと、グード・モーニング・マダムと云つた調子さ。それから天候の挨拶だね、フアイン・ウエザア・ジス・モーニング・マダム——ええ、つきましては、當會社では、今回斬新奇抜な趣向をもちまして、なんかとやらかすんだ。そのもち出し方がどうも、手振り身振を入れて、どうしても女の好奇心を惹かずに置かんやうにするんだからね。彼はたしかに、天性インボイルンケンゲツスアの賣子ウツスアだね。心得たもんだよ、全く。」

「あ、あれだ、高橋さん、そりあ、まるつきり嘘ですよ。ほんとにしちや不可まきせんぜ。——どうも、かう頭から冷やかされちやどうもならん。どりあ、そろそろ退却しませうかな、このままゐたら、あとはどんなことを食ふかわかりませんからな。そりあさうと、明日はどうします？ やはりあの飯屋で御待ちしませうか、それとも僕がやつて來ませうか？ これで朝寝坊

だからな。」

「ふむ、さうだね、また起してくれ給へ。僕は、これで眠つてるんぢやないからね、ルネ・デカールトぢやないが、寝ててかんがへてるんだよ。大體、人間の血液の循環のいちばん良いのは横臥してるときなんだからな。そりあ、寝てゐるときほど頭の働きの敏感なことはないさ。ところが、朝のうちにあんまりかんがへ過ぎると、どうも、昨日のやうに、商賣へ出るのがすつかり厭になるんだから、弱つちまうさ。」

「さうですな、小森さんなんざあ、アメリカだからこそこんな乞食商賣をなすつてゐらつしやるんですが、これが日本だとね。見給へ、いまに僕がうんと金儲けをして、一生貴方にただ學問だけさしてあげますから。」

「ほ、僕の云ふやうなことを云つてらあ——ぢや、失敬。」

「いや、どうも御邪魔しました。」

呆が出て行くと、惣次郎は、卓の灰を拂ひながら、

「いや、ようくしやべる男だね。」

と清が笑ひした。

「どつちがしやべるんだか。」

清も可愛しくなつて嘖き出した。

しばらく羽虫の唸る音がした。

「いや、へんな人間に舞ひ込まれて困つてるよ。——」

清は、顔をごしごし平手で擦りながら、懐ひ出したやうに云つた。

「何だ？ 誰か来たのかい？——秋山か、また？」

「ふむ、秋山もやつて来たが、さうぢやないんだ。日本から、突然、俺のところへやつて来た男だよ。やはり主義者だがね、友人の紹介で来たんだよ。何かの事件で危くなつたもんだから高飛びして来たらしいんだな。坂田から紹介して来たんだから、まちがひはあるまいがね。何でも、この頃は、日本の政府でもしきりに海外にゐる連中の内探をやつてるさうだから、うっかりほんとのことはしやべれないが、ほんものはほんものらしいよ。ところが、その日本からの連中は、實際運動の方は一向にはかどらん癖に、馬鹿に理窟つほくてね。それに一種の學理

的潔癖性が漫性になつてゐるんだからな、ちよつと困るよ。どうするつもりか知らんが、君、何か一つ働き口はないかね？——實は、竹村は世話好きだからと思つて、今朝紹介して置いたんだが、晩に歸へつて見ると、もう早や二人で殴り合ひの喧嘩をはじめてるんだらう。御話しにならんさ。どうせ、竹村のやうな、變屈な人間なもの、黙つてゐりあいいのに、先生、それが妥協だとも思ふんだらうな、帝國主義の攻撃か何かをやらかしたもんだから、あの兵隊上りの先生、怒つたの怒らないのつて、僕も仲裁にはいつて手古摺つちやつたさ。」

「何といふ男だい？」

「變名だから、云つてもわからんかね、葉山といふ姓でやつて來てるんだよ。」

「さうだな、僕んところも、この醤油の方がうまく行けあ、人は儲はれるがね。ところが、その醤油なるもの、仲仲しよういふわけには行かんのだて、」

惣次郎は、自分の駄洒落に、けらけら笑ひながら、本棚の隅に、業業しく紅いリボンで油紙を括つて、しつかと蓋を締めた長い罎を、パイプで指した。粉末にした魚屑が、赤砂糖のやうな色合に、濁つた水の底に沈殿してゐるのが見えた。

清は、馬鹿臭いといふ表情をして、笑ひながら、その罎の包含物の由緒來歴を訊ねた。惣次郎は、待つてゐたとばかりに、三角な眼を縮めたり擴大したりして、諄々とその混成物の功利的價値や偽粧的用途に關する、彼一流の註釋を縦横に加へた。

清にとつては、この能辯な註解者が、自分を語りつくすことによつて、學說の引例や、希望抱負などをすつかり吐き出して、一種の虚無的倦怠状態にはいるのを待つよりほかはなかつた。彼自身は、べつに、醬油のことも、葉山のことでさへも、さう大して氣にかけてゐるのではなかつた。況んや、親分氣取で誰にでもバトロン顔をして、自分を押しつける性癖の惣次郎が、どんな射倖心に燃えてゐやうと、それは彼の問題とするところではなかつた。彼は、クララの消息が知りたいのだつた。彼女の謎のやうな言葉を解きたかつたのだ。どうしたなら、明晩でも、再び彼女と逢引出來るかを究めたかつたのだ。自分達二人は、今後どうなるか、その豫測すべからざる機微な運命を豫測したかつたのだ。そして、それには、また、意外に縁の遠い人間と場所へ、自分があらはれて來て、あまりに退屈な話に身を容れ過ぎてゐたものだ、と、私かに後悔に苛まれてゐる自分を、彼は腹立たしくも思つた。

「——君、僕は、いま、結婚しようかどうかとかがへてるんだがね。」

醬油の話から、一と互りハクスレイの一元哲學にまで行届いたあとで、惣次郎が新しく煙草を詰め變へて、夜の更けて行くのがわかるやうな遠くの電車のカーヴを軋る悲鳴が、長い鋭い餘韻をどこかへ曳いて消えたあとで、清は、眞顔になつてかう云つた。

「結婚？——」

「さうよ。」

「もう、あの、出來つちまつたのか？」

惣次郎の眼は、好奇心で輝いた。

「昨晚だがね——女も悪るいと思ふよ。」

「さうか——そりあ、そりあ、君、大變だな。困つたね。」

「ふむ、女は、もう二度と會ひたくない、なんて云つてるがね。そりあその場限りの女の氣持だつたかも知れんよ。」

「いや、はや。——僕は、まさかとは思つてゐたがな。君、困るぞ。これから、一生君は一人

の女に縛ばられてしまふんだぞ。それも、日本の女ならまだ始末はいいが、毛唐だと。いまからでも、僕は想像出来るよ。君が、かう頬が落ちこけてさ、白髪がぼつぼつ殖えてから、洗濯桶の前で、子供のおむつをせつせと洗濯してさ、妻君が「キーヨシイ！」だなんて、寢室から君を呼び立てるだらう、さア肉屋だ、八百屋だ、牛乳屋だつて、毎日毎日子供や妻君の食ふことを心配しなくちあならん、——それに着物だ、帽子だ、學校だつて、混血兒の五六人も出来て見ろ、そりあ、君がいくらあの竹村さんとの瘠馬の尻をひつばたいところが、とても追つかん話さ。それから、須臾にして鶴髪亂れて糸の如しさ、人生もうさうなつたら萬事が終りだ。社會主義も、大革命も、そつちのけだ。——いや、どうも困つたことになつたね。何故そんなことになる前に、俺に一度相談しなかつたんだ。君は、君といふ人間は、どうも女に甘いから、駄目だよ！」

清は、相手の誇張した話に耳を藉してゐるうちに、だんだん、自分が悲劇の主人公——ルーチンのやうになつて、一生を終つてしまふやうな、惨めな將來を想像して行つた。もとより、小森の幻像に湧いてゐるやうな、馬鹿馬鹿しい境遇に、いつまでも自分を置かうなどは、毛

頭かんがへてはゐなかつたが、結婚といふ、未知の、人生の陥穽のやうな不安な出来事を、自分ではまだそこまでは行つてゐないと知りつつも、相手に強い印象を與へるために、突然彼の眼の前へ出したがために、いまは自分もいつしかその豫感に多少惧れをなしてゐると感じただけで、既に、充分に昨夜の失慮に氣づかざるを得なかつた。

「女は、果して結婚をかんがへてゐるだらうか？」

惣次郎は、慙れむやうな眼付をして、腕組みをした清の顔をまじまじと見成つた。

「だから、君、僕が兼々云つてるぢやないか。決して素人女に手を出すなつて。僕のやうに、玄人對手なら、いくら關係したつて、さうさう奴隷になる必要はないからね。元來、君のやうな人間には、女はきつと粘るもんだよ。すこし、早まつたことをしたね。それで、何いか、先方では結婚の意志を表明してゐるのか？」

「いや、結婚結婚つて、君がさう八釜しく我鳴り立てるやうなことはないんだよ。彼女は、まだほんの學校を飛び出したばかりなんだからね。」

「だつて、結婚と云ひ出したのは、抑も君ぢやないか？」



「ふむ、まあ、さう云はれりあ、さうだがね。僕は、ただ、そんなことに將來なりあせんか、と氣遣つただけの話さ。」

「そりあ、なるとも。——して、君はその婦人を愛してゐるんだらう？」  
對手は案外眞面目だった。

「まあ、愛してゐるんだらう、ね。」

「何アんだ、はつきりと云へ。そんな臆病つたらしいものの云ひやうをするから、君は女に甘く見られるんだよ。」

「戀してゐる。」

惣次郎は、くくツと噴き出した。と同時に、彼の顔は、何とも云へぬ、暗らい影を宿して、急に泣き出したいやうな表情になつた。彼は、パイプをもちながら、本棚の下を、老人じみた足取りであるき廻つた。

「——君も、もう結婚するか？ 俺は、いつも最後に残る一人だな。君、友人といふものはその友人に女が出来るよ、もとの友人ぢやなくなるね。——秋山の野郎も、去つちまつたし、

君も行つちまうと、僕は、全く淋しくなるよ。これで、僕は、いろいろな人間と交際つて、がやがやしてゐるんだが、やつぱり友人となると、君や秋山しかないからな。……」

清は、瞬間的に、昨日の周吉の置手紙を思ひ出した。そして、それを讀んだときの、自分の利己的な心持が、惣次郎の言葉の前に急に淺間ましく見えるやうに感ぜられた。

「やはり、喧嘩しても、この男と秋山とは、お互に愛し合つてゐるんだな。」

かう思ふと、彼は、自分がクララと知り合つてから、一切友人達に對して、昔のやうな温かみも親しみも正直さも失つてしまつたことが、ありありと意識されて來た。周吉とは、惣次郎と彼ほどに親しい仲でなかつたが、それだけまた、惣次郎の認めない、認めても強いて彼自身のエゴイズムから否定してゐる長所を、全體から眺めてゐたのであつた。彼には、周吉の馬鹿正直さと、突進とが缺けてゐたのだ。

「……斯くして、我々は年をとつて行くんだな、人生の深みへ知らず識らずめり込んでしまふんだな。」

惣次郎は、部屋の隅で、背伸びをしながら、欠伸といつしよに、かう呻吟めいた。それが、

ちらりと見た清の眼には、アラビヤ人が、「アラ一の神よ」と云つて、夕陽をでも拜んでゐるとき悲嘆の祈禱のやうに見えた。

「勇ましく進むんだ！」

突如、伸びをした姿勢を翻へして、惣次郎が叫んだ。それから、兄貴ぶつた態度で、卓の前へあゆみ寄りながら、彼は説いた。

「結婚し給へ。僕は、つくづくかんがへたが、人生は、渡つて見なけりや、何にもならんもんだよ。生の河だね。岸に佇んでゐたんぢや、浅いも深いもわかりあせんよ。僕なんざあ、河の表面をだけ見て、浅いか深いかを知らうとしてゐるやうなもんさ。渡る。途中で溺れてもいいただ渡るといふ行動、ダイナミズムそのものが、俺達を生かしてゐるんだ。これは、先達、君、あの周吉の野郎と別れてから、しみじみ感じたことなんだよ。彼は、俺達のうちで、いちばん若い、偉らいよ。彼のメタフィジクスめいた煩悶を嘲笑つてゐた僕が、やはり彼に教はつたんだ。あの男の、體で當る方式が、僕にはないんだよ。——君、君も、もういい加減にやるときだからな。……ひとと、君のはやつたからかういふ結果になつたんだがね。は、は、は……」

しまひに、何が何やらわからなくなつて、惣次郎は、自分の、悪酒落といふよりも、論旨の錯裂に呆れたやうに笑ひ挫れた。

清は帽子を掴むと立ちあがつた。

## 七

すこし肩下がりの、走り書きに慣れた、なつかしい書體で、いつも封筒のまん中頃から自分の名をはつきりと綴つた、一通の部厚い手紙を、人氣のない自分の部屋の、扉の下の擦り切れたカーベットのの上に、老人の善意をもつた皮肉な笑ひで、するりと差し込んで行つた下宿の婆さんを、途々想像して、その女文字の手紙の内容を、多少の決意を挟むでかんがへて來た清がいつもの通り鑰をとり出して、部屋の鑰孔へさし込んだとき、意外にも錠が外れてゐて、しかも鑰孔からは見覚えのある蒼白い瓦斯の光が洩れてゐるのを發見したときは、颯と顔の色が變つて、浮浪漢周吉の、日に焼けた顔と、空腹な人間のみのもつた眼と鼻と眉根の間に漂ふ眞剣な掠奪性を、一瞬間に思ひ浮べたのも、無理はなかつた。一度、クララの寫真を見られてから

は、一種の強迫観念めいた。周吉に對する本能的な恐怖を感じてゐる彼だつた。しかし、次の瞬間に、扉の把手を捻ると同時に、とん、とん、とん——と、絨緞を踏む輕るやかな足音がして、眼の前に、光と壁の色とほとんどいつしよになつて、オールド・ローズ色の、何かの着物がぱつと瞳を射て、それを着た人間が、彼の眼の前で、爆破するやうな動作をもつて、彼の體に飛びついて、クララの聲を發したまで、清は、自分の生活に突然飛び込んだ、新しい驚異に對する、心の準備は些かだももち合はしてはゐなかつた。

全くそれは、クララその人であつた。

彼は、絶對無言のまま、自分の棲み慣れた、平凡な、どつちかと云へば、うす汚い安下宿のまん中に、何の前觸れもなしに擲きつけられた奇現象を、ただ受身になつて見成るより外はなかつた。女は、彼の腕の中に、笑つてゐるやうな、泣いてゐるやうな、雀躍してゐるやうな、何とも解し難い身振りで、しばらくの間、びつたりとすがりついたままで居つた。二人の間に言葉といふ、整理された感情が湧いたのは、彼等の背後に、誰が三階への階段をみしみし踏みながらあがつて來る物音のした刹那であつた。

『どうしたの？』

『——おお、清、清！ わたし、來たの！ 來たんですわ！』

『どこから？』

そのとき、誰かが廊下の外で、注意深い咳拂ひを一つして、彼等の扉へ近づいて來た。ノックするまでもなく、振りかへつた清の眼の前に、葉山の黒つほい顔があらはれた。

『高橋さん、御歸へりでしたか？——いや、實は、この御婦人がね、さつき私の部屋へ、この婆さんに案内されて御出でなすつたものですからね、いろいろ御尋ねした結果、どうやら貴方の御知合ひの方だとわかりまして、それから、何しろ、御仰有ることの半分は聞きとれないもんで、ともかく貴方の御部屋へ御案内して置いたんですが、』

清は、あはて切つて、いくども頭を下げながら、葉山に禮を述べた。

『いや、たしかに、僕の——その、何です、實は、今度結婚しようと思つてる女でしてね。御紹介ませう。』

彼は手短かに、クララに葉山を紹介した。クララは、あらたまつた口調で、硬い微笑をさへ

漣らしながら挨拶した。葉山が降りてしまふと、清は、扉をびつしり締め切つて、彼女を本棚の下の椅子へ掛けさせた。

「——家を出て来たの？」

「さう、わたし、決心したのよ。とうとう思ひ切つちまつたわ。お母さんが可哀さうだけどね、今日も一日御母さんとわたしの間にも云ひがあつたんですの、可哀さうですよ、年齢なんですからね。しかし、わたし、ほんとに決心しましたわ、どうしたつて、私共は離れ切れない、とね。——さつきも、ここへはいつてから、もしや貴方が御歸へりにならないのかしらと思つて、こんなこと書きかけたんですが、でもよかつたわ、歸へつて来て下すつて。わたし、まあどんなにひとりで苦るしんだかわからないことよ。あの晩から、わたし、一睡もしないんだもの。——ね、清！ わたしが、ここへ来たことは、いいことだ、と、たつた一言云つて頂戴！」

彼は、女の冷めたい手を、握つたり緩めたりしながら、ほとんど失神したやうな顔色で、彼女の張のある眼に、ひとりでに涙が滲み出たり、上は唇の紅味を帯びた髪が、言葉といつし

よに伸びたり縮んだり、いつの間にか、眞珠の粒のやうな涙が、微細な銀の針のやうな柔毛の生えた横顔を、重そうに傳はつてゐたりするのを、ぼんやり眺めてゐた。そして、潤んだ眼を睜はつて、じつと自分を見返へしてゐる女に気がつくとはじめて停止されてゐた心理活動を恢復した病人のやうに、低く何かを唸めきながら、彼女の唇を接吻した。

「疾まつたな！」

心のうちでは、洪水のやうに自分の頭上に重なり落ちて来る見えざる何等かの積載物に、一生懸命になつて抵抗しながら、ただ、かう思ふだけの餘裕しかなかつた。彼は、切なそうな女の顔色を読むと、漫然とした受諾の微笑を、心の働きとは別に、顔の外へ表はす以外に何も出来なかつた。

「僕は、僕は、ちつとも構はないがね。しかし、こんなことをして、家庭の方ちや騒いでゐやしないかね？」

「それは、もうはつきりして来たの。決して貴方に御迷惑のかかるやうなことはしないつもりです。——しかし、貴方、わたしが来て、さぞ御困りでせう。それを思ふと、わたし、いつそ

どこかへ間借りでもしようかとかんがへるのよ。どう？ 貴方、構はないこと？——」

クララは、猶も男にしがみつきながら、彼の肩のへんで囁いた。彼は、彼女がすっかり外出着を着込んで、旅行鞆をさへもつて来たことに気がつきながら、わざと平静を装うて、力強く云つた。

『ここにみなさい。ここにゐて下さい。——僕も、僕も、お前と結婚しようと、今夜友人の一人と話し合つて来たんです。僕は、やはり、御前がないと淋しい。僕を愛して下さい、いつまでも、ね！』

彼は、いつの間にか、自分の言葉に激感されて泣いてゐるのであつた。

『ほんたうなの？——ほんとに？ わたし嬉しいわ。ああ、清！ わたしの最愛の清！ どうぞ、泣かないでね。泣かないで、これから二人で、楽しく、新しい、生き榮えのあるライフを生きませうよ。どんな人が、どんなことを云つたつて、わたしは強いわよ。わたしには、勇氣が出て来るわ。ね、愛ませう。御互に力強くなりませう。貴方の御手紙にもあつたでせう。二人は愛によつて強くなりませう！』

彼は、か細い、靱かな手が、彼の頭髪を母親らしく撫でてゐるのを感じた。それと同時に、彼の心の一面は、ひろいアメリカへ来てゐる日本人といふ日本人のうちで、かうまで、自分のやうに學問のある一人の若い女に、戀ひ慕はれて、家庭をも捨てさせるほど、魅力のある人間は、一人としてあるまい、と想像してゐた。その自分一個の内心の矜負を試めすための如く、彼は、いくども女の顔を両手に抱へながら、所有慾に燃えた表情で、はげしく接吻した。それでも、かうした熱狂した、彼にとつては、寧ろ肉肉的な勝利に誇つた、征服の心持に眼が眩んでゐる瞬間でも、冷酷な現實が、搔ねかへすやうに躍動して、はつと明日からのことに氣を奪はれてしまふのであつた。

『どうしよう？ どうしたら、自分一人でさへ足らぬ勝ちな生活に、この女をまで養つて行けようか？』

彼の腕から離れると、クララは、満足げに吐息して、オールド・ローズのオヴァ・スウェータを脱いで、椅子の背へ疊んで置いた。

『あの人でせう、日本から来た主義者の方といふのは？』

「さうです、葉山君です。」

「わたし随分氣の毒掛けましたわ、ちつとも御話が出来ないのに、大へん心配して下さるのがよつくわかるんですもの。しつかりした方らしいわね。」

「え、しつかりした人です。その靴は、こつちのクロセツトの中へ入れて置ませう。さぞ暑かつたでせう？ このむさ苦るしい部屋だから——」

「いいえ、そんなことありませんわ。わたし、ほんの着換へだけでもつて来たのよ。それでもお母さんはすつかり心配してね、着物はいつでもあとから送るつて云ふのよ。わたし着物なんどことかんがへてあしなかつたんですもの。」

「御父さんは何と仰曰つてゐたの？」

「父はあのとほりの氣質でせう、わたしと御母さんの話を黙つて聽いてゐましたわ。それでもしまひに御母さんが、泣き出したときは、肩を叩きながら、たつた一言仰曰つたわ。「泣くな、それが當世の女の子のやり口だよ！」つて。わたし、構はないから、ええさうですよ、つて感張つてやつたの。——たつて、あんまりなんですもの、御母さんの云ふことが。そりあ、貴方

の前ですから、云ひ難いけれど、あの、貴方のことを——何と云つてるのよ、外國の知らない人間だつて。その、外國が、わたしには、どうしても氣に食はなかつたの。あんなに、平素は人類愛だの何のつて云つてる癖に、やはり、駄目ね、女は。いざとなると、同じ人種を固まり合はせないと承知出来ないんだもの。」

クララは、もうすつかり御機嫌で、ベッドの上へ、普段着だの帽子だの本類などを取りひろげて、何も心掛りのない人間のやうに、軽い調子で笑ひながら話してゐた。

「これも、ここへ並らべてよくつて？」

四五冊の愛讀書らしい小説を、本棚の前へ抱へて来て、彼女はむづ搔ゆいやうな笑ひを浮かべながら、本と本の間へ雙手を差し込んだ。

「あ、構ひません。」

「仲よく並んでおませうや、いつまでも、いつまでも。」

彼は、苦笑しながら、彼女が人形へでも話しかけてゐるやうに、人さし指で挿んだ自分の本をたしなめるやうに指して云つてゐるのを聽いた。それから、ドレッツァの中を、彼に整理す

るやうに頼んで、自分は、上から二番目の抽出をもつことに定めて、靴の中の物をそこへ入れた。寝巻、さすがに、レースの縁取りをしたナイト・ガウンを取り出したときは、彼女の顔は颯と緒らんだ。彼は、うろろろと彼女の背後に纏ひつきながら、用のない人間のやうに、クロセツトのカーテンを擽げてやつたり、濼い抽出を締めてやつたりして居つた。

「ピアノも、笠のついた電燈も、玄關も、ライブラレーも、御父さんの漫畫も、もう、すつかりわたしには用がなくなつたの！ わたしは、完全にこれで獨立するのよ、貴方とね。何にも必要ない！ほんとに、さつぱりするわ。」

「でも、お前、ほんとに、ここへ来たことを後悔しはしまいか？」

用が片づいたとき、退屈さうに部屋のまん中へ突立つてゐた清は、あらたまつた口調で訊ねた。女は、しばらく彼の顔を熟視したのち、

「どうして、どうしてそんなことを聴くの、清？」

と早口に訊き返へした。

「いや、どうしてと云つて、その、御前も知つてのとほり、僕は、僕ほどつまらない職業に、

安い月給で働いてゐる人間はないからね。食物、部屋、衣類——そんなものに、あるひは、御前が想像してゐるやうなことはしてあげられまいかも知れないから。實際、僕は貧乏なんだからね。」

彼としては、これだけ云ひ切るには、かなりの勇氣が必要であつた。そして、かう云つてしまふまでは、腸を搔き捲られるやうな、自分に對する腹立たしさを味はねばならなかつた。彼女は、心から彼に同情したやうに、眉根をちよつと額のまん中へ釣りあげながら、小鳥のやうに細めた唇から

「まあ、まあ、わたしの可愛さうな貧乏人が、まるでわたしがタイピストをして月給を貰つてゐないやうに心配に心配をして。Never Mind, Dear. わたし、やつぱり働くのよ。もちろん、貴方がどんな境遇にゐるかぐらゐは知つてゐるんですもの。」

と、泣き顔を眞似て云つたあとで、氣輕るに彼の肩へ飛びついた。

「あ、さうですか？——現在のところですか？」

清は、頭から自分の無能力さ加減を、女に見透されてゐたのに氣がつくと、自分のさつきか

ら感じてゐた矜負の一部分が、見す見す腐つて行くやうな氣の挫れを覺えたが、同時に、うす氣味の悪い複線を描いてゐた不安のすべてが、からりと取り除かれたのを知つて、ほつと安堵した。

「何に、僕だつて、働いてゐる以上は、二人の食ふことぐらゐは出來ますがね。」

彼の附け足した言葉に、何の誠意もなかつたとすれば、それは巧妙な日本人だけのもつ微笑術をもつて掩はれてあつた。

「二人とも、働くのよ！」

クララは、とんと小さな足踏みをして、思はずそこが下宿屋の三階であつたことに氣がつくと、悪戯小僧のやうに口を開けながら、彼を瞻あげてゐた大きい眼を、はつと床の上へ轉じて綺麗な齒並の奥から、そつと舌を出した。

八

「——私もね、實は、ちつとばかり視て來たいことがありますので、東部の方へ暫時旅行して

來ようと思ふんです。いろいろと御忙しいところを、御迷惑をかけて、ほんとに濟まなかつたです。金ですか、何に、金なんかどこにもありませんよ。實は、むかうの方には二三人の舊るい友人もゐますのでね、行けばどうにかなるつもりです。——ともかく、大いにやつて下さい、君が、現在のS.P.の方の信用を得られてゐることは、やはり長い間の熱誠の收得ですからな。どしどし活動して下さい。私も、今後どうなるか、自分でも自分の方向については、一寸先は闇ですから、どこでまた御目にかかれるかわかりませんが、君が、一と旗擧げられたら、きつと私は君の側へ驅けて來ますよ。では、御目にかかりませんから、どうぞ、あのマダムによろしくね。ちや、これで失禮。これから、すぐ出發します。猶、あの竹村君へもよろしくね。さよなら！」

寢卷のまま、扉の前へ飛び出した清は、その主人公同様に褪せた色の風呂敷包み一つをもつて、相變らず洋服屋の店に立つてゐるサイレント・セールスマンのやうなだぶだぶの服を着た葉山が、かう云つて起き抜けに挨拶しに來たのには、一方ならずびつくりした。

葉山は、逃げるやうに握手をして、まだ仄暗らい階段を、淋しく軋ませながら降りて行つた。



清は、引留めては見たものの、先方の決意があまりにはつきり語調にあらはれてゐるので、たつて留めるわけにも行かず、彼の塵まみれになつて、鼠から灰白に變色しかけた中折れのトツプを、階段のつきあたりにともしばなしにしてある瓦斯火の下に、見えなくなるまで見送つて、何とも云はれぬ氣の咎めに苛まれながら、部屋へ取つて返へした。クララも、起きあがつて、ちようど寢巻を脱いで、平常着に着換へようとしてゐたところなので、彼は、二人の間にいつの間にか默契的に出来あがつた約束によつて、彼女の方を振り向かぬやうに、卓の前へかけながら、そこにあつた煙草へ火をつけた。

「どうしたの？ わたし、ちつとも日本語がわからないのでね。」

背後には、女の忙しさに體を動かしながら話しかける聲がした。

「葉山君が、東部の方へ今朝出發して行つたんだ。」

「まあ、そんなに急に？」

「それが、どうも僕にはよくわからないんだがね、むかうには二三人友人がゐるさうだつて、まあ、この市に厭きたんだらうね。」

「惜しいことをしたわね、社のみんなに紹介してあげるのだつたのに。今日は、集會なんです。何故、貴方御留めにならなかつたの？」

「いや、留めたんだがね、どうしても行くつて、すつかり汽車の時間まで調らべてゐるらしかつたんでね。」

「わたしでも、日本語が話せるとね。わたし、これから習はうかしら、貴方、教へて下さらない？ そんなにむづかしい言葉ぢやないでせう、日本語は？」

髪を掻きあげながら、彼女は清の横手へ姿をあらはして、つと寄り添ふと、

「グッドモーニング、キヨシー」

と云つて、挨拶の接吻をした。

彼は、憂鬱さうに挨拶を返へした。

葉山が、はじめて自分の部屋を訪れた當時からの、彼に對する自分の所置や、それがどう彼の眼に映じたであらうかが振り返へつてかんがへられた。坂田のああした紹介狀をもつて、遙々日本から來た以上は、彼は通り一遍の旅行者ではなかつたのだ。自分は、彼に對して、どれ

ほどの好意をもち、どれほど努力をしたらうか？ 定めし、彼にとつては、冷酷な主我的な、自分の戀愛事件や職業にだけ熱中した男としか見えなかつたらう。をりもをりとて、クララの事件のまつ最中に、よくも彼は飛び込んだものだ。彼の前で云つた自分の、どつちかと云へば放言にちかい高飛車なもの云ひやうも、まだはつきり頭に残つてゐる。彼は、いちいちそれを眞面目に、苦しい自分の立場に同情して、理解してくれたらうか？ それにしても、さつき別れるときの言葉は、どことなく針を含むだやうな諷刺があつたのではないか？ 『一と旗擧げるとき……』採りやうによつては、ひどく腑甲斐ない自分を鞭打つた言葉だ。それはさうと、いつたい、彼は何をしに渡米したのだらう？ 一度、ちらりと仄かしたことがあるとほり、アメリカからヨーロッパ大陸へでも渡るつもりか知らん。……

『どうも、あの男は、僕には未知數だよ。』

かう云つて立ちあがつて、隅の小さい瓦斯爐へ、世話女房じみた格子縞のエープロン——それは、彼が寫眞をもつて怖づ怖づ彼女を訪れた晩を懐ひ出させる記念多き品だつた——を掛けて、珈琲を沸かしてゐるのを見ると、そそくさと服に着換へて、洗面所へ降りて行つた。

『今日は、大部議論があるでせうよ。何しろ、アイ・ダブリュウ・ダブリュウの方では、あんなに過激な態度をとつてゐるんですからね。あれで、本部のうちでも、硬派の人達は、きつと反對するわよ。』

顔を洗つてあがつて來ると、卓の上へ、昨晚の残りの麵麩と、珈琲のポットとを配置しながら、クララは、もう葉山のことなどは忘れてしまつたやうに、今日の集會のことを話しはじめた。

清は、鏡にむかつて、櫛を使ひながら、透き徹るやうな彼女の横顔に、暫時見惚れたまま、胸苦しいいままでの考を半ば意識的に忘れようとしたが、それと同時に、彼女の言葉によつて、突如眼の前に描き出された、今日の支部の會合のことに、再び氣持が遮られて行つた。

彼の眼には、いつもの、マルクスとエンゲルスの下手な刷筆畫を飾つた、ニスの匂ひのぶんとする、塵埃つほい、ひろい會場が浮かんで來た。無数の、鷲鳥の鳴くやうな聲を出す折疊み式の、粗末な子のぎつすり並んだ、殺風景な床の上に、複眼をもつた動物のやうに、四列に黒く足元まで凝り寄つてゐる、懷疑的な聴衆が、いつばいに填まつてゐる。話しながら、壇

から三十度ぐらゐの角度を作つた窓を、新しい空気を吸ひ込むために向くと、きつと監獄といふものを懐ひ出させる赤煉瓦の、隣家の壁がそこにはそり立つてゐる。司會者の發聲で、演壇へ行くまでの、糞着落きに落着きながらも制し切れぬ鼓動の高鳴りを聞く心持、誰を賤めるともなく漫然と多數の人間の上へすこし昂奮した瞳を走らせる一瞬間、呼吸を抑へて草稿を卓上へひろげる次の瞬間、それから、頭をきつとあげて、最初の一語を發音する前の、ちよつと盲目的になつた、熱で膨脹しきつた室へ闖入したやうな氣持、——それから、軟派の、主領株が、自分のしやべつてゐることに對して、『ちえツ、ちえツ』と舌打ちする響、『ノー！ノー！』と叫ぶ、野次り屋のトマスの憎々しい聲、しばらくつづく騒亂の上にのしかかるやうにせり出して、自説を強調するときの身振り、再び恢復された靜肅のうちに、自分の顔を興味と好意をもつて瞻あげる誰彼の顔——最後に、榴散彈を投ぜられた捕虜の群のやうに立ち騒ぐ聽衆のすべて。それらは、あまりにはつきり過ぎるほど、清の頭にはいつでも甦るべき記憶となつて印ぜられてゐたのだ。そして、話し終つて、自席へ戻つた場合の、頭から爪先までぞくぞくする、多數の人間の注視の的となつた際の、シャワー・バスに刺戟されるやうな快よい自意識と、それ

を片つばしから引剝いで行くやうなエの辯士の駁論に對する不安と、それももう彼にとつてはあまり珍らしい感動ではなかつた。自分の、思ひ切り左傾した議論が、難なく老獪な幹部連によつて、妥協的に切崩されてしまつて、ときには、全く正反對な決議にまで終つても、猶、一人の日本人として、かなり流暢な英語を驅使したあとに來る一種の叛逆的な矜負も、その場合充分に彼の社會性を満足させるに足る報酬の一つであつた。

「また、ベターソンとトマス爺さんが、反對することせうね？ わたし、あのベターソンといふ男大嫌ひよ！ いやみね、あんな詩人みたような身装をして事務所の下つ端の癖に！」  
クララは、バタを塗つた麵麩を、皿ごと彼の方へ押しながら、すこし顔をしかめてその一片に齒を立てた。彼は、熱い珈琲を、やたらに匙で掻き廻はしながら、得意げに微笑した。

「それでも、彼等、今日といふ今日は、思ひ切つてとつちめられますよ。」  
それから二人は、ゆつくり食事を長びかせながら、今日の會合のことについて語り合つた。今日といふ今日の會合は、いつものプロバガンダ向きの一般的會合とちがつて、すこしその性質に複雑したところがあつた。それは、要するに、社會黨支部のタクティクスを決定すべき

一つの事件に遭遇してゐたからであつた。のみならず、清にとつては、その日、クララが家出をしてから、はじめて、彼女の父母と公會の席上で接見しなければならぬ心苦るしさがあつたからであつた。事件といふのは、アメリカが歐洲戦争に参加してしまつた今、社會黨全體として、インターナショナル本部へ、全米的にその態度を決定した決議文を送るべく、ニューヨーク市の本部から電達があつたからであつた。そして、清は、花々しい青年辯士の一人として非戦論者としての態度を明かにするとともに出来るならば中立的な態度を執りたがる幹部連を動かして、街上にまで出て出征氣分に浮かれてゐる市民の間へ社會黨の決議を突きつけ、鋼鐵業主や食料品問屋の御手先になつて人道戦の熱を煽つてゐる新聞、教會、學校、陸軍當局とも闘つて、歐洲戦争の無意義を知らせようといふ、比較的左傾した部類の同志に、ある點まで彼の役割を托されてゐたのもあつた。コリンズ氏夫妻と會ふことと、聴衆の大半と抗争することと、いまの場合、どつちが難物であつたかは、彼にもわからなかつた。クララは、すすまぬ勝ちな清に、敢然として、是非父母に會つて、好意をもつて握手してくれと云つた。

「そりあ、さうと、あのローガン町の鋼鐵工場がすこしごたつてゐるんですつてね。」

「ローガンと云へば、ああ、あのやはりトラストの一部だね？　面白いな、出鼻を挫かれてるやうなものだね。」

「さうよ、昨日、事務所で誰か云つてましたよ。たしかにアイ・ダブリュウ・ダブリュウの連中が焚きつけてるんだつて。」

「もうストライキははじまつてるの？」

「さあ、どうですか、どうせ新聞には出ませんからね、この際ですもの。」

「あの連中のやることは、かなり悪辣だね、アイ・ダブリュウ・ダブリュウはさ、ああまで直接行動を執らんでもいいとは思ふがね。」

「でも、やる當人にとつては、眞劍なんでせう。理論はべつとしても、わたしも、ときどきああいふ風な具合に、膽をつぶさしてやるのはいいと思ひますわ。」

彼等は、それから、卓を片付けて、清の演説の草稿にかかつた。彼は、いつもするやうに、丹念に、自分の話す段取を、大前提、小前提、斷案——といふ風に別けて、いちいち例證や、強調のパートを分類して、括弧へ入れるやうにして、演説の土臺を築きあげて行つた。夜前に

して置くべき仕事であつたが、土曜日のことでもあつたので、二人は、どつちが云ひ出すともなく、近所の活動寫眞を見に行つて、歸へるとすぐ眠つてしまつたのだ。彼は、訝いほど自分の文法上の誤謬や、句法の日本流なところを彼女に糺した上に、出来あがつた草稿をもつて、低聲で讀んだ。

「なぜ大きい聲でおやりにならないの？　ひとつ演壇に立つたと同じやうにやつて見せて頂戴な。わたしが聴衆よ、野次らないから。」

かう彼女は好奇心に驅られて、立ち漕る彼を促がした。彼は、いくども咳拂ひをしたのち、下宿の連中を憚りながら中音になつて、草稿を讀みはじめた。彼女は、はじめて演説者の内幕を覗いたときの、張り詰めた注意をもつて、一語一語を聴き道がさぬやうに耳を傾けた。いくどか吃つたり、鼻聲になつたりして、やうやく讀み終つたとき、

「まあ、貴方、聴衆が不足なんでせう、わたし一人ぢや。だつて、いつもとはすつかりちがふわ。そんなんぢや、わたしにだつて出来ますわ。」  
と、不満らしく批評した。

「いや、これはその、こんなとこぢやほんとに演壇へ立つたときと、氣持がちがふんだからね。」

彼は苦笑しながら、むきになつて、恥かしめられたやうに辯解した。

「でせう、だから、貴方は、わたしを眞剣に信じて下さらないんだわ。もう一度やつて見て下さいな。わたし、どんなに、貴方が熱烈な演説をなさるかを、わたし一人だけで伺がつて置きたいのよ。わたし、利己主義でせうか？」

彼は、實際、自分の住んでゐる下宿の、床の厚さを知つてゐた。それから、窓ガラスの開け放つてある部屋のすぐ下には口喧ましいアイリツシュの夫婦者や、その下には夜業をしてゐる染物工場の男だといふ獨身の老人の眠つてゐることも熟知してゐた。それに、もつとも彼の憚かつたことは、日常、同じ下宿で顔を合はしてゐる、謂はば、何もわからない、眼に一丁字もない連中に、自分が社會主義者であるといふことを、やたらに知らせたくはなかつたのだ。そして、大概の場合、いままで彼を訪れた友人は、よし彼等が同じ主義者であつたとしても、日本人であつた。

「ぢや、やりますよ——」

彼は奇態に、そんな遇然の出来心に固執する女に、神経的な反撥心を起こしながら、我と自分の怒を自制するために、まつ赤になりながら、思ひ切り頓狂な聲を張りあげた。

「素敵、素敵。——あら、また低くなつたのね。さう、さう、そこをもつと張りあげるといいわね。それで落とすんでせう？」

彼女は、作曲家のやうに眼を瞑ちて、指先で卓の上を敲きながら、ときには、軽るい足踏みやさへして、一齣一齣について批評した。

彼は、いくどか途中でやめようとしては、彼女の熱心な様子に曳擦られて、とうとうしまひまでやり終つた。しかし、やり終つて、彼女がにつこりしながら、拍手の模倣をしたときの彼は、決して愉快な顔をしてはゐなかつた。彼女は、自分の熱誠が、知らず識らずのうちに、男の自尊心を傷けてゐたことに気がつかなかつたのだ。

一時の集會に、二人の下宿を出たのは、一時であつた。

彼は、その間、八百屋や肉屋を駈擦り廻はつて、かなりの買物をさせられた上に、晝餐を終

ると階下の洗面所へ行つて、人の出入りする暇を偷んでは食器を洗はねばならなかつたし、おまけに、時間の差し迫つたとき、クララは一張羅を着るためにもの三十分も費やしてしまつたのであつた。二人は、妙にそぐはない氣持で、無口になり勝ちになる電車を、氣短かに呪詛しながら、支部へ着いた。

會はもう既うにはじまつてゐた。

鹿爪らしい顔をしたデュ・ボンといふ司會者や、「演説婆さん」と綽名のついてゐるフランクリンといふ微温的な老婦人や、首を張子細工のやうに振りながら鼻眼鏡でいつも聴衆の方ばかり氣にして見てゐるベターソンや、ひどい近眼で殺人犯のやうな悪相に見える印刷屋のクレーマアや、長髪に牧師のやうな潔癖な黒装束をした新聞の主筆モンローや、掏摸のやうな眼をした支部中の左傾派の鬪將であるサンダースといふ青年や、それに、いつもの集合へただ擧手をすゝるために来るやうな、記章だけの會員の多くや、ジョセフィン夫人の助手や、コリンズ夫妻もみなその後姿ではつきりわかつた。二人は、そつと靴音をしのびながら、後列の椅子へ並んで着席した。

前の演説者がどんなことを云つたかわからなかつたが、壇上に立つてゐるのは、酒場の主人のやうに肥つた、顔の醜い男で、眠むさそうな聲でしきりに獨逸の非人道的な陸軍を攻撃して居つた。

清は、コリンス夫妻に、最初から極まりの悪い調見をせず終つたことを、心私かに喜びながら、じんじん鳴る耳で、強いて演説者の話の内容を聞き取らうと試みたが、胸のうちが、自分の話さうと思ふことではいつばいになつてゐて、何も聞き取れなかつた。數人が立ちあがつて同じやうな姿勢で、同じやうなことを、瘖高な聲音で呶鳴り散らした。どうかすると、二た言目には、『Our Socialist Party』と、糶賣が同じ品目を呼びあげるやうに、支部のことを呼び掛けるのが、ひどく耳觸りであつた。それ以外の言葉は、ただそれをいろいろの節をつけて歌ふためのコーラスのやうに、單調に、空つほに、同じ意味に聞えるだけだつた。

いつの間にか、自分の名がデュ・ボンの裁判長めいた、尊大ぶつた喉聲で呼ばれてゐるのに氣がついて、清は立ちあがつた。立ちあがると同時に、心配さうに自分の横顔を凝視してゐるクララの眼がぼんやり眈に映つた。彼は、前へ押のめされたときのやうな氣持で、つかづかと椅子の列の間を通り抜けた。

壇へ登ると、いちばん先に視線のぶつつかつたのは、瘖せたコリンス夫人の、探ぐるやうな侮蔑するやうな、懼れを含んだやうな眼だつた。彼は、はつとなつて、卓の上の草稿へ眼を伏せた。はじめの一分間ほどは、何を云つてゐるのか、自分にもわからなかつた。草稿を見ると人心を巧みに惹捉へるやうにと、苦心して書いた肝心な句が、二行ほどかつ飛ばされてあつた。彼はつとめて自分を冷靜にするために、クララのゐない方を見遣つた。

「……トルストキが、彼の日露戦争當時、ロンドン・タイムスへ寄せた、日露戦争論を、諸君は既うに御讀みになつたこととかがへます。如何に彼は、身は交戦國の一員であつても、超人的な態度をもちまして、戦争の邪惡を憎んだことでありましたらう！ 彼は嘆じました、「宛かも、一つの壺の中へ入れられたる蜘蛛の如く、我等は、相互の破壊以外に何ものにも到達しないのだ。」と、然り、相互の破壊！——世界は、いまや、一つの大きいなる壺であります。そしてそこには一疋、二疋、三疋——無數の蜘蛛が、資本主義の手によつて投ぜられて、互に相喰み、互に殺戮し合つてゐる、これ即ち歐洲大戰の現状ではありませんか！ どんな人道上的動機が

動員されたる交戦國民間に、根強く宣傳されてあつたとしても、諸君、宣傳は單なる宣傳に過ぎないのであります。否な、寧ろ、我我は、その宣傳の背後に、赤裸々に右手に愛國心の鐵鞭を揮ひ、左手に巨億の富を得つつあるアームストロングや、クルツプの、惡鬼羅刹の如き姿をまさまざと見るのではありませんか？ 戦争！——諸君、我々の間に、戦争はただ一つしかない筈ぢやありませんか。それは、階級闘争です。クラス・ウワア以外の戦争は、ヒンデンブルヒとフォツシエとフレンチとに任かして置かうぢやありませんか。さうです、たつた一つの世界的大戰、これが萬國の勞働者の團結して闘ふべき階級戦即ちそれです。さて、私は、今日の席上、別に諸君を、講壇社會主義の講座をもつて御迷惑させる氣持は毛頭なかつたのです。私がこれから述べやうとする意見は、恐らく、先着辯士諸君が熱辯を揮はれたことと大差なからうと思ひます。だが、私は、この席上、ただ一人の日本といふ交戦國の國旗の下に生れました人間として、果してこの目下歐洲文明のすべてを敲き毀はし、東洋にまでも及ばんとしてゐる武力の跳梁に對して、どんな考をもつてゐるかを、衷心から感ずるままを、一言吐露さして戴きたいのです。それで、それが……」

彼が、稍油の乗つた調子になつて、ここまで言葉を運んで來た刹那、正面の屏がけたたましく誰かに寄つて押し開かれて、馬蹄のやうな靴音とともに、聲高く叫ぶ男の悲鳴が聞えた。影のやうに躍り込んだ男は、ものをも云はず、司會者のもとへ駆けつけて、何かを喘ぎ叫いた。清は、總立ちになつた聴衆の前に、啞のやうに黙まり込まねばならなかつた。

「靜かに！靜かに！」

「鎮まれ！」

「何でもないんだ。立つな、立つな！」

「ありあ、ウイルキンソンの秘書だ。——何か異變があつたんだ！」

「黙れ！辯士、やれ、やれ！」

一と渡り波濤のやうな騒音のうねりが過ぎて、駆けつけた男が、誰かの開けた空席へ、氣絶するやうに斃れて、重苦しい息を吐いたとき、清が、もう一と段聲を張りあげて、次の言葉を云はうとしたのを、陰に籠つたデュ・ボンの聲が、

「一寸待つて下さる、」



と注意して、壇の右端に、椅子を力に起ちあがつた彼は、いくども半巾で額を抑へながら、眩くやうに、聴衆にむかつて一つの報告を試みた。

「同志よ、只今、ケヤード君の報告によれば、我が支部の會計主任たるウイルキンソンは、今朝、浴室に於て自殺を遂げたそうです。――」

清は、自づと天井を瞻あげながら、デュ・ボンの重苦しい聲が、何を云つてゐるかを、確かめる必要があるやうな氣の昏倒を感じた。

「同志よ、彼は、多大の金額を株のために消費したらしいのです。」

深い深い沈黙のうちに、デュ・ボンの聲は、鳴りかかつた鐘のやうに沈んで行つた。誰一人、何も云ふものはなかつた。もし、彼が、人並外れて長い骨ばつた軀を、投り出すやうに椅子の上へ卸ろしたときの、まことに閉苦しい物音を立てなかつたならば、一座は、永遠の催眠術にかかつたやうに、そのままの沈黙をつづけてゐたことであらう。だが、一人の老婆が、雀の囀るやうな舌打をしたと同時に、會場は、忽ち、ヒステリックな、獸的な、極端に破壊的な、怒號、叫喚、咆哮、胃潰辭、亂争、足踏の突發によつて、眞つ黒い混亂の闘争場と變じ

てしまつたのであつた。

第  
四  
章

街が賑かになるに従つて、周吉は、だんだん自分といふものが縮小して行くやうに感じた。彼は甚だしい空腹のために、四肢の中心を失つた人間が、でこぼこな道を辿つてゐるやうにのろ／＼あるきながら、頭の一と隅ではこんなことをかんがへた。

「俺も、やはり、群集の一人なんだ。永遠の群集の一人なんだ。——こんなにいろ／＼な人間がゐるんだが、群集となると、また全くべつな動體になるものらしい。一人一人をほぐして見りあ、俺などと同じやうに、自分のことで頭がいつばいな奴ばかりなんだらう。」

しかし、これは、飢ゑでから／＼になつてしまつたやうな彼の頭脳を、刹那的に、けたたましい呼鈴かなんぞのやうに鳴り過ぎた考であつて、次の瞬間、彼はいつものやうに、それにつづいて来る筈のべつなほかの思想が皆目あらはれて來ないことに、漠然としたもどかしさを感じ

じてゐた。そのもどかしさの底には、空虚な疲労が潜んでゐて、彼の全身をむんづと抑へつけるやうだつた。

彼は、昨晚から、何時間、ものを食はなかつたかを數へて見た。

と、彼の頭上に 鞭のやうに走る何物かの幻覺が閃めいたので、はつと思つて眼をあげた。それは、やはり、一本の鞭だつた。

「どうです、諸君、月給はよし、食物はよし、ただで外國見物が出来るといふもんだ。健康を思ふ人は、誰でも志願せぬわけに行かない。我々は、いまだどんな人でも、どれほどの人数でも必要なんだ。——志願するなら、今日、たつた今が絶好の機會だ。ちよつと二階へあがつてくれさへすりあ、今日から早速軍服を纏つた堂々たる軍人になれる。誰でも、御希望の人は、遠慮せず、二階へあがつてくれ給へ。——君はどう？君は志願しませんか？そこにゐる若い人は？ぢや、君は？……」

かうがさつな言葉でしやべり立てながら、細い革の鞭をやたらに揮り廻はして、五六人の男たちに志願兵の勧誘をやつてゐる、鍰廣ろの軍帽をかぶつて、カーキ色の服を着た、下士官

らしい男が、いきなり周吉の視野に飛び込むと、急に遠退いたやうに小さく見えた。周吉は、力のない腹部に深く息を吸つて、もう一度、麵麩片一つ食はないままになつてゐる空腹の時間が、はたして十六時間であつたか、それとも十七時間であつたかを數へなほさうと試みた。その途端に、軍人の鞭は、宙にくる／＼と半圓を描いて、異様な觸角で探ぐるやうに、周吉の眼の前へ飛んで来て、びたりと彼の臍を指した。

「……君はどうですか？」

彼は、鞭の尖端の非常に細かい顫ひをじつと瞞めながら、生え伸びた髯の中で、かすかな苦笑を洩らした。

「それで、生命はどうなるんでえ？」

周吉の隣りにゐ合はした失業者らしい男が、軍人を揶揄ひ半分に呟いて横の方へ嚙煙草の汁を吐いた。

周吉は、乾いた舌を弾き出して、

「俺ちやあるまいね、——この日本人を！」

と答へた。

すこしあるくと、背後の方に、その軍人が今度はちよつと叱りつけるやうな音高な聲で、  
『みんな臆病になつちやいかん！ドイツはもう敗け戦なんだ。……』  
とがなり立てるのが、強い振動で彼の耳へ達した。

『歐洲戦争だな！』

彼は、ふと頭をあげて、眼の前のホテルらしい建築の、屋上のフラッグ・ポストに、日光に赤い舌を吐いてだらりと垂下した、アメリカの國旗の、赤い横線を見ながら懐ひ出した。ちつとも新聞といふものを見ない彼には、マルヌ河かどこかの戦場のことを讀んだきりになつてゐる、一ヶ月ほど前の新聞の記事を懐ひ起すことが、たつた一つの手懸りであつた。『ドイツは敗け戦』だといふ、いまの言葉は、何だか全く想像のつかぬ結論へほかんと投げ込まれたやうで、ひたすら世界のことにとくなくなつた自分に對する焦燥を起させるのみだつた。

街は、目的地點へ達するまでに、ことさら迂回するやうに、迷宮然とした螺旋形を畫いて、しちくどく右へ折れたり左へ曲がったりした。

『三階だと云つたな、トムの奴。……第一階が古木屋で、地下室が酒場と。古木屋と酒場、

——妙な家だな。百十三番。……あんなところにI・W・Wの本部があるのかな？』

ぎらぎらする日光の下を、ふしぎなほどあはてきつた人間どもが、大股に息せききつて、いろ／＼な方角から彼へ近よつては、何かわい／＼わめき散らしては逃げるやうにどこかへ吸ひ込まれて行つた。ときをり、彼は、自分が何のために、わざ／＼かうやつて、日盛りの街を、他人に押こくられてあるいてゐるのかと、衝動的な立腹を感じるほど、道は遠く、人どほりが多く、行手がやたらに騒々しかつた。そして、しまひに、一軒一軒、きまりきつた玄関、扉口窓、屋根、屋根、屋根と、同じ型を反復してやまぬ人間の住宅といふものさへ、馬鹿げて臆劫な、まだるつこい空間の奪ひ合ひごつこをしてゐるやうに思はれて、その前をすつと素通りして、行手のべつな街へ樂に駆けとほすことの出来る視力のやうに、何とか無駄をせずに通過してしまふ巧妙な工風はありやうなものだ、としきりにひだるい歩行に對する齒搔さを起こすやうにさへなつた。

やうやくのことで、人間のいつばい填まつてゐる、大通りへばつたり行きあつた。彼の、

馬車を曳いてゐた頃からの知識は、さほどかんがへるまでもなくそこが目的の街であることを覺らせた。人間の群は、街の兩側に列んでゐるだけではなく、建物の窓から、ビルディングの屋上から、はては街燈の柱の上にさへも溢れきつて居つた。大通りから喰み出て、そこへ近づかうともがいてゐる人たちが、横丁に渦を巻いて奔めいた。困つたことだつた。何かの行列にちがひない。そこはとても通れそうにもなかつた。

そのとき、誰が發聲するともなく、無数のメガフォーンへ口をあてて騒ぎ立てるやうな、秩序のない肉聲が、どよみを打つて大通りの底から湧きあがつた。周吉と前後してそこへ駆けつけた人たちは、人間の渦の中から夢中に體をもがきながら、その響に魅せられたやうに、大通りの方へ蜻蛉のやうな頭を捻ち向けると、期せずして、肺に力を入れて、

「うわ——ツ——」

と囁し立てた。

木の葉のやうに戦ぐ帽子や半巾や國旗やバラツールや手や頭の上を、強い正午前の白日がじり／＼と照りつけた。

と、り、う、れ、うとした喇叭の音と、たらツ、たらツ、たら、らツた——と撥の尖端で弾く太鼓の響と、人間の鼓膜から直接に涙腺へ突抜ける銀笛の尖がつた音とが、群集の動搖の下に、まぎれもなく三つの複音を曳いて、通りのまん中へんを進行してゐるけはひがした。軍旗がとほる。小隊旗も見えた。劍のついた銃の穂先が、長い時間、何の遮へぎるものもなく、ぎらぎらした密林にあつてつづいた。それが、ふたたび旗に途切られて、騎馬の革帯を十文字に肩に食ひ込ませた、大きい男が馬の動作につれて、ひよいひよい軍帽を戴いた頭を振りながら、あらはれてはすぐと見えなくなつた。銃劍の單調な連続が、また長い長い時間を占める。同じことが、絶えず繰返へされた。街に溢れきつた群集は、一刻も氣持の昂奮を低下させまいとして、あとからあとからと叫びつづけた。もう一度、軍樂隊のとほる様子がした。すると、今度は、兵卒を満載した、嚴丈なモーター・ローレの隊伍が市街を蹂躪するほどの轟きをあげて、徐行して來た。鍋のやうな、錫か何かで出來た甲をかぶつた、二十代の青年たちが、自動車の上から雀躍りしながら、群集にむかつて挨拶する子供じみた光景が、次から次へと繰返へされて止まなかつた。それを見てゐるうちに、周吉の眼は、うつすり霞んでしまつて、疲勞で自制力

を失つた彼の臉には、ひとりでに湧いて来る涙が、見る見る大きい粒になつてぼたりと落ちた。彼は、齒を食ひしぼりながら、つづけさまにぼろぼろとこぼれる涙を、雙手で拭つた。涙は、抵抗のない臉を犯して、やすやすと流れた。たらつ、たつたつた、たらつた——と太鼓の響が、とぎれた喧騒の間を縫ふ。無数の靴音がぞく／＼とつづく。ふたたび群集の叫喚があがる。

「くそツ！」

しまひに、横をむいて、ほかのことをかながへて氣を紛らはそうとして、かう呟いた途端に朦朧とした誰かの顔が近づいて、

「君ぢやないか——どうも、君らしいとは思つたが、ひどく變つてるのでね。」

と、聞き慣れた口吻の日本語で呼び掛けられたので、ぎよつとすると、それは喧嘩して別れた小森惣次郎そのものであつた。

「さうでしたね、やはり。どうも、私はさつきからさうだらう、さうだらうと思つて居りましたかね。」

彼の側から、二階堂の何かに蝕ばまれたやうな顔がひよつくりあらはれて、帽子を脱いだ。

周吉は、まだ涙に濡れた顔に、苦が苦がしい微笑を浮かべた。彼は、拳で、濡れた睫をもう一度擦りながら、

「あれが、みな、死に行くのだと思ふとな——可哀そんなもんぢやないか！」

と云つて、辯解するやうに大通りの方へ、眼を轉じた。馬の頭のはげしく動くのと、大砲の何かを曳いて行くらしい金属性の地響とが、群集のまん中を通過してゐた。

「どうした？何をしてるんだ、いま君は？」

惣次郎は、急き込んで訊ねながら、それでもなつかしさうにパイプをもつた手を、周吉の肩へ置いた。

「俺は、君が會て云つたやうに、逆立ちしてるんだ。そして、人生の謎を解かうとしてるのよ。」

周吉は、かう云ひながら、かすかな顔が、身内のどこからか起るのを禁ずることが出来なかつた。

「——といふと？」

惣次郎は、探ぐるやうにむさぐるしい身装をした周吉を睨めた。

「職業は——乞食さ。世の中を逆さに見てるんだ。」

周吉は案外横柄な聲で答へた。

惣次郎は、しばらく無言で友人の顔から眼を離さず居つたが、ややあつて、出征軍の行列がとほり過ぎて、群集が大通りから洪水のやうに横丁へ氾濫して來さうなのに感づくくと、

「君、どこかそんへんでアイスクリームでもやらうぢやないか。ここぢや、何の話も駄目だ」と、周吉の腕を抑へて、ずん／＼あるき出した。

二階堂は、しきりに周吉の垢だらけな後姿を眺めながら、首を捻つて二人のあとにつき従つた。

「君 僕は、實はどうかして君に會つて佗びたいとは思つてゐたんだよ！」

惣次郎は、俯向きながら、獨り言に耽つてでもゐるかのやうに云つて、パイプを二三服吸ひ込むと、まつ赤な顔をしてげつ／＼と咳き込んだ。

二

「——ぢや、私は、一と足お先に、例のコールン・エキヂエンジ・ビルデングのへんをちよつとあたつて見ませう。」

保がそそくさと出て行つたあとの、まだ晝餐すこし前のレストランには、天井の巨きい煽風機の風車みたやうに廻轉する音と、卓の周圍をやすりを使ふやうな唸り聲で飛び廻はる蠅の群のほか、しばらく何の物音もしなかつた。

周吉は、陰鬱な顔をした希臘人の給仕が、最後に運んで來た、冷めたいレモン茶を、喉を鳴らして飲み終つて、元氣づいた顔をあげた。

「乞食——とは妙な商賣をはじめたもんだね。」

さつきからいくど繰返へしたかわからぬこの言葉を、煙草を詰めかへると、もう一度皮肉らしく云つて、惣次郎は、それでも好奇心にひかつた眼を、じいと相手の顔から離さなかつた。

周吉は、細く眼を瞑つて、いま自分の嚙下した食物が、忽ち血となり肉となつて、春くやうな



活力を體のうちに漲らすのを、しづかに楽しむやうに、しばらく無言であた。

「君も、さうさう「人類」の運命をだけ心配しなくとも、大概もう自分の身の始末を心配してもいい頃だがな。」

惣次郎の次の言葉は、やや挑戦的だつた。

周吉は、顔へ兩手をあてがふと、ごし／＼と二三度上へ擦りあげて、けだるそうな欠呻をするとともに、にゆうと脂汗だらけなその拳を、天井へ突きのぼした。

「や、有難う。これで、すつかり、腹は出来つちまつた。」

彼は、欠呻の涙に濕つた視線を、じろりと惣次郎の顔から、鼠の糞のやうに蠅の散らばつたさまさまの汚點のある卓布の上へ轉じて、ちよつと沈思的な顔になつた。

「俺も、働かうとは思ふんだよ。これから、ほんとに俺の思想そのものを生きて見たいと思つてるんだ。——しかし、ね、それがびつたり来る生活でないと、生涯乞食をしてもいいやうな氣もするな。」

その言葉に、惣次郎は、躊躇なく反對した。

「ぢや、やりあいぢやないか！第一、見つともないな、そんな恰好をして。君は、それでいつもりかも知れないが、人間は社會と半分半分の交渉をして生きてるんだからな。」

周吉は、圓滿に笑つた。

「——だから、探がしつつかあるんだよ。」

「いくら徹底的に煩悶するもいいが、何も、乞食にまで成り下がる必要はないよ。それで、全體、君は、何か得るところがあつたと云ふのかい？」

「相變らず、君は手厳しいな。……俺に、一杯のめしを奢つたなら、奢つたことそれ自身で満足が出来んのかな。めつたにもう奢る機會もなからうぜ。は、は、は……それは冗談だが、とくに、舊友諸君はどうしてるかね？」

「高橋の奴、女に押込まれてな。まあ、あいつだけだな、變つたのは、あの男も悲劇だね——やはり、竹村のところの働いてはゐるんだが、女と同棲して随分困つてゐるらしいよ。行かうと思ふんだが、どうも氣の毒のやうな感じがしてな。自分一人でさへびいびいしてゐたところへ、毛唐の女なぞに飛び込まれて見る、そりあ惨めなものだらうよ。水沼の奴は、ストライキ

で遊んでゐるし、いまの先生な、あの男、すこし気がへんだと思ふんだが、どうせこれからは人手も必要だからと思つて、いつしよにやつてゐて貰つてゐるんだ。あれでも働くには働くがね……」

惣次郎は、木村といふ男の出資で、謂はば木村の出店みたやうな仲買商らしい事務所を、下町へもつことになつて、いまその事務所の物色中であつたのだ。周吉は、さつきから、鐵の、満州大豆の、豆糟の、セルロイドのと、いろ／＼な商賣上の話を、いやといふほど食事中に聞かされたあとなので、勢ひ、無理にも惣次郎の話をどこかへ轉じなければならなかつた。彼は友人の偽醬油以來の講義には、すつかり嫌氣が潮してゐた。

「ぢや、何と云つたつけない、クララ・コリンスか、一度寫眞を見たことがあるから知つてゐるが、——あの女が駆けつけて來た、押込女房といふことになつたわけだね。ふむ、満足に行くかな？問題は、どん底へ行くと、いつも麵麩だからな。どんな美しいロマンスも、麵麩の力にかなはないのは皮肉だよ。麵麩は強い。世界人文の原動力は、麵麩だからな。是を離れてどんな形而上學的な煩悶をしたところが駄目だ。實はそんな煩悶は、石鹼珠のやうなものだ。人類

にとつてそんな煩悶は、贅澤だ。俺は、それで自分で云つたんだ。人は何のために生れて來たのか？——ほんたうだ、何のために我々は生れて來て、生きてゐるのか？それは、麵麩を食ふためだつてさ。俺の氣持はわかるかい？俺は、この麵麩の象を、社會のどこにも發見するんだ。銀行、ありあ、麵麩の蓄積所さ。船、港から麵麩を運んで來るんぢやないか。住宅、そこでは問屋元から麵麩を小買ひにして來て、市民が食つては寝るところさ。誤解しちやいかんよ。麵麩と云つても、食物といふ意味なんだからね。裁判所、市役所、監獄、警察署、みな麵麩をどんなに分配するかについてのいざこざを、法律的に政治的に解決するところぢやないか。戦争だつてさうさ。結婚もさうであれば、財産ももちろんさうだ。一切の職業が、麵麩を中心にして社會組織に放射線を畫いてゐるやうなものさ。生存の目的の大半が、食ふことのために支配されてゐる。平凡なことだらう。しかし、この平凡なことが、實際、自分で食へなくなつて、他人が物惜しみするのを、直接この肉體で經驗しなけりあ、とてもわかりつこないんだ。抽象論ぢやなくて、體一つの無産者になつて見ないと、ああ、あすこにはあんなに食物を濫費してゐながら、ここには土でも食はないと生命の繼げない奴があるんだ、といふ世の中の麵麩の分

醜の不均均さがわかりあしないんだ。冷酷なもんだからな、人間の所有の觀念といふ奴は！それで、俺は、もう一步すすめて、食物といふエネルギーの發電所のことをかんがへて見てゐるのさ。いつたい、人類と動植物の間には、人間の發見した進化論やその他の三つ四つの人技的法則はべつとしても、生物として見る以上、同じ地球といふ星の上に寄生してゐる生命力の一定量數をもつた、つまり、制限された生命單位を、みんな共食ひして生きたり死んだりして、融通し合つてゐるもんだらう。互に生を食ひ合ふ——かういふよりほかに、生物全體のエネルギーの保持を説明する方法はないんだ。で、俺はかんがへる——地球が他の遊星や惑星との直接交渉を營まない以上は、この地球だけに存在する生命力の量數は一定不變であつて、増すことも減ることもない。生命から生命へと、人間から見ると無限の推移を繰返へして、いくどもいくども死んではふたたび結合し、結合してはまた離散するが、そこに大融通と相互扶助こそあれ、必らずしも、人間世界のやうに、こんな血の出るやうな馬鹿騒ぎをしてまでエネルギーの資源の争奪をやるにはあたらないんだ。これはイルウジョンだよ。社會組織がかうなつて來たから、生存の恐怖にすつかり人間が驅られてしまつてゐるんだ。見給へ、他の生物間には、

苦もなく解決されてゐる食料問題が、ひとり人間世界にだけは、馬鹿々々しい複雑さをもつて幾千年もの間同じ争奪が繰返へされてゐるぢやないか！心理的に、自分の胸の中を探ぐつて見てもいいさ。俺たちの感情とか意志とか理性とかいふものの、八分どほりは、生存の社會的恐怖から發展してゐる、脅威の感覺の硬化したものに過ぎないぜ。俺は、意際、自分が何か云はうと思つたり、感じたり、しやうと思つて、ときどきははつとして自省することがある。そして、ああこの氣持はてつきり無意識な自己保存、種屬保存の警戒から來てるんだとか、これは暗々裡に食物の貯藏をかんがへてゐる慾情だとか、さう自己批評をする氣になることがあるよ。ところが、君、近代文明下に生れて育つた人間のすべては、あらゆる教育機關によつて、境遇の變化によつて、飢餓の豫約によつて、暴力の掠奪によつて、十二分にこの恐怖の本能だけが養はれてしまつてるのだ。二十世紀の人間の精神生活は、はじめつから、この脅威の感覺で極印を捺されてるんだ。それをまつたく脱ぎ捨てる爲にはどうするか？俺は叫ぶんだ、社會組織を變革せよ！と。人間は、他の動物と同じく、環境の生物なんだ。この麵麩の不均衡な分配に、屋上屋を重ねてゐる近代生活だな、これが全然ひつくりかへつて、人間が個としてでは

なく全として進んで行く理想の下に育つて行くんでなければ、俺たちの心から猛獣は去らないんだ。生命の本態への革命！人類はたしかに、いまのところでは畸形兒だよ。そして、どんなに複雑な數字を組立てて、近代産業組織の搾取制度をごまかそうとしたつて、根本的にはそれが、明かに盜賊行爲であると知れてる以上は、もう議論の餘地はないんだ。麵麩の掠奪をやめよ。それは、宇宙のほんとの道に背いてゐる行爲だ。いくら個人が掠奪しても、全般の上からはいつかふたたび取り返へされてしまふんだ。だから、そんな掠奪の組織化を一日も早くぶち壊はして、平均に分配せよ。そして、びくびくせずに、天に任して生命を生きて行け！死んだつて、俺たちは、全然死にきれらんぢやないんだ。俺たちの骨の一片、血の一滴も、決して絶滅するんぢやない。ふたたび、それらは無限の微小な細胞のやうな、生命の力の原子となつて、新に結合して、他の生命を構成するんだ。安心して生きやうぢやないか、安心して死なうぢやないか、萬有は一體だ。俺は、すくなくとも、今後これから生きて行かうとすれば、君の鐵の仲買とやらの御情けで、君の事務所に傭はれて窮屈な思ひをするよりも、この俺の考を出來るだけ人間に鼓吹する機會を作るやうな仕事に働いて行かうと思ふんだ。君は、さつきか

ら、俺の乞食生活を、王侯貴族的な批判點から輕蔑してゐたやうだが、それは、君には所有慾が旺んで、人間の適應性の剩餘産物たる虚榮心が發達してゐて、現在の社會組織を唯一の基本として自己保有術を講じやうとするから、そんな偏見に陥つてゐるんだ。乞食といふものは、君案外偉いもんだよ。すくなくとも、俺には、浮世の盲目どもが夢我夢中で漁り廻つて、掴み合ひをしながら求めるものの何であるかを、ちやんと傍から見ることが出来るからな。俺がもし、ほかの奴から輕蔑されるとすりあ、それは、現代社會の産業組織に不参加だからさ。しかし、俺も、そのうちには参加するよ。その代り、俺の参加は、決してこんな矛盾した社會に、恥の上は塗りの壁土を運ぶためぢやないんだ。根太からその建築物を引すり卸ろすための参加だらう。どうだ、君と喧嘩して別れて、乞食にまでなり下がつたお蔭げで、俺もやつとこのことでこれまで落ち着くことが出來たんだ。俺は、いろいろな意味から、君の辛辣なエゴイズムに感謝する義務があると思ふ。ことに、このハンガリヤン・ガウラツシユは、いいトマトを使つてゐるので、一層と感謝の意を表しなくつちや。……」

周吉は、いつの間にか、自分が大重になつて、傷けられたやうな顔をしてゐる惣次郎に、食

つてかかつてゐるのに気がついた。久し振りで、人間といふ人間に會つて、日頃の鬱屈した氣持を語つて見た快感と、當人の好意に對してすこし云ひ過ぎた、と思ふ輕い悔悟の念とが、並行に彼の心に残つた。

『何ももつてゐない人間は、いちばん強いにはちがひないからな！』

惣次郎は、眼の前にもつれあつてゐる煙草の煙を、隻手をあげて拂ひのけながら、負けぬ氣の皮肉を弄んだ。

二人の周圍には、いつの間にか、大勢の事務員らしいのや、労働者らしい人間が集まつてゐて、めいめいの食物を貪り取つてゐた。それでも、彼等の掛けてゐた卓だけは、まだ誰も同席しないで、黒い人間どもの中に、贅澤そうなまっ白い空間を残して居つた。惣次郎は、それと覺ると、ちよつと嫌な表情をして、パイプをポケットへ藏ひ込んで、

『立たう！』

と、髮の蓬々と生え伸びた友人を促がして、買ひ立ての麥藁帽を、ぐつと眉根まで引いて、勘定臺の方へさつさとあるいて行つた。

表へ出ると、惣次郎は、隣りの煙草屋から、太い葉巻を二本買つて来て、その一本を周吉へすすめやうとした。彼が拒むと、惣次郎は、眞顔になつて、

『煙草だけは、決して拒むものぢやないさうだよ。』

と無理に、周吉の胸のポケットへ差入れた。

つづいて、急にセンチメンタルになつた聲で、彼は周吉に金を貸そうと云ひ出した。周吉は笑つて、取り合はずに、マディソン街の方へのしのあるいて行つた。二人は、いつともなく、別れて居つた。

三

フリスコのトムは、在館だつた。しかし、彼の本名は、トーマス・エツチ・リヒターといふのだつた。おまけに、彼の謂はゆる『會場』といふのは、周吉の豫期に反して、單なるうす汚い、労働者の簡易宿泊所に過ぎなかつた。

指定の番地の、三階のとつづきの、朦朧とした暗闇から、そこだけうす氣味悪く見える、

鼻煙のやうに緒く塗り立てた帳場に、晝餐後の居睡りをしてゐる、いい年配の爺さん呼び起こして尋ねると、老人は毛むくぢやらかな手でぼりぼり腕を掻きながら、酒臭い欠呻とともに、來訪者の誰であるかを訊き返へした。

まもなく、考人に連れられて、別室から出て來たのが、鳶色の眼のぎろりと飛び出た、見覚えのあるトム自身であつた。

はじめ、トムは、周吉を判別する記憶がすっかり消耗しつくして居つたやうに、ただ、差し出された手を、機械的に自分の細い指で觸れたに過ぎなかつたが、周吉が烏打を脱いで、二三度何かを云ふと、思ひあたつたらしく、握つた手に力を籠めてぎゅーツと握り返へすと、尖がりを帯びた聲で、

「おお、あのモノーン線でいつしよになつた、あツ、お前だつたのか、日本人の。よく忘れないでやつて来てくれたな。まあ、はいんなよ、と、云つたところで、むかうは取込んでゐるしな、——ぢや、ちよつと待つておくれ、すぐいつしよに外へ出るから。やあ、まつたく意外だな。よくこの俺を忘れないでくれたね。——」

と、心から嬉れしやうにこつきながら、表の控所めいた室へ姿を隠したと思ふと、すぐ出て來て、コムバスのやうな節張つた脚をぎくしやく曲げて、階段を先に立つて降りはじめた。

周吉は、その宿泊所に、何かしら「會場」と呼ばれる種類の會合場としての記標があるかと思つて見廻はしたが、入口の扉の上に「失業者同盟」と認めた紙の札のある外に、べつにそれらしいものとは見あたらなかつた。

「ペーテはどうしたね？」

表へ出ると、周吉は、その時分の記憶から、だしぬけにかう訊ねた。トムは、頭を振りながら、

「よつく覚えてゐる。——驚くな。ゐるよ。さうさう、あの列車には、ペーテの暗號があつたつけ。お前は、何でもミシガンの在から乗つたんだね、湖に飛び込んだとか云つて、すつかり濡れ鼠になつてさ。——それで、その後は、いつたい、どんなことをやつて麵麩とバターにありついでる、え？相變らずのぶらぶら病ひかね？」

と、ゆつたりあるきながら、周吉を振りかへり振りかへり尋ねた。

「君の仲間入りをしてね、すつかり男をあげたつもりさ。どうも、日本には、乞食を三日やると止められない、といふ諺があるが、まったく面白いものだね。世間の裏がすつかり見えてよ。」

「三日やつて止められねえ——なるほどね。こいつあ、素的だ。しかし、兄弟、俺たちは、こんなことを好きでやつてるんぢやないからな。早い話が、餘儀なくされてるといふ奴で、世間さまには、この餘儀なく組が屠殺場の豚みたいにごろごろしてるのさ。「道」を打つたかえ、その後？」

「それは何のことかね？」

「つまり、地方廻りをしたか、と云ふ語呂さ。」

「いや、べつに田舎の方へは出なかつた。サバードの空家や、普請中の漆喰臭い家へ泊つてさ、晝だけ公園や住宅区域を貰つてあるいただけだよ。」

「惜しいもんだな、お前みたいな機敏な若いもんをホーボーにして置くのは、好きでやりはじめたのかい？」

「好きも何もないさ、必要に迫られたんだね、その餘儀なく組の一人になつちまつたわけさ。空腹哲學だね、その方が、よつほど俺の懷疑主義よりは強かつたんだ。」

トムの身装は、あの當時よりも、彼の瘠ぎすな男振りをぐつと引げて見せたほど、相當垢づかぬ種類のものだつた。シャツと云ひ、靴と云ひ、總じて、着のみ着のままの浮浪生活に、揉み抜かれた周吉などとくらべて、遙かに都會人らしい、ひよつとすると、日傭取の労働者ぐらゐには踏めそうな服装だつた。そして、悠然と、人混みの街の中をあるいてゐる彼の態度には、さほど夕飯の心配をしてゐるやうにも見えす、取りなし顔に話しかける言葉にもどことなくゆとりがあがつて、好い物を食つてゐる人間らしい聲量の幅をもつてゐた。

「ははア、奴、當分この市にとどまつて活動するらしいな？」

周吉は、二人のあるいて行く道が、大通りを左へ切れて、だんだん裏町の、さびれた河岸ちかい方へ曲つてゐるのに気がついた途端、ふと立ちどまつて、ポケットから、さつき惣次郎に貰らつた葉巻を取り出してやつて見る気が起つた。

「どうだね、シガアーは？」

「シガア！？お、これは、これは。——景気がいいな。どうしてこんなもの……？」  
「貰つたのさ。俺は喫はないから。——それはさうと、」

周吉は、ちよつと聲を墜して、トムは白味の勝つた、ぎよろついた眼を意味ありげに見据えた。

「——どうだい、君、俺を君たちの仲間にして働かしてくれないか？」

トムは、腫の底にもう一つの腫が潜んでゐるやうな眼を、鸚鵡のやうにしばたいたが、見返へして、それをびつたり周吉の視線へ重ねると、不確定な表情を顔一面に漂はして、急に口を大きく開いて笑ひ出した。

「何を云つてるんだ。もう、とつくの昔から仲間になつてるんぢやねえか！」

周吉は、伸びあがるやうにして、葉巻を納めにかかつた彼の二の腕へ手を置いた。

「君たちが、I・W・Wなことぐらゐは、ちやんと感づいてゐるんだぜ！」

その言葉は、周吉が豫期したとほりの表情を、充分にトムの顔色に裏切つた。彼の鼻から上部の皮膚は、ちよつと血の氣を失ふやうに見えたとともに、狼狽した唇だけが、凝縮した顔筋

を押退けて、何かを云はうとして、二三度空しく開いたり閉ぢたりした。

「どうして知つてる？」

トムは歩行を繼續することに決定した。

「もと、そんなことを聞き嚙つたことがあるんだよ。君たちが、ストライキや騒動があると、全国から無賃乗車で来るんだといふことを。——それに、何だ、俺は、最近、つくづくかんがへたんだ、どうしても、俺たちが生きるなら、精神上的の遊戯をやつちやいかん、この現實の社會からもつともつと眞剣に生活の第一歩を踏み出す必要がある、それには、何よりも實行だつてさ。ヘーウッド事件以來、君たちは大分睨まれてゐるらしいが、俺には、あの微温るいS.P.などの應接間社會主義者や、市政改革主義には賛成出来ないんだ。實際の運動へ！實行の世界へそこで、俺はひよつくり、君たちがその同志であつたらしいことを思ひあてたのだ。君は、あのとき、いろ／＼なことを面白可笑しくしゃべつたらう、あの言葉のうちで、俺は必要な部分と不必要な部分とを、ちやんと分類して記憶してゐるんだ。記憶するとも、あれが、俺といふ人間が、この世で再生した刹那のことだもの。必要な部分はすくなかつたわけだね。ペーテの暗



號のことだけさ。あとは、君が體よく俺をごまかそうとした御芝居に過ぎなかつたらう。どうだ、まちがつてるかね？——しかし、君も、あの場合、満更、この俺を話せない男だとは思つてゐなかつたらしいね、何故といふと、「會場」だの、何のと、可なりそのへんの事情もそれとなく暗示してくれたほどだもの。』

トムは、緊張した笑ひを洩らしながら、何かの工場を取り潰したあとらしい、夥しい煉瓦の積み重ねられてある空地のコークスの上へ、大股にはいつて行つた。そこは、空地つづきに、巨大なシャベルで掘り取つたやうな窪地になつてゐて、壊れた壁や、雨曝れのした荷馬車や棒杭などの積んであるむかうには、何かの高い建築の反映を受けた、鐵漿のやうな運河が、煤煙の下をのたりのたりと波打つてゐた。陰氣な、溝泥の臭ひが、壁と壁とに遮断されて市街の騒々しさを追れた、息塞らしい沈黙のうちに漂よつてゐた。

『さうかい？ さうかい？——』

トムは、小さな頭をかすかにゆすぶりながら、かう口の中で繰返へして、どしんと煉瓦の層の横腹へ骨張ばつた背を凭れかけた。

『俺は、深山の日本人は知らないが、實は、熱烈な主義者と、二三人懇意にしてるんだ。一人はシャトルにゐる。もう二人は、コロラド州のデムバーにゐる。みな、俺たちの同志だよ。俺は、最初、君に會つたときから、君が好きだつたよ。あの態度が好きだつたよ。それに、多少なりと、その傾向のある人物は、無駄話をしてゐても、ちゃんと直感出来るもんでね。思想は思想を直感するよ。』

彼は、ぐんぐん前のコークスの土を蹴り立てながら、急にあらたまつて、すこしは學問のあつらしい調子になつた。

周吉は、何かを探がしあてた人間のやうに、急ぎ込んで對手と自分とを同じ立場に置かうとつとめた。

『俺は、いま、働きたくてしやうがないんだ。もう、じつとして、この一刻一刻腐つて行く人間の世界を傍觀してることが出来なくなつたんだ。何かする仕事がないかね？何でも、根かぎりやつて見る決心だ。君たちの仲間に、何かないかね？どうしたら、黨員になれるんだ？』

『俺たちの世界産業労働組合は、決して秘密結社ではない。俺たちはアナーキストとはちがふ

からな。堂々たる産業的な戦闘團體だよ。それで入黨手續と云つても、べつに宣誓式も何も必要ないわけさ。だが、入會費と階級意識をもつて申込みあ、それでいつでも入黨出来るのさ。正式に云へば、本部の綱領の第四ヶ條にあるとほり、十三部門のどれかに屬する職業を有つてゐる人間でないと、入黨は出来ないわけだがね。君には、何か特殊な技術とか職業とかいふものがあるかね？」

「さあ、ちよつと商賣もやつたし、それから家内労働もかなり長いことやつてるし、馬を馱した経験もある。百姓もやつたことも覚えてゐる、何でもちよつとは嚙つてるんだ。」

「そ、そんなら、そのうちの一つがいいや。馬を扱つたことがあつたなら、運輸業の部門へはいるといいしな、百姓が出来るなら園藝牧畜一般農業といふ部門もあるんだ。メンバーシップを貰ふとき、記入する用箋へ「失業中」なんて書いてはいかんよ。月給いくらいくらと記入して、ともかく徽章を一旦受取るんだ。それからあとで、失業したつて、そりまどうにもならんからね。——だが、ヤーマ、俺は忠告するがね、お前は、俺たちの同志になつたつて、それは何にも直接に組合のために働くといふことにはならないんだよ、役員でない限りはね。だから」

ら何よりも早く一定の職業をもつことが必要だよ。そして、その部門部門に應じて、いざ總同盟罷業といふときには、一般産業のタイ・アップをやらかすんだ。俺たちは、産業革命團體ではあるが、政治革命の方には冷淡なんだ。君がもし、政治的な行動をやらかそうなんて考へてI・W・Wへはいらうとするんなら、むしろ、デブスの大統領選挙をでも手傳つた方がよからう。」

かう嚙んで含めるやうに説明されて見ると、周吉は、獨りで自分だけの世界に冥想してゐた氣持が、實際の世の中の意外に散漫で、意外な方面に廣ろさと組織とをもち、意外な抵抗力をもつてゐるのに、漠然とした失望を感じないわけには行かなかつた。彼は、自分のここ數日を費やしてかんがへにかんがへ抜いたあまりの結論が、馬鹿げたほど架空でロマンティックで、あまりに獨斷的な幻覺を基礎として積みあげた、夢——熱の高い病夢に過ぎないやうな腹立たしい食ひちがひの存在を認めた。

「察するに、兄弟、君のかんがへたことは、すこし

だと思ふが、どうだい

?俺たちは、〇〇を高唱するよ、もちろん、微温的なトレード・ユニオンみたいな馬鹿げた安

協は俺たちの精神ではないんだ。しかし、主義のために働くとなれば、是非とも産業に従事する必要があるんだ。わかつたかね、

組合の綱領に、有職有給者に限るとしてあるのは、そこさ。つまり各人みな一兵卒となるんだ。」

「しかし、君たちの「失業者同盟」といふのは、ありあ、一體、何なのか？それに、君だつてべつに働かずに、ぶら／＼してゐるやうぢやないか？」

トムは、しばらく周吉の言葉には答へずに、泥を満載したタグ・ボートが、曳船に曳かれて天鷲絨のやうな水面に濃い襷を伸してどこかへ行過ぎるのを見送つてゐたが、振りかへつたときには、いままでの理窟ほい語調をさらりと捨てて、

「俺は、支部の仕事をしてるんだ。煽動者インテリゲンチヤといふかな、案外、これで工場主には怖わがられてる紳士だよ。かう見えても、お前は、アメリカを股にかけてる危険人物フリスコのトムと會見してるんだ。それから、あの失業者同盟、ありあ、看板さ。それも、俺たちの看板ぢやないんだ、あの宿屋の爺が、あんな道樂をちよい／＼やりたがるんだ。あれは、獨逸人でね。よく軍

事探偵だなんて云はれる奴だが、世間の奴らより俺の方が長くあいつを知つてるよ。罪のない革命狂だな。」

と、剽軽なもの云ひやうをして氣輕に笑つた。

「アイ・ダブリユウ・ダブリユウも存外つまらない組合だな！」

周吉は、すこしむつとして足元の煉瓦を蹴つた。

トムは、一人の短氣な日本人を、衷心から怒むやうな眼付をして、しづかに答へた。

「あるひは、さうかも知れない……兄弟。だが、君が、俺たちの組合に失望するなら、それは、自分の實社會の知識の缺乏を告白してることと同様だ。俺たちの「宣言」にはかう云つてあるんだ。「資本階級と労働階級との間には、如何なる既成政黨との提携をもせずして、すべての労働階級が一つの經濟的組織を通じて、政治的並びに産業的に團結し、自分たちの労働によつて生産する生産品を

階級闘争は繼續される。」いいかね、これは何を意味するか。十日や二十日の仕事ぢやないんだぜ、一人や二人の暗殺でもないんだぜ。資本制度が發達しはじめてからの、長い傳統と史實とに、

君の云ふやう

に、やすくと二日ぐらゐで世の中が變革出来たら、何も俺たちがプロバガンダをして、血の出るやうな喉を潤らしてまで、アメリカン・フェドレーション・オフ・レエビアと組合員の奪ひ合ひツコをする必要もないんだ。俺たちの兄弟が獨探だなんて云はれて、炭坑や工場を守る軍人に撃ち殺るされる必要もないんだ。ところがね、氣速な日本人君、資本主義の城壁は悪魔のやうに固いんだよ。そして、奴らはいろ／＼な便宜をもつてゐる。権力、富、政治、法律軍隊、新聞、教會——それに、世界の人口の半分ほどの馬鹿者、群集まで！俺たちは、比較的に少数だ。だが、俺たちは根強い少数だよ。永遠に武装してゐる少数だよ。テロリストのやうに、一時はつと華を咲かせる少数ぢやないんだ。持久戦、完全なる〇〇までの持久戦に堪へる少数だ。そして、いつでも機運が熟すれば、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇するに躊躇しない〇〇〇〇少数なんだ。それが、俺たちの組合さ！」

語つてゐるうちに、日頃の假面を脱ぎ捨てたトムは、何かの犯すべからざる威力が溢れて來た。それは、悲しいやうな、陶醉してゐるやうな、自分の主義に忠實なもののみのもつ、無限の見えざる抵抗を前にして驀進する靈の勇氣の閃めきであつた。周吉は、ここまで來

て、はじめてトーマス・エツチ・リヒターなる人間の真相に觸れたやうな氣がした。彼は慟哭したいやうな氣持を抑へて、沈思した。

「俺は、やはり、獨りで偉らがつてゐたんたな……もつと突貫するんだ。もつともつと、暴風雨の荒狂つた世の中へ！」

「——だが、俺たちはそんなことだけで満足してゐるんぢやないからな。」

トムは、すっかり廻つてしまつた西日を、眩しそうに瞻あげた、と思ふと、うつすら暮色の閉ざしかけた街通りの方へ、落着きのない視線を配つて睥いた。

「ちよツ、見ろ、この頃は、ポリの奴、俺たちをしよつちう睨んでやがるんだ。お前なんども、へまをやると無斷で抑留されるぜ。あの宿屋も狙はれてはゐるが、何しろ營業だからな、あそこなら大丈夫。おい、今夜は泊つて行くがいいや。氣のいい爺だ。俺がよく取ついでやるわ。いつしよに十仙めしでも食ひに行かうか。そりあさうと、あんまり人混みで議論をしつこなしだ。Espionageの緊急法令でどし／＼仲間ああげられてるんだからな。ペーテの奴にもあとで紹介してやる。」

高橋清は、ひどく抽象的な眼付をして、下宿へ歸へつて来た。

表の扉口への、四つの人造石の段々を、彼は鉛の靴をでも穿いたやうにして、やつとのこと登りきると、何を觸つても感觸のない指先で、柱のわきの郵便受函を、日頃の習慣から無意識に搔き廻はして見た。

「なあ——んだ。ちょッー」

彼は、べつに自分の部屋へ戻ることには、さほどの興味をも感じない獨身ものの下宿人らしく、指に觸れた一葉の端書へ、まだ街の上に漂つてゐる白つほい餘映を受けて、表書きを見るとかう呟いて、更らに裏の方へ眼をとほした。彼は、その端書に、何が書いてあるかを判断するまで、二度繰返へして讀まなければならなかつた。それは、必らずしも、街のうすら明りが、きちようめんな細字で認めてある、裏面の日本字の判讀を困難ならしめたがためではな

50

端書は、インディアナ州ローガンから差出されたもので、差出人は、葉山陽吉としてあつた。

「帶留中は、御忙しいところを、種々御厄介になりました。小生、あれから、紐育地方へ旅び立たうと思つたところ、偶然の機會で、表記の場所の鋼鐵工場のストライキを視察する氣になつて、豫定變更の上、昨日着しました。罷業状態は、さすが大規模ですが、スキヤブの多いのにも一驚を喫しました。いづれ近いうちに、何か面白い事件が突發しそうな不穩な空氣が漂つてゐるから、それまで蟄伏してゐる心算です。貴兄の御健闘を祈る。」

文句はこれだけであつた。

「貴兄の御健闘を祈る——か」

清は、唇の上だけの微笑を洩らして、端書を二つに裂き、四つに裂き、こなごなにちぎつて、段々のわきの塵埃捨鏝をめがけて投げ込んだ。紙片は、ただ力ない手元からばらばらと彼の足元へ散らばつただけであつた。

彼は、さつきよりも重い足取りで、二階三階と、蒸暑い階子段を登つた。

クララは、うす暗らい瓦斯燈の下で、食卓を準備してゐた。べつに料理の方へ瓦斯を使ふの

で、燈の方は倍暗らくなるのだつた。

「ハロー、キョーシ！」

しかし、今夜に限つて、彼女の唇の觸が何等の愛情を喚び起こさないばかりか、かへつて、そのちよつとした挨拶の抱擁から、自分の體を自由にするために、無限の鏝るけるやうな努力が必要であつたのを感じた。

「貴方、お病氣？」

クララは、一步退つて、眼を睜つた。狭い貸部屋である。女の身動きも、いつの間にか小刻みになつてゐる。

「ノオ！——イエス！」

清は、この頃癖になつた煙草を、氣だるい手付で唇へ運んで行つて、椅子の上へどさりと體を投げた。

「まあ、どうしたの？何かあつたの！——」

「いや、何でも無い。——すこし疲れてるんだ。」

かういふ場合に、借りものの英語を使ふことは、やたらに小うるさい、不自然な、芝居じみた精力の濫費であることに、清は豫期せぬ腹立たしさを感じた。實際、彼は、何を見ても急にむら／＼と怒りたくなつてゐる現在の自分を、さつきからあましましきつて居つたのだ。それは、わけもない、皮膚の表面だけの、反射的な怒でもあるやうだつたし、また、何かしら悲痛な心を藏した怒であるやうにもとれた。まづい煙草を半分で捨てて、彼は、よろけるやうに立ちあがつて、隅のベッドへ、頭から先に突伏した。

クララは、すこし涙ぐみながら、瓦斯火の上のステンウ鍋をぼんやり匙で掻き廻はした。パアセリーの芳香を浮かべた肉の香が、窓からはいる黄昏の空氣と、入れちがひになつて逃げて行くのが、横はつてゐる清にも感ぜられたが、彼はそれによつていつものやうに食慾をそそられてはゐなかつた。寝轉るんだと思ふと、彼はふたたび立ちあがつた。そして、ベッドを中心として、何かを探がすやうな眼付でそのへんを見廻はしたのち、無言で窓際へあるいて行つた。窓際にもゐられなくなると、彼は、またベッドへあゆみ寄つて、挫れるやうにその上へ横はつた。と、忽ち、體中がむづ痒くてならぬやうに、身悶えして、こんどは、半身を敷布の

上へ擦げた。

「——クララ、僕が失業したら、お前どうするね？」

彼の聲は、自制した冷靜さの底に、どこかしら抑揚の狂ひが潜んでゐた。

彼女は、上半身をしづかに捻つて、しばらく彼の顔を熱視して居つたが、わりにきつぱりした語調で答へた。

「わたし、働くわ。」

清は宙の一點を凝視しながら、單調な聲で云つた。

「悪くすると、竹村の店は、明日からやめなけりやならないかも知れない。」

クララはしづかに彼に近づいて、兩腕を肩へしつかと巻きつけた。

「どう、なすつたの、さ？——」

清は、擦ぐつたような顔を外向けて、

「なに、俺は疲れてるんだ。それに、もう飽きたよ——飽きたよ。すべてに飽きたんだよ。」と嘆息した。

「困つたわね、……そりあ、おやめになるなら、おやめになつたつて、わたしは謝はないけれど。……貴方、どうかなすつたの？あの、竹村さんでも、何かあつたんですか？話して下さい。ね、わたしにも聴かして下さい。」

彼は、女にがたがた揺ぶられながらも、べつに抵抗する様子もなく、何も見えないやうな眼を睜いたと思ふと瞑つたり、瞑つたと思ふと、またほつかり睜いた。

「なに、お前の聴くほどのことぢやない。」

氣のそぐはない、晚餐を済まして、二人は、いら／＼しながら、めい／＼の場所にちちんと固くなつて座つて時を過ごした。

高橋清が、その晩つくづく自分の惨めさを感じた理由は、充分にあつた。最も手近い理由の一つは、その夕方、彼はちよつとしたはづみで、竹村に集金の實否を糺だされたことだつた。

その日の午後に顧客の一人が店へやつて来て、賣子のメリーから、品物を買つて行つて、次の配達までに拂ふから帳面へ記入して置くやうに頼んだので、その名前を配達帳から探がし出すと、意外にもその客には四弗某かの未決済の代金が記入してあつた。メリーは、それとなくそ

の由を仄めかして、帳面は帳面、店は店と、べつに拂つて貰ふやうに頼むと、客の婦人は敢然として、そんなことを云ふならもう取引しなくともいいと云ひ放つた。それを側で聞いてゐた短氣な竹村が、すすんで喧嘩を買つて出て、帳面を客の前へ擲きつけた。その婦人は、はじめは何のことかよくわからなかつたらしいが様子を聞いて見ると、自分の名の下に途方もない金額が未決済の分として記入してある事實を知ると、顔色を變へて、誣告である詐偽だと息巻いて、しまひに、配達人を告訴すると怒鳴り散らして、品物をメリーの前へ擲き捨てたまま店を出て行つた。恥を搔いたのは、結局、店の二人であつた。清の歸へるのを待ちあぐむだ竹村が彼が店頭へ馬をとめるや否や、その眞偽を問詰めるのであつた。清は、はつと思ひながらも、極めて冷靜な顔を粧ふて、その帳面を點檢した。だが彼はその際執るべきたつた一つの途は、正直にその事實を告白するほかはないことを知つた。さうすることについて、彼は有利な動機のあるのを知つてゐた。それは必ず、案外卒直な竹村を動かす得るほどの、愷然たる動機であることも、彼は知つてゐた。その場で彼は涙を流しながら、クララと自分のその後の關係を逐一告白して、主人の寛恕を乞ふた。

「どうも困つた、ああいふことのふたたびないやうにせんとね、まったく僕は赤恥を搔かんならんからな。まさか、告訴などはやるまいが、女も非道い權幕だつたぜ。大體、あの客は、僕が取つた客だが、最初からどうも面つきのいけ好かん奴ではあつたよ。まあ、今日はいいやそのために、僕は全然帳面は君に一任しとくんだからね、堅く今後はそんなことのないやうに！」

竹村は、その場はさう云つて、忘れてくれた。しかし、清には、竹村のやうに正直な人間が一度欺かれたと自覺したなら、それを容易に忘れ得られるものかどうかを疑つた。自分が店から退けて、竹村獨りだけになつたとき、放膽なやうに見えても細かく眼の届く彼が、どうしてほかの帳面を檢査しないことがあらう？　そして、その結果、翌日にも目ぼしい負債者をいち／＼訪問してあるいて、その實否をたしかめでもしたなら……清はそれを想像すると、まつ昏な孔が、すぐ足元に開いたやうな戦慄を感じた。よし、今晚のままで萬事が知られずに濟んだとしても、早晚、それは發覺する性質の秘密であつた。それまでに、かれこれ百弗近くの現金を調達して、帳面を綺麗にして置かないと、結果は知れきつてゐるほど明白だつた。百弗の



金！　いまの彼にとつて、百弗がたとへ十弗だつて、容易く融通出来るものではなかつた。金の問題は、金だけの問題にとどまらなかつた。そこに、貨幣を通じての、微細な、無限の浸潤力をもつた對人對社會の關係が湧いてゐた。氣拙い發覺は、決して竹村と自分だけの關係に終らなかつた。それは王水のやうに、觸れるものをすべて溶かした。

清は、百弗の金を海へ得る、あらゆる手段を想像して見た。——實際、それは、何でもないことにちがひない。一弗紙幣が、一枚、二枚、三枚……と、ほんの百枚揃へば濟む話だつた。そればかりの金額は、クララの父親の貯金帳からもやすやすと取出されるにちひなかつた。ある種類の誘拐者のやうに、若いみづみづしいクララを、どこかへ連れて行つて賣り飛ばせば百が三百弗にもなつた。どこか、富豪の勝手口から忍び込んで、ちよつとした寶石の一つでも掠め取れば、容易に猶太人の店では百弗ぐらゐは、顔を見なくとも貸した。銀行……酒屋……めぼしい煙草屋……盛り場のレストラン……店ガラス一枚毀せば掴み取り出来る寶玉店……どんな店でも大通りの夜開けてゐる店ならば登録器にそれぐらゐは剩錢として残してゐる。賣る、借りる、盗む、掠める、奪ひ取る、脅迫する……これらは、偶然を除いた、もつとも着實

な百弗の收得法であつた。その一つをどうして選べないのか？　彼は、自分の體が五六ヶ月そのために誰かに強制労働をさせられた場合を想像した。密室に於てクララが禿頭の老人にある種の行爲を強求されてゐる場面を想像した。土を掘つて掘り抜いて銀行の金庫室へやうやく自分の手が伸びた刹那を想像した。芝居で使ふ偽札をうまく番頭に掴ませた光景を想像した。支那料理屋の支那人を拳銃で脅かして金錢登録器から有つたけの銀貨紙幣をポケットへ開けて出る覆面の自分の姿を想像した。それから、最後に、竹村の勝手慣れた店へ、裏口の扉を外づしてはいつて行つて、金を浚つた上に火を掛けて、六冊の帳面を火中に擲き込んで、翌日はそ知らぬ顔で出勤して見る、そのときの皮肉な情景もありと頭に描いて見た。しかし、すべての幻覺の追跡を終つて、ほつかり眼を開いて見ると、それらのどの一齣と雖も、實現し得る筈のものでないことに驚かされた。

「潔く一切を告げて、明日からやめるさ——それが一番手つ取早い解決だ。」

どうかんがへて見ても、それ以上に彼の現在としては、このチレムマを道れる方法はなかつた。解雇、失業、貧乏、絶望、求職、飢餓……

「誰のために？——」

清は、煙草の煙のむかうに、平気でエレン・ケーを讀んでゐるクララの横顔を睨んで、燃えつくした苦惱の奥から、衝動的に勃發する瞋恚の炎を、女の小伶俐そうな頭に、糞落着きに落着いた眼に、冷靜な唇に、白い胸に、腕に體中に、ぢり／＼と焦げつくすまで浴びせかけて見たいやうな氣持に驅られた。

「誰のためにか！ みんなお前といふ人間が、俺に附纏つてゐるためぢやないか！——お前は何か？ 何の權利があつて、俺の一生へ突然舞ひ込んで來て、肉塊の誘惑を楯に、とう／＼こんな破滅に俺を導いたのか？——」

彼は立ちあがつた。突然、何か強烈な酒をでも飲んで一切を忘れてしまひたいやうな要求を感じた。それと同時に、異常な陳事が出態して、世の中がひつくりかへるやうな、火事でも、地震でも、洪水でも、革命でも、何でもいいから、百弗の埋め合せになるやうな大事件が起こつてくれればいい、起らないとも限るまい、あるひは起こるだらう——といふぼんやりした不可能事に對する、馬鹿馬鹿しい心願も胸を衝いて湧いた。

奇蹟！

もちろん、そんなものの起こる筈はなかつた。

夜はだん／＼更けて行つた。そして、眠むそりに欠伸したクララは、本を閉ぢると、

「おや、まだ、貴方かんがへてらつしやるの？——もう、いいぢやないの！ 大丈夫よ、わたしが働くから。第一、貴方の週給は、ひどく安いと思ふわ。わたしなら、同じ働くにしても、もつともつと御金を取るわよ。もう寝ませうよ、わたし眠くなつちやつた。」

と、いつもとさほど變つた様子もなく、面憎いほど冷淡に云つて退けて、ベッドへ腰掛けるや否や、片方の編上げのレースをほどいて、ほんと床の上へ投つた。

「眠むいなら、お前先に御就寝み、俺はまだかんがへることがあるんだから——。」

彼は、もう一度窓際に立つて、冷いやりした夜氣を吸ひながら、無愛想に云つた。

「ぢや、グツドナイト、キヨシー！」

「グツドナイト！」

間もなく、彼女のかすかな躰が、室の一隅から聞えた。

「どうしてかう俺は臆病なんだらう！」

星空の下に、黒く塊り合つてゐる家屋の上に彼はかう獨語した。

そして、すべての弱者のやうに、僥倖を夢想することによつて、わづかに自分の無能を慰めやうとする本能から、自然と自分の想像力が、その都市線に一大爆破が起こつて、人間が木の葉のやうに飛散し、いままで治安法と武力とによつて貯藏されたあらゆる貴重品が街路へ曝け出され、金銀貨幣の価値は紙屑同然になり、婦女子の貞操は完全に蹂躪され、労働も苦役もない、破壊、破壊、破壊——ただ破壊のための破壊を逞しふした、戦場の如く凄惨な、悪魔的な人の世のすべての価値の轉換が、どんなか『革命』の名によつても、すぐさま現實されそうな、安易な幻覺を、紅らむだ眼先に呼び起こしたのであつた。

彼は、女を捨てて、どこかへ逃げやうかとも思つて見た。

## 五

蒸し暑い、温室のやうに重苦しい朝がまた明けた。

いつも清が起床する時刻を定めて掛けて置く目ざましが、うすつべらなニツケルの鈴を、けたたましく鳴らすのに眼をさましたクララは、今朝に限つて、自分の側に清の眠つてゐないのに気がついて、急いで起きあがつた。

部屋のうちには、べつに取亂してはなかつたが、ただ卓の上、夥しい煙草の吸殻が散らばつてあつた。清がベッドへ寝なかつたことは明かだつた。

「もう行つちまつたのかしら？」

彼女は、彼の帽子も上衣もないので、かう獨りで定めてしまつて、あはてて身仕度を整へながら、昨夜のことをそれからそれへと懐ひ出した。時間は、いつもより早い頃だつた。

「何かあつたにちがひない。——どうしたんだらう？」

ぼんやりした疑問が、彼の素振りから、口吻から、一と晩眠らずにかんがへ込んでゐたらしい痕跡から、彼女の頭に宿つて來た。内々彼女には一般に日本人の特性らしい、秘密主義がすとし氣に障りかけて居つた。手早く朝食の準備をして、一人ほつちの珈琲をすますと、兼ねて清から聞かされてゐる竹村の店へ、ともかく一應どんなことがあつたのか、どうして彼が無斷

で解雇されなければならなかつたかを突留めに行かうと決心した。

しかし、よく昨晚の彼の口裏から察して見ると、清はもう昨日で解雇されてしまつて、その朝は早くから口入屋をでも漁つてゐるらしくも思はれた

『わたし、働くわ。』

ときつぱり云つた自分の昨晚の言葉を懐ひ出された。

彼女は迷つた。愁ひ竹村の店へ飛び込んで、先方に氣拙に思ひをさしても妙なものだといふ氣もした。それよりは、いつそのこと、自分で職業を見つけて、その日からでも働いて、彼の失職中はかす／＼ながらも、二人の糊口の道を講じて置いた方が、得策であるやうにも思はれた。竹村といふ人間が、清に聞かされてゐたとほりの男であれば、會つて見ても、かへつて面白くない結果になりはしまいか。非職軍人で、社會主義反對の、短氣な日本人——これだけでも、彼女には、あまりすすんで會つて見やうといふ氣にはなれなかつた。

『さうだ、やはり、仕事を見つけた方がいいわ。』

かう決心して、クララは、表へ出て、大道りの煙草屋の前にある、新聞臺から廣告のいちば

ん多い『モーニング・ニュース』を買つて、すこし隔だつた、電車の停留所の人溜りの中に雑沓、『Stereographer wanted』の欄へ、上からすうつと眼をとほした。これは全く新しい經驗だつた。いままで職業といふものを、自分からすすむで求めたことのない彼女には、簡略に條件を書き込んだ、求人廣告に、いちいち自分といふものを打込んで、その場所柄や、事務所の光景や、傭主の人相などを想像して、しかも、忙しい朝の人混みの中で、出来るだけ求職者でないやうな風を装ふて、素速く一行一行へ眼をとほすといふことは、いままで夢想だもしたことのない氣持であつた。

『わたしはもつと勇敢でなけりや駄目だ。』

そつと眼をあげて、帽子の縁から、そのへんの人間を覗ふと、來た電車をめがけて、浮足になつて先を争ふ男や女は、大概定職をもつた、勤人らしく見えた。幾臺電車が來ても、どんな新陳代謝して行く乗客のうちで、やはり新聞を何氣なく立読みしてゐるらしい風に見せて、熱心はその廣告欄を漁つてゐる同じ類は、自分のやうに、その朝職業を求めに出る人間としか見えなかつた。四人ほどそんな顔がいつまでも電車をとるのを躊躇しながら、彼女とともに立

いでゐた。

『五人のうち、誰が早く職業を見つけるかしら？』

自然と、そんな小兒らしい興味も湧いて來るのであつた。彼等は、みな婦人であつて、しかも彼女同様タイピスト志願らしいことも、充分に彼女のいままでに経験したことのない競争心をそそののであつた。一人は、もう中年頃の、こつてりと化粧した、肥つた女で、永い失職に挫れたやうな、襪の亂れたドレスを、しだらなく引張つてゐた。よそ行らしい靴の踵も、削り去つたやうに減つてゐた。腋香臭さい、近づくともつと體温の臭を感じそうな婦だつた。ほかの二人は、姉妹らしく、しじゆうくちやくちや話し合ひながら、廣告欄を指しては、遠慮のない聲で笑つてゐた。姉らしいのは、タイピストとしては心持はづむだ服装をして、かなり事務所を渡り慣れたやうなところのある、ちよつと男摺れのした娘のやうに見えた。妹の方は、まだ初心な、どことなく女學校を出たばかりの、はじめて就職口を探がし出そうとする娘らしく、同じく笑ひ興じながらも、姉嬢のやうに高慢ちきなところがなかつた。もう一人は、典型的な女事務員らしい、どこまでも垢抜けがして、しやつきりした派手過ぎぬほどの着物を、裾短か

に着て、小形な帽子をちよつと斜にかぶつた、敏捷な、小氣の利いた、どの重役でも二つ返事で、秘書役に採用しそうな廿歳代の若い女であつた。クララは、妙なその場限りの張り合ひから、この最後の女に負けてはならない、といふやうな氣を起こして、オペラ・バツクの裏についてゐる小鏡に、そつと自分の顔を映して見て、後れ毛をすこし撫であげながら、彼女と同じ電車へ、わざと一足後れてあとから乗り込んだ。

べつにこれぞといふ廣告も見當らなかつたので、一と先づ大きい廣告を出してゐる、下町の周旋屋へ行つて見やうと決心した。

電車はまだ混んでゐた。窓の際へ掴まつて、それとなく未知の競争者の姿恰好を偷見してゐると、先方でもそれと氣づいたらしく、大勢の男たちがやがや話し合つてゐる中から、鳶色のぼつちりした瞳をクララの方へ向けて、同じくこちの様子を探ぐつてゐるらしく思はれた。

電車は、騒然とした乗客の群を載せて、熱で膨脹したやうな、街の中を喘ぎ喘ぎ走つた。

クララは、だんだん窓の眞鎮の枠が、彼女の腕へ喰ひ込むほど次第に増える乗客に押こくられてしまつた。彼女は勢ひ窓の方だけ向いてゐなければならなかつた。彼女とびつたり體を合

はして、顔を覗き込むやうにしてゐる中年の、がつしりした、商人體の男があつた。背後からクララが押されると、その男は、苦るしそくに太い息を吐きながら、太つた腹で彼女を押しかへした。

て、何か唸きながら、彼が息を吸つたり出したりすることに、彼の腹腔内にはいつた空氣が、どんな風にしてふたたび外へ吐き出されるかさへ手にとるやうに、

直感

させた。電車が、急にカーヴをして、街を一つ曲がつた拍子に、乗客のすべては、一樣に同じ方向へ難ぎ倒されでもするかのやうに、はづみを食つてよろめいた。その途端に、クララの前の男は、わざと大業によろめいて、しつかとクララの二の腕を捉へた。捉へられた腕は、心持彼の指先によつて、擦ぐられるやうに揺ぶられた。

「お免なさい、お嬢さん。どうも非道いカーヴですな！」

男は、眼尻に三角形な小皺を寄せながら、腕から手を離して、クララに云ひかけた。彼女は嫌な顔をして、わざと知らぬ振りをして、横を向いた。

その途端に、クララは、ふと、清が、古ぼけた馬車の上へ掛けて、鞭をあげながら、サイドウォークを走つてゐるのを、窓から一間ばかりむかうに認めた。はつと思つた彼女は、猥褻がかつた前の男の抱擁から、渾身の力を絞つて脱け出して、びつたり窓と平行に體を向けると、

「HO—O—」

と、電車の外へ聲を掛かけた。

清は、堅く結んだ齒と齒との間から、舌を鳴らすやうにして、斑らな栗色の馬に、しきりに掛聲をしながら、自分呼び掛ける聲には、一向氣がつかずに、だんだん背後の方へ落込むやうに、隔たつて行つた。

前の男は、クララの聲を聞いて、自分も小首を傾げて、女の視線の向ふ方に眼を遣つたが、そこに黄ろい色をした顔立の、シャツだけになつた馱者を發見して、ふしぎそくに、彼女の横顔をじつと覗めた。

クララは、清が失職せず、働いてゐるのを見出して、すつかり自分の計畫に狂ひが生じたやうに思つた。ちや、やはり何等かの妥協があつて、竹村のところへ働いてゐることになつた

のか、と思ふと、すこし自分が早やまつた行爲をしてゐるやうで、氣が咎めたものの、かんがへなほして見ると、やはり、自分は自分だけの獨立した生計の道を講じて、あまり氣の小さい彼を煩はしたくないやうにも思はれた。

そのまま、周旋所へ行かうと、クララは初一念のどほりに、あらためて決心した。

暑さと、他數の肉體の露骨な接觸とで、ほとんど卒倒しそうに感ぜられた頃、彼女は、自分の行くべき町へ電車が停まつたのを知つた。

『降りますよ。——降りして下さいよ。』

かう疍高に呼びかけて、やうやく車掌臺の扉を、足元のペダルを踏んで、車掌が閉ぢやうとするところへ駆けつけて、外へ出して貰つて、ほつとした。見ると、自分の一張羅も、すつかり汗つほい皺になつて、まるで暴風雨の中を駆け抜けたあとのやうに見えた。恐ろしい電車であつた。彼女は、あはやつて、毎朝、大勢の男たちの肉の間に挟まつて事務所通ひをする、多數の若い女たちのことをかんがへて、何とも云へぬ戦慄を覺えた。自分の前にゐた、肥つた中年の男の、いやに絡らむだお詫を、彼女は憶ひ出した。もし、彼の言葉にちよつとでも返答し

たなら、——クララは憶ひ出すだけでも、まだ自分のコルセットの上に、體全體に、

氣味悪さを感じた。

何かの反應を彼女に挑んでゐるやうな

周旋所には、もう七八人の女がつかめてゐた。

灰色になつた髪を、びつたり後へ撫でつけて、ボストン女めいた年寄つた婦が、明るい部屋のまん中の、大きいマホガニーの卓で、忙しそうに卓上電話で早口の挨拶をしてゐた。七八人の求職者は、室の周圍に列べられた椅子へ、それぞれ離れ離れに掛けて、不安な眼付で、婦主人の電話の應答の表振りを賸めたり、新しくやつて来る求職者を、嫉妬深い眼でじろじろ靴の爪先まで吟味したりしてゐた。

クララのあとから、ひよつくり、同じ電車をとつた、さいぜんの女があがつて來た。

『おや、貴方も？』

かういふ表情が、知らず知らずのうちに、二人の眼の中に浮かんでゐた。

『あの、タイピストの口がありませんか？——べつに紹介狀がなくとも備つて戴けるでせう

か？」

クララは、卓へすすみよりながら、低聲で婦主人に訊ねた。

まだ切つてない電話から、彼女は何かを聞き取りながら、眼の前のタブレットへ小忙しく鉛筆を走らせてゐる眼を、じろりと上へ轉じて、ちよつと鉛筆を捨てた手で、受話機へ蓋をす

ると、  
「はい、ありますよ。その用箋へ御名前と経験その他を書き込んで、待つてゐて下さい。希望の月給とね。——」

と、早口に云ふと、蓋をした手を退けて、

「……四十、四十ですね？……九時から五時まで……三人ですか？……三人で？……オール・ライト・サア。さよなら！」

と、また鉛筆で走り書きして、びりりとタブレットを一葉剝いだ。

「あの、ミス・カムミングとやら、それから、え——と。ミス・デニスに、そちらのグラハムさん、三人ですが、貴女がた、揃つて行つて御覧になりませんか？——これが番地です。ミス

ター・ホイリアと仰しやれば、わかるんです。会社はここに書いてある、ジューズ・スタウト会社。四十弗九時から五時まで、重にインヴォイスの方の用件だそうです。綿糸類の問屋ですわかつて？　ぢや、いつしよに行つてごらん下さい。これは、ミス・カムミングへ御渡します料金は、就職後三日間内に戴きにあげります。」

灰色な眼を、素速くそこへ立つて行つた三人の女たちの上に走らせた、婦主人は、背後のもう一つの卓から、若いタイピストがもつて來た、三人の女たちの申込書の寫しへ、ガラス製の文鎮を置いた。

三人の女たちが一と塊りになつて、出て行かうとすると、また電話の鈴が、じじじ——と鳴つた。

「ハロー、ハロー、——」

婦主人は、返事しながら、又、受話機へ手をあてがつて、

「あの——ミス・カムミング、駄目だったら、折返へし電話で知らせて下さるとも、返へつて御出でなさるとも、どちらかして下さいよ！」



と、扉口へ向つて、訝えた聲で云つた。

一人一人、女たちは、順番に減つて行つた。しかし、先着者がゐなくなると思ふと、またあとから順々に新しい女がはいつて來た。なかには、まるで、いかがはしい女でもあるかのやうに、こつてりと厚化粧をした、娼婦型の女もあつた。

クララの番が來て、渡された紙片には、

「ブルツクス兄弟會社。鐵仲買商。エクエノツクス・ビルデング、三百三十番。」

と書いてあつて、月給は五十弗、九時から八時間、土曜半日、といふ條件だつた。

彼女の出て行くのを、同じ電車へ乗つて來た女が、ちらりと羨望めいた眼で見送つたのをクララは氣づいた。

## 六

ブルツクス兄弟會社は、クララの豫想に反して、小ぢんまりした、整つた事務所であつた。とつつかの部屋に待たせられてゐると、英國の軍人らしい、軍帽を被つた、乗馬用の鞭をス

テツキ代りに、伊達にぶら下げた、どことなく全身に革の匂ひのするやうな、背丈の高い男が非常に肥満した、若々しい顔の男に伴はれて、彼女の前をとほつて、扉口から出て行つた。次室からは、しきりにタイプライタアの音がした。

若い顔立の男は、奥の部屋へ歸へる前に、じろりと流瞥にクララの顔を見て、指をほきんぼきんと鳴らしながら間のガラス戸から消え去つた。

間もなく、クララが訪づれたとき、そこへ待つてゐるやうにと注意した、十二ぐらゐの、惡戯子憎らしいオフィス・ボーイがやつて來て、

「ミス・コリンズ！——どうぞ、こちらへ御とほり下さい！」

と、にたにた笑ひながら、ガラス戸を隻手で開いたまま抑へた。

彼女がその前をとほると、ボーイは、

「奥のブルツクス氏の部屋です！」

と注意した。

次の部屋には、さつきの肥満した男と、三四人のタイピストとが、めいめい卓へむかつて、

餘念なく事務を執つてゐた。つきあたりの「Private」と書いてあるガラス扉を、軽ろくノツクすると、

「おはいり。」

といふ太い男の聲がして、扉を開くと、むつとした葉巻の匂ひが、彼女を煽り立てた。磨き立てられた、樺色の卓の前に、きつと鋭い眼をあげて、おづおづはいつて来たクララを一眼見た、四十がらみの、大きい男が、ブルツクス兄弟の兄分らしく思はれた。さつき見た肥満した方の男と、前額から鼻へかけてその男はよく似てゐた。

彼は、鋭い眼をクララから、閉めきられた扉へ轉すると、口の隅へ啣へてゐた葉巻を、舌先で反対の方へ動かしながら、

「お掛けなさい。」

と云つて、自分のわきの革椅子へ、大きいダイヤモンドのひかつた手を差し出した。

はいつた瞬間から、クララは、何とも云はれぬ反感と威壓とを感じてゐた。

「コリンズさんですか？——あまり経験がお有りにならん？ 速記は？」

「まだ習ひ立てですが、出来るには出来ます。」

「仕事は、かういふ種類の事務所ですから、かなり急がしいこともありますよ。ですが、私のところの主義として、能率本位で、いくらでも月給はあげることにしてゐますから、その點は満足でせう。どうです、働いてごらんになりますか？——」

「え、今日からでも。」

「ぢや、ちよつと、速記の方をやつて見て戴きたい。」

かう云つて、彼は、卓の下に藏してゐる釦を押して、もう一度、じろりとクラララの顔を見た。

ボーイがあはてて飛んで来た。

「サム、お前、タイプレットと鉛筆ともつて来い！」

底力のある、滑かな凜とした聲だつた。

ボーイがふたたびあらはれると、彼は威かつい顔に、不似合なほどの愛嬌笑ひを浮べて、クララの掛けてゐる場所から、やうやく手の伸びるほどの距離にある、卓の下の書取臺を、引き

出した。

「もつと、こちらへ。」

彼は、その上へ、「ブルックス兄弟商會」と青く刷つてある書簡用箋と、鉛筆を載せて、ダイヤモンドの指輪をちらりと閃かしながら、一輯した。

ほとんど、彼の吐く、葉巻臭い息が、彼女の頬にむかりと感ぜられるほど近く椅子を引寄せられたクララは、反射的にきつと彼の顔を睨めあげて、

「速記で御座いますか？」

と、わざと「速記」へ力を入れて尋ねた。

彼は、女のスカートに觸れそうになつた自分の足を、急いで引込めて、廻轉椅子の背革へ、半身を外り身に凭れかけると、

「え、そして、かなり艶つほいところを！」

と、剃り立ての頬に、笑靨を見せて笑つた。

「え——と、親愛なるミスよ、折角御出で下すつたのですから、私も忙しい體ですが、貴女の

訪問に對しましても、私としては、是非とも私の微意のあるところを御目にかけて度う存じます  
ついでには、これから、ホテル・アンソニアに御参内して、ゆつくり御晝餐などを差し上げま  
した上、幸ひ今日のマテネーにロバート・ブロンソンとやらがかけかかりますさうですから、購入  
して置きました席へ御同伴の榮を得ば私の悦びはこの上も御座いません。それから私も久し振  
りでこの暑中を一日事務所を脱けるのですから、思ひきり派手に遊びたいと思ひますので、あ  
の例のキバレ・ド・パリへ御同伴を願ひまして、しめやかな密室にて、貴女の玉のやうな掌に御  
掬み遊ばした三鞭酒を、この熱き唇にて貪るやうに飲まして戴けば結構です。なほ密室には、  
兼ねて御存知のとほり、二人の快よき醉をさますには最も輕便なる寢室も設けあり、ことに、  
少うるさき給仕などの用もなきにあらはれ來るが如きことは絶対に御座いません故、御心置き  
なく、貴女の尊き戀の秘めごとを私語かれ、かつは私の燃ゆる心を熱き唇にて——」

クララは、鉛筆を捨てて、立ちあがつた。彼女の頬は、蒼白から急に赤熱に變じて、唇はわ  
なわなと顫へた。半ば書きかけた用箋は、書取臺を滑べつて、ブルックス氏の無法に突き出さ  
れた膝の上へ、ばさりと音を立てて落ちた。彼女の立あがつたと同時に、ブルックス氏の毛む

くちやらかな手は、拳闘家の腕のやうな速度をもつて、クララの細い腕に巻きつけてゐた。彼女は、椅子に押しつけられた下半身を、意地悪くブルツクス氏の差し出した足が、より強い力で押しつけてゐるのを知つた。

「どうです、ミス？」

立ちあがつた男は、空らな方の手を、彼女の顛へてゐる唇へあてて、耳のはたで、かう叫びた。クララは、まつ暗な物に、全身押包まれて息塞らしくなつたやうに、ただやたらに両手を宙にもがいた。

「——どうせ働いて取る御錢なら、いいタイムをもちながら、樂に一と晩で稼げるんですよ、ミス。ね、云ふことを御聞きなさい！」

クララは、鏡前のやうに口を塞いだ男の掌の中で、いろいろなことを叫んだ。しかし、叫べば叫ぶほど、男の掌はびつたり口を塞いでしまつて、いまにも窒息しそうに思はれた。

「ボリス…… 獣…… 助けてツ…… 助けて……」

こんな言葉が、急に耳が聞えなくなつたときのやうに、口から出たと思つても、自分の聲に

はならなかつた。男は壓搾器のやうに、彼女の勒かな體を抱き締めた。不思議にかうした絶命的な瞬間にも、彼女の耳には、隣室で鳴らす三四臺のタイプライタアの音が、雨樋からたぎり墜ちる雨のやうに、騒々しくひびいて、麝香を籠めた、男の服から立つ匂ひがちよつと彼女の極度に逆立つた神経を撫でるやうに匂つた。

「離して——離して——離して——」

彼女は無言で叫びつづけた。言葉の意識といつしよに、緊張した體中のすべて力が、無我夢中で、壓迫する物を掴み立てては撥ねかへし、撥ねかへしては押し戻してゐるのを、ぼんやり自覺した。數千の邪淫な背が、數千の毒々しい唇といつしよに、彼女の頬を襲ふて、見る見る彼女の全身を穢がし腐らしてしまふやうに思れた。激昂した體全體の反抗力が、ともすると、粘土細工かなんぞのやうに、いまにもぼつくりと折れてしまひさうな危険をありありと感じた何をどうしたのか一切夢中であるうちに、急に男の掌が、唇からとれた。彼女は、太く息を吸ひながら、椅子を搔ね飛ばして、卓から離れた。

「……獣！獣！獣！」

クララは、息のつづく限り大聲をあげて叫んだ。

男の手からは、鮮々しい血が滴つてゐた。彼は、カラーとネクタイを隻手でなほしながら、鼻孔をうちひろげて嘲笑してゐた。眉間のところが、蒼白い亢奮を示してゐるほか、彼は、てんで何事も起らなかつたやうに平靜だつた。

「訴へるから——訴へるから——」

クララは、ひどく息を喘まして、血走つた眼を男の蒼白い額に濺いで云つた。

男は、半巾を出して、血の出た指を包みながら、

「——それぢや、この事務所は御嫌ひと仰向るんですか。よろしい。」

と、健康そうな齒を剥き出して笑つた。

まもなく、さつきのポイーがあらはれると、彼は、前よりも嚴格な調子で、

「サム、この貴婦人を御歸へししな。待て、すこし氣がへんな御方らしいから、よく注意するんだよ。その、引線かへつた椅子をもとへなほして。どうもかういふ御方があるから、めつたに未經驗な方は、御とほしが出來ないんだ。」

と云つて、何食はぬ顔で、卓の上の書類を隻手で引寄せた。

「どうぞ、こちらへ！」

ポイーは、小慥巧そうに、にやにやしながら、ガラス屏の把手を捻つて、次の部屋へ閉け放つた。

「貴方は、貴方は、きつとこのことを後悔しますよ！——」

クララは、崩れかかるやうな全身の重みを、卓の上へ載せた拳に支へて、齒と齒の間からせつなうに、これだけを云つて、さつさとそこを出た。

ビルデングを出ると、いままで怵へに怵へてゐた悲しさが、俄かにこみあげて来て、思はず意氣地のない泣きじやくりが、胸を衝いて來た。混み合つた下町の商業区域の人通りに、泣きを見せまいとして、彼女は、非常な努力で、

「さう、これがタイピストの仕事なんだね？——これがタイピストの仕事なんですわね？」  
と、がたがた總身を顛はせながら口走つた。

灰色の髪を、きりりと撫であげた、さつきの周旋業の婦の顔が、涙ぐむだ彼女の眼の前に現

はれて来た。クララは、大急ぎで、その前まで駆けつけた。と、出會ひ頭に、今朝同じ電車に乗った、若い女が、オペラ・バックの中へ、いま渡されたらしい紙片を、二つに折つて入れながら、表の階段をいそいそと降りて来るのにばつたり會つた。

「駄目だったの？」

女はさう訊ねるやうな眼付をして、クララの顔をじつと見ながら、氣輕な足取りで、横丁の方へ急いで行つた。

クララは、冷い水かなんぞを浴びせられたやうに、思はず體中がぞつとするのを覺えた。

「あの女も？——」

彼女は、登りかけた階段から、足を引くと、氣を換へて、さつさと電車通りへ取つて返へして、下宿を指して歸つた。

もう、何を見るのも嫌な氣がした。下町全體にひびきわたるやうな大聲で、何かを呪咀して見たいやうな氣狂ひじみた心持が、壁と云はず、窓と云はず、人間と云はず、扉と云はず、自動車と云はず、椅子と云はず、見る物のすべてにぶつつかると、むらむらと起つた。

「——でも、まだわたしだけは救はれたんだわ。」

電車へ乗ると、ほつとして、彼女は自分の完全を思つた。そして、心の中では、決して、今日の苦が苦がしい經驗については、一言も清へ洩らすまいと誓つた。

清の晩の歸へりは、意外に遅かつた。

クララは七時まで待つて、それでも歸へらなかつたので、自分だけの晚餐を済ましてしまつた。つねには決してそんなことがないので、彼女は何かしら不慮の出來事でも起つたのではなからうかしらと心配した。耳を済まして、表の扉の開け閉てに氣をつけて見ても、それらは、みなほかの下宿人の出はいりする物音であつた。

九時過ぎになつて、したたかに酔つた清が、帽子を前のめりにかぶつて、彼女の腕へころがり込むやうにはいつて来た。酒精に焼け爛れた呼吸が、何か呟いた彼の口から、彼女の顔一面へかかつた。

「まあ——どうなすつたの？ 何といふことでせう？ 清、どうしたの？」

彼の、護謨のやうな體から、その體たらくの説明を振り落すためのやうに、彼女ははげしく

彼を揺すぶつた。清は、うるさそうに彼女の腕を拂ひのけながら、乾いた獨り笑ひを洩らし  
た。

『失業者・萬歳！』

他愛もなく、自分の帽子をベッドの方をめぐり投り出すと、きつとなつて、そこへ棒立に  
なつてゐた彼女へ、

『おい、妻君、君は働くと云つたな？——昨夜、きつと働くと云つたな？ 覚えてるだらう？  
よもや自分の言葉を忘れあしなからう。さあ、働いてくれ！ 明日から、きつと働いて貰はう  
いいかね、この高橋さんは、今晚限り、竹村の野郎のところから、未來永劫に門前拂ひを食つ  
たんだ。』

と、赤らむだ眼を据えて、唳鳴り散らした。

クララは、開け放したままになつてゐる扉を締めた上で、兩脚を不確かに踏んで、人形のや  
うに床の上にぶらぶら動いてゐる彼の方へ、怖わ怖わ近寄つて行つた。

『どうなすつたのさ、一體？——困つちまうわね、貴方、そんなに酔つばらつては。ね、清、

ね、よくわたしにわけを云つて下さい。そんな、怖い顔をして、一體わたしが何か悪いことで  
もしたといふの？——』

彼は二三度空しく手を宙に動かしたのち、もう一度、皺喰れた聲でわき立てた。

『働くと云つたからにあ、働いて貰はう。へん、誰のお蔭げで、あすこのお拂ひ箱になつたの  
か知つてるかい？ さ、明日から、この高橋さんを食はしてくれ。立派な妻君らしく、亭主を  
樂にさしておくれ！』

さう云つたかと思ふと、手荒らくクララを引寄せて、

『おい、もう一度、あの公園へ行かう。おい、クララ、お前、あときは、いい娘だつたね。  
さ、公園へ連れて行つてくれ。俺は、急にその必要に迫られてるんだ。公園が、必要になつて  
來たんだ！』

と、手、足、肩、頸の嫌ひなく掴み立てて、無理に彼女をベッドの上へ押し倒した。

まつ赤になつて、彼女が搔ねあがると、彼はきよんとした眼を据えて、しばらく瓦斯燈を  
讀めてゐたが、

「水、水をくれ！」

と、息切れのした聲で叫んだ。

クララは、眼に涙を一杯溜めて、本棚の前から彼の恐ろしい妄動を見成つてゐたが、ふと氣をとりなほして、クロセット蔭の流し元へ行くと、コップへ水を入れて来て與へた。清は、喉を鳴らしながらそれをつかり飲み乾すと、きよろきよろそのへんを見廻はして、

「俺は、どうしたんだらう？」

と不審そうに訊ねた。

クララは、溢れ出る涙を、齒を食ひしぼりながらじつと怵へて立つてゐたが、突然、清が聲をあげて泣き出すと、自分もベッドへ掛けて、彼の頸を背と抱へた。

「どうしたの？ わたしに聴かして、ね！」

彼は、嗚咽びながら、とぎれとぎれに語つた。

「俺は、俺は卑怯な男だ。——クララ、俺は、金をこまかしてゐたんだ。……竹村の金を……それがとうとう昨日發見した……その金は、その金は、お前と俺とで使つたんだ。……今朝、俺

は、思ひ切つてまだ發覺されない方の使ひ込んだ集金のことを、すつかり告白するつもりで家を出たんだ……昨日は、竹村がゆるしてくれた……行つて見ると、あの竹村の顔を見ると、俺は、云ひ出すのがどうしても出来なくなつたんだ……そのまま黙つて發覺するまで待たう……そのうちに、何かほかの職業でも、ほかの家へでも傭はれるやうに掛合はうといふ氣が、つい起つて來たんだ……それで、俺は、俺は、黙つて朝はいつもどほり仕事へ出たんだ……そして歸へつて見ると、もう遅かつた、竹村の奴、ちゃんと俺の推測どほり方々を廻つて來たらしいんだ……それで、奴は黙つて俺にこの封筒を突出したんだ、たつた十弗札一枚はいつてゐたこの封筒を。そして、もう明日から來なくてもいい、何も云ふなつて云ふんだ。……それから俺は、あんまり氣がむしやくしやするので、小森んとこへ廻はつて、二人で飲んだんだ。……クララ、許るしてくれ、俺はきつと明日から新しい職業を探がすから、な、そしてこんどは、こんな馬鹿げたことをしないから。……ああ、俺は死にたい、死んでしまつた方が、こんな拙らない世の中にあるより、いくら樂だか知れない。金のこつちやない、金なんざあ、何でもないが、世の中が、嫌で嫌で、今日といふ今日は實に堪らないんだ。……しかし、しかし、俺に



あ何と云つても、お前といふものがあるからな……俺は死ねないんだ。……」

七

惣次郎は、電車を降りると、かぶつてゐた麥藁を、心持前へのめらせるやうにかぶりなほして、周圍に氣を配りながら、酒場のある町角から、暗闇の横丁へ切れて、そこだけ一軒まだ燈をまんどろにつけてある、支那人の洗濯屋の店へ、急ぎ足ではいつて行つた。

ぶーんとした石鹼の臭ひが、閉ぢ籠めた水蒸氣といつしよに、彼の輕快な身装をした體を押し包むだ。押しではいつた扉は、電気仕掛で、いつまでも、りんりんと鳴つてゐたが、排水をした何かのバルブのやうに、一定量の空氣を押し出すと、自然と閉ぢて、鈴の音はぱつたり消えた。

「誰もゐないかね？」

彼は、大聲で叫んで、とつっきの臺を、拳の先きで、とん、とん、とんと三つ小突いた。

瘦せた、鼠のやうな顔立の一人の支那人が、中仕切の青い扉を細目に開いて、彼の顔を眼を

細めて見ると、つかづかと出て來た。

「貴方、洗濯物？」

惣次郎は、ポケットから、赤い小さな紙片を取り出した。

「もう出來たらうね？」

支那人は、險はしい眼で、惣次郎の動作を窺がつてゐたが、紙片を手にとると、いろいろの洗濯物の載せてある棚の横手に、長い竹の針に突刺してある無数の赤い紙片のうちから、渡された紙片の他の半分を探がしあてて、まん中で二つになつた。何やらの漢字をびつたり合はせて見た。その間、惣次郎は、ツボンのポケットから、黄ろい色の、端書大のべつな紙片を取り出して、しきりにその上の文字を讀んでゐた。

「天地玄黄」

と書き出してある、その札の上には、かれこれ六十字ほどの、いろいろな漢字が印刷してあつた。

支那人の差し出した、シャツやカラーの包を、一旦臺の上へ置かして、彼はもう一度ポケット

トを探ぐつて、ちやらちやら、錢の音をさせながら、氣短な英語で、

『いくら？』

と訊ねた。

支那人は、洗濯物の包の上に、糸で縛ばつてあるリストに目をやつて、

『六十仙。』

とぶつきら棒に答へた。

金を渡すと、惣次郎は、包をそのままにして、

『いいかぬ？』

と、中仕切の青塗の扉を指しながら訊ねて、わざと支那人の眼につくやうに、黄いろい札を立てて見せた。

支那人は、ちらりと鋭どい眼で、扉の外の闇をうかがつたのち、黙つて、小さく頭を動かすと、臺の中ほどの、扉を内側からぎゆうと押した。

惣次郎は、青い扉の中へはいると、ぶいんとした支那煙草の臭ひに、ちよつと鼻柱をしかめ

て、軽るい咳拂ひをしながら、食器や椅子やベッドなどの散らばつた室の隅に、仰々しく、

『Water Closet』と立札した、やはり青塗の便所の扉の中へはいつた。便所と云つても、そこは二重になつてゐて、もう一つの汚い扉を押さないと兩便所へははいれなかつた。彼は、兩便所とは反對の、さほど汚れてない方の扉へ近づいて、天井からぶら下げである一本の繩を、ぐいぐいと二度曳いた。すると、ふしぎに、その扉が内側から開かれて、うすぼんやりしたどこかの光を浴びた、肥つた、どす黒い支那人が、きつと彼の顔を覗めながら、

『おはより。』

と英語で云つた。

彼は、その支那人に導かれて、燭力の弱い電燈のともつた、地下室への急な階子段を、むらなくやうに氣をつけながら、そろそろと降りた。

ぶいんとした、青臭い阿片の臭ひが、濕つほい、水氣を含んだ地下の冷氣といつしよになつて、眼に滲みるやうに板敷の土間から湧いた。彼は、ぬめぬめしたその板の上を、警戒深い眼を睨つて、支那スリツパーを穿いた案内者に従つて行つた。

もう一つの扉が、階子段のわきの、弱い電燈の光圈がつきるところに閉てきつてあつた。案内者が、何やら支那語で、吼えるやうに叫ぶと、扉は内側から聞かれて、むつとした煙と人のけはひとが、一圖に二人を捲き込んでしまつた。惣次郎のはいつたあとで、案内者はびつたり扉を閉ざすと、もう一度何かわめき立てて、自分は、室の一角隅の、蠶棚のやうに設けられたベッドの一つへ、長い煙草を啣へながら、吸ひ込まれるやうに腰を卸ろしてしまつた。

室内は、沸くやうな騒々しさであつた。惣次郎は、いくつも据えられてある卓の間を、いろいろな風に差し伸べられてある人間の足を除けて、正面の鐵柵で拵へてある受附めいた格子へすすんで行つて、

「先生！ これを見てくれ。」

と呼びかけながら、さつきの黄いろい紙片を、差入口のやうに彫り抜いてある孔へ差し出した。孔のうしろには、糸のやうな細い眼をした、白髪の爺さんが、半ば居睡りをでもしてゐるかの如くじつと不動の姿勢をして控へながら、口から稀薄な煙草の煙をばつばつと吐いてゐた。

彼の差し出した紙片を、應揚な身振りで受取ると、爺さんは、格子の奥の電燈にそれを透かして見て、尻あがりの支那語で、誰やらに物を云つた。電燈の蔭になつた暗らつほい隅から、もう一人の支那人の動いて来るけはいがして、ちようど電燈の笠で光が半分にとぎられた、闇と光との境目で、によつきり差し出された腕に、毒々しく光を吸つた銀貨を盛つた、小型な盆が、爺さんの手へ渡された。

つづいて、闇の中で、ぼそぼそと私語き合ふ支那語の音がして、格子に切られた煙管の皿の火が、ちらりと三角に尖がつて見えた。

「三十弗。」

爺さんは、惣次郎の鼻先へ、じすりと盆を置くと、煙管を口から外づして、かう云つた。

「は、今晚は、運が向いたね、先生！」

惣次郎は、葉巻へマツチをあてがふと、眼の角で盆の上を抑へるやうにちらと見て、口をもぐつかせてかう話しかけた。

「もつと買ふ、もつと儲かる！」

爺さんは、眼尻を垂れて笑つた。

銀貨をすつかりポケットへ入れると、惣次郎は、ちよつと爺さんへ挨拶して、室のなかほどまで戻つた。卓といふ卓には、いろいろな賭けが開かれて、まつ黒い人ばかりだつた。何やらの数字を読む支那語や、高らかに罵り合ふ酔ひどれの聲や、ときをり劈くやうに耳へ達する日本人の叫び聲などが、惣次郎の耳のはたで、がんがんに、鐵板を鳴らすやうにひびいた。一つの卓には、三人ほどの男が、肩と肩を鳩めて、強さうな酒をちびひび飲んでゐた。たしかに、その二人は、支那人の相當な商人體の男であつたが、もう一人は、惣次郎の見たところではどうしても日本人らしかつた。しばらく、その髯だらけな横顔を、次の卓の青笠をかけた電燈に透かして見てゐた彼は、葉巻を口から外すと、

「さうだ！」

と獨り語しながら、つかづかと、卓へ寄つて行つた。

「森先生ぢやありませんか？」

呼び掛けられた老人は、ぎよつとしたらしく、振り向いて、惣次郎の顔を、じつと瞻あげて

居つたが、それがくしに白い髯を二三遍扱くと、

「誰だつたけな、君は？」

と、撓つた聲で訊きかへした。

「小森といふものです。よく福州樓でお目にかかる。」

「おお、さうぢやつたか？——ええと、いまちよつと具合が悪るいが、この紳士たちと會談中ぢやからな。何か用かい？」

老人は、熟柿臭い息を、まともに惣次郎の顔へ浴びせた。

「いや、べつに用と申してはありませんのですが、意外なところで御目にかかつたので、ちよつと聲を御掛けしたやうな次第で。」

惣次郎はせせら笑ふやうに答へた。

老人は、圓るい顔を、支那人の方へむけると、何やら支那語で二た口三口云つて、

「いや、どうも。用があるなら、あの倶楽部の方へ来てくれ給へ。いまちよつと急ぎの用があつて會見しとるんぢやから。」

と、感丈高に肩を聳かして、惣次郎へ云つた。

『いや、どうも失禮致しました。しかし、先生、あまり、その、何ですよ、御儲けになると困りますぜ。』

惣次郎は、カラトの中へ首を縮めるやうにして、冷めたく笑ひながら、卓を捨てて出口の方へあゆみ寄つた。

さつきの肥つた支那人が、ベッドの前の小さな臺へ、自分の長い煙管を置くと、急いで立ちあがつて、扉を開いた。

『出るかね？』

惣次郎は、返事の代りに、一弗銀貨を、彼の手へ握らせた。

便所までその男に送られて、ふたたび洗濯屋へ出たときには、惣次郎の葉巻から、重たい灰がぼたりと落ちて、煙草は半分に減つてゐた。彼はその半分を、食器の散らばつた流しへ捨てると、がらがらした調子で、ベットへ掛けてゐる洗濯屋へ、

『先生、君んとこの便所は、混んでるね。』

と云つた。

支那人は、彼のユーモアが解せぬやうに、魯鈍さうな顔に皺をよせて、しまひに惣次郎の方で、ぶつくり言葉を切つたので、小さな眼をしばたたきながら、彼の出て行くのを陰險さうに見送つた。

惣次郎は、六十仙だけの洗濯物を抱へて、ぶらりと夜更の街へ出た。

『馬鹿票も馬鹿にはならん。』

さう呟きながら、同じ酒場の角から、電車道へ出て、ふたたび電車をとつて、下宿の方へ引かへした。

翌る朝、彼が下町の事務所へ出勤したときは、いつもよりすこし遅れた十時頃であつた。

『木村商會。』

入口のガラス扉に書いてある金文字のローマ字が、はげしく射し込む朝日に、黒く見えたほど、事務所の中には嚇と日光が燃えてゐた。彼は、ちよつと時計を出して見て、遅刻を恢復するやうに、つかづかと扉を開けてはいつた。

二階堂が、あまり確かでない英語で、電話の返答をしてゐるのが、奥の室からひびいた。控所になつてゐるとつつけの部屋には、軽い葉巻の匂ひが漂つてゐて、天井に反射した日光が、壁を傳はつて、いろいろなキャビネットや、デスクの上を氷のやうな餘映で磨き立ててゐた。曇ガラスのむかうに、ぼんやりした人間の後姿が見えたので、彼は來客だな、と思つた。帽子掛へきちんと麥藁を掛けると、彼は、ちよつと背丈を外らして、忙がしそうに、間のガラス扉を開いた。

「さよう、……ええと、その方ですと、いまちよつと品切れになつてゐますやうですが、……あ、ちよつと待つて下さい……いま主任の方が見えましたから、切らないで置いて下さい。」保は、かう答へて、惣次郎の方へ向きなほると、日本語で、

「あの廣告を見たといふ男がね、いま在庫品は何だか、いくらだとか云つて聽いてゐるんですがね、ちよつと僕には區別がつかないので、小森さん返事して戴けませんか。」と。受話器を彼の方へ向けながら、卓から身を退いた。

惣次郎は、保には返事しないで、氣取つた英語で、

「もしもし、私は小森です、え、あの廣告主ですが、もしもし、貴方はどなた？」

話しかけて、廻轉椅子へ迂るやうに腰を落とすと、話しながら、室のまん中に、煙草を喫つてゐる小柄な、一見日本人とも思はれる、伊太利人らしい中年の男を、じろりと眺めた。

「ウイナム・テイ・ストロングさんですね、ピツツパールの？　これは、長距離電話ですね、それぢや？……え、御話し申してもよろしふ御座います。……みんな屑ですよ。しかし、屑としてもナムバー・ワンです。主として機關車、レール、ボイラー、梁、鐵柱、さう云つたもので……へえ、目下手元にある分は、かすかす何ですな。もしもし、目下手元にある分は、あの廣告しましたとほりたつた五千噸だけですが。……え、そりあ、貴方、いつでも御目にかかけられますよ。……ヤードと云つても、直接私どもの所有ではありませんが、すぐ間近かのヤードへあづけてあるんです。……五千噸が一オンスも缺けちやゐないんです。もしもし、値段ですか、値段は二十六弗、それが一仙も上下なし、政府の制定價格よりもずつと安すいんです。……冗談仰曰ちやいけません。……え、これは日本人の會社ですよ。もちろん日本政府なぞと何の關係もないものです。御安心なすつてよろしいんです。……端物になりますと、安いは安いの

ですが、南シカゴの方へみな買ひ取られてありますから、ちよつと手にはいりませんよ。……はいつても、わづかなもんでせう。……船はちゃんとチャーターしてあります、そちらは汽車はどこまで利くんですか？……ともかくごらんになる？ いつー いつですつて？……明日の午前に、よろしい。ぢや、こつちへ御出になるんですな？ いや、そんな安値なら、どこかほかを御探がしになつた方がよろしいでせう。……第一相場にすると、三十仙がた安すいんですよ。さうぢやありませんか、二十六弗三十仙、ちあんと動かない相場が定まつてゐるぢやありませんか。騰る一方ですよ。戦争でね、どうして……ははア、いやそんな馬鹿なことはありませんよ。……では明日ですな。さよなら……あ、もしもし——。」

がちやりと受話器を掛けながら、隅の卓に米を搗くやうな音を立てて、タイプライタアを敲つてゐる二階堂に、彼は、わざと英語で訊ねた。

「この紳士は、何か御用ですか、君？」

保は、タイプライタアを捨てて立ちあがつた。

「あのやはり廣告の件で来たんだそうですがね。これが名刺です。」

彼は日本語で云つて、卓へ近寄ると、手紙の束の上に置いてある小さな名刺を撮みあげた。客は、椅子から立ちあがつて、手を差し伸べながら、

「木村さんですか？」

と訊ねた。

「いや、ちがひます。小森です。木村は會社の名前ですが、」

惣次郎は、客の手をゆるく握りながら、名刺へ眼を落とすと、如才ない手振りで、椅子を指した。

「まあ、御掛け下さい。すこし用があつたもので、ちよつと遅くなりました。何か御用件ですか？」

コルトスといふ名を與へたその男は、ちよつと會釋しながら、椅子をすすめた、惣次郎の眼をじつと覗めた。彼の英語もどことなく外國訛があつた。

「その鐵屑ですが、いつたいいくら御有りですか？」

惣次郎は、電話で答へたと同様なことを繰返へした。彼の説明を一と渡り聽いてしまふと、

コルトアは、

「私は、非公式に伊太利の陸軍を代表してるもんですが、是非一つその鐵屑を見さして戴けませんか？」

と、言葉の足らぬところを、自由に肩と手を振り動かして云ひ足した。

「只今も、ピッツパールからの電話に答へましたとほり、ごらんになる分には一向差支はないのです。——だか、問題は送先ですな、いつたいどちらへ御届けするんです？」

「直接に伊太利へ。」

「と仰白ると、もちろん船は？」

「ニューヨークに碇泊中で。」

「途中、鐵道ですな？」

「恐らくさうでせう。」

「私の方では積荷までの手續はいたしますが、この際ですから、不親切なやうでもそれからあと責任をもち兼ねますよ。」

「値段はすこし高し。」

「そりあ、運賃を見越しての御言葉でせうが、こつちではそれ以下に手離せません。第一、外國へ出すとなると、目下手續がすこし面倒でしてね。私の方としても氣が向かないのですよ。」

「五千噸と云ひましたね、確實に五千噸？」

「懸値のないところ、五千噸です。」

「まかりませんか？」

「一仙たりとも引けません。」

「ともかく見たい。連れて行つてくれませんか、そのヤードへ。」

そこへまたぢりぢりぢり——と電話が鳴つた。

木村からであつた。

「君、あの鐵はよく云つて置いたかね？ 實は、手附の金だね、今朝どうやら拵へたが、すぐもつて行くから待つてゐてくれ給へ。よしかね？ 猶念のために、君、あの男へ電話でもつて押へて置くやうにもう一度話したらどうだね？」



木村の、鼻にかかった日本語が、西洋人の電話を聞き慣れた耳には、ひどく聞きとれ難く、やうやくこれだけのことを傳へた。

「大丈夫、大丈夫。」

惣次郎は、かう念を押して、彼の來るのを待つて、來客同伴の上、いつしよにヤードへ行かうと云つた。

「實は、今ちよつとこの會社の社長から電話がありましたな。すぐここへ來るから、御目にかかつた上で御同道したいと申しますが、如何です、御待ちになりますか？」

伊太利人の方へ向きなほると、彼はかう云つて、ポツケツトから太卷の煙草を出して、尖端を齒でちぎつて吐き出した。

伊太利人は、氣短かそうに時計を出して見ながら、

「何分かかります？」

と訊ねた。

「すぐです、すぐやつて來ますよ、コルトスさん。」

對手は、待ち切れないと云つた風に、急ぎ込んで、

「そのヤードといふのは、一體どこにあるんですか？ 遠いんですか？」  
と、訊ねた。

「左様、さほど遠くもありません。南區の十一丁目ですがね、コンクリンのヤードですよ。自動車なら五分とかかりますまい。」

客は、しばらく上は眼をして、何かかんがへ込んでゐるやうな様子をしてゐたが、火の消えた自分の葉巻を、無意識に二ち口ほど吸つて、思ひ出したやうにマッチを求めた。

「あ、私もかう長くなると、事務所の方に人を待たしてあるんですが、電話で傳へて置きますから、ちよつと電話を貸して戴けませんか？」

彼は懐中マッチを返へしながら、惣次郎に訊ねた。

聞き慣れない伊太利語の電話が、同じ下町區域のある番號へ掛けられた。惣次郎は、今朝來た手紙類を、いちいちナイフで封筒を切つて、眼をとほしにかかつた。

「どうも有難う。もう少しなら、大丈夫です。何しろ、政府筋のコントラクトをやつてるもの

で、私も、體にあまり餘裕がないのです。」

伊太利人は、ふう云つて、電話機の紐を、手からほどくやうにして卓の上へいた。

## 八

木村があたふたと駆け込んだのは、それから十分とも経たぬうちだつた。

彼は、自動車で駆けつけたらしく、同じ下町でもかなりの距離のある自分の方の事務所からいつもの半分ほどの時間でやつて来た。

紹介が終ると、三人は連れ立つて、ビルディングのエレヴェターで階下へ降りた。

建物の前のサイドウォークへびつたり車體を擦りつけるやうに留められてある自動車へ乗つて、三人は混み合つた下町を、いろいろな車輛に邪魔されながら、大通りからブルヴァールへ出て、滑かな車道を、矢のやうに南へ走つた。街は軍人でいっぱいだった。

「十一丁目、コンクリンの鐵屑ヤード、わかつたかね？」

惣次郎は、運轉士へ、もう一度念を押した。

コルトスは、戦争の話などをしながら、木村と同じ側へ掛けて、しきりにラテン系統の華かな身振りを見せた。木村は、禿げた額際の汗を、いくども半巾で拭ひながら、あまり流暢でない英語で相槌を打つて、しきりと糸切齒の金を見せてゐた。

ヤードの前で自動車が留まると、惣次郎は先に立つて降りた。

そこだけ板敷になつた舗道をつかぶかと事務所へ行くと、開け放つて居る扉の中には、待ち構へてゐたやうに、馬のやうに顔の長い男が、彼を見て帳場から手を差し伸べた。

「小森さん、御早う！」

あとからつづいてはいつて来る二人を見て、彼は、高椅子から降りると、帳場をぐるりと廻はつて、室のまん中へ姿をあらはした。

「あの約束をしてゐた鐵屑の、ナムバー・ワンね、あれの手附をもつて来たんですが、なほ、もう一度見せてくれませんか？」

惣次郎は、二人を紹介したあとで、コンクリンへ向けて云つた。

じろりと、同伴の伊太利人の横顔へ眼を遣つたコンクリンは、狡猾そうに、ちよつと笑つて

見せて、隻手を頭の傍へあげると、二本の指で耳のうしろを搔いた。

「私は、君がたは、少し遅かったと思ひますよ、その肩のナムバー・ワンなら、」  
惣次郎は、煙草を口から抜いた。

「遅いとは？」

「いやほかでもないんだが、いましがた、その何だ、ビツツパールの方から電話で、すつかりこつちの云ひ値で賣却済にしちまつたところなんですよ。先方の話では馬鹿安だつて、賞めちぎつて、すこしはゆとりをさへつけて、ほくほくもので引受けた次第です。」  
惣次郎は、顔の色を變へた。

「でも、君は、あんなに堅い約束をして置いたぢやありませんか？——そして、ね、木村さん貴方は今現金をもつていらしたんでせう？ それにも拘らず、賣つて了うなんてことはない筈です！」

コンクリンは、投げ出したやうに肩を揺すぶつた。

「そこですよ。——商賣は商賣！ 君の方で、一昨日手金を打つて置けあ、私んところでも手離

すわけはないんです、ね、手金は、しつかと品物に錨を卸すものですね。ところが、最初貴方が来てからもう一週間になるんですよ。その間、私は、この鐵に羽根の生えて飛んで行く時節に、べんべんと五千噸寝せて、七日間の錆を浮かしちまつたわけなんです。私の賣却を急がない理由は、どこを探がしたつてないでせう。どうして、貴方が今日私を恨むことが出来ましか？」

惣次郎は、白い顔をして、木村の脱帽したままになつてゐる禿げた額を睨らむだ。

「困つたな。金がちよつと遅れたために、御聞きのとほり賣れつちあつたそうです。どうしますか？」

木村は、剃り立ての鼻の下を醜く伸ばしながら、同じく日本語で訊きかへした。

「この客は一體いくらなら引取ると云ふのだね、小森さん？」

さう云つて、彼はそつと傍の伊太利人を顎で差した。

「どうも二十六弗がすこし高いといふくらゐなんですからね。」

「聽いて見給へ、やつぱり君へ云つたと同値で賣つたもんか、誰へ賣つたかを！」

今度は、彼の顎は、コンクリンの方を差した。

「同じこと、同じ値段ですとも。私のところや、二様な値段はないのですからな。ただ、ナム・パイ・ツウの方をすこし餘分に引取つて貰ふ契約をしたんです。先方は——ええと、ここへ書き取つてありますが、ストロング、ウリアム・テイ・ストロングといふピッツバールの、やはり、貴方がた同様、仲買商ぢやてな。もう追つつけ、その支店の人が、鐵道の方と交渉してやつて来ることになつてますよ。」

伊太利人は、性急に惣次郎を呼び立てた。

「どうです、見せてくれますか？ すこし急ぎますから、早くして下さい！」  
木村が代つて挨拶した。

「あ、う、實は、そのことですが。いま、ごらんのとほり掛け合つて見ましたが、實は、當方ではよつと手金が遅れたもんで、誰かほかへ轉賣しちまつたといふやうな次第で。」

ぶるぶる々と胴震ひするやうに、上半身を動かしたコルトスは、物をも云はず、葉巻の端を嚙むと、くるりと踵で廻れ右をして、

「ぢや、私に用はない！」

と云ひ捨てて、とつとと板敷を踏みながら、足早に店を出てしまつた。

「その男ですよ、今朝、ピッツバールから電話で聽いて來たのは！ ストロングと云ひましたよ。可怪しいな。奴さん、恐ろしく機敏な奴だな。木村さん、何かこれには、どこかにループホールがあるんだと僕は思ひますがね。——」

さう云つて、出かかつた二人の背後に、コンクリンの馬のやうな顔は、のんきそうな大欠呻をしたのち、

「さよなら、小森さん！」  
と擲擧ふやうな聲で叫んだ。

「あの男が電話をかけた——その間あの伊太利人が待つてゐた——すると貴方の電話があつた——それから、それからアと、待てよ、あの伊太利人が電話を使った——伊太利語でどこかへ話をした——貴方が來た——出る、ここまで來る間にストロングの方から電話で……やつ、これは、一本喰つたね。僕は、あの伊太利人が怪しいと思ふんですよ！ てつきりあい奴は、ス